

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第657集

むかい しん でん

# 向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

2016

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
(公財)岩手県文化振興事業団



# 向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査





## 序

岩手県には旧石器時代から連綿と続く数多くの遺跡が残されており、先人達が創造してきたこれらの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、私達県民に課せられた責務であるといえましょう。一方、広大な面積を有し、その大部分が山地である本県にあっては地域開発による社会資本の充実も県民の切実な願いであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和は今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもと、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸沿岸道路建設事業に関連して平成26年に発掘調査を行った宮古市田老字向新田164-22他に所在する向新田Ⅲ遺跡の発掘調査結果をまとめたものであります。

発掘調査によって、縄文時代前期、同晩期から弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑などが確認され、この地域の該期の集落跡の存在が明らかになりました。

この報告書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成28年2月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 菅野洋樹

## 例 言

- 1 本書は岩手県宮古市田老字向新田164-22他における向新田Ⅲ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は三陸沿岸道路建設に関連して、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所の委託を受け、(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
- 3 岩手県遺跡台帳登録の遺跡番号と調査時の遺跡略号は以下のとおりである。  
向新田Ⅲ遺跡：遺跡番号 KG74-2133、遺跡略号 MSDⅢ-14
- 4 本調査の面積と期間及び担当者は以下のとおりである。  
面積1,805㎡ 平成26年9月16日～9月30日 古館貞身  
平成26年10月1日～11月7日 鈴木博之・古館貞身  
面積 200㎡ 平成26年11月17日～12月5日 鈴木博之・久保友咲
- 5 室内整理期間及び担当は、平成27年1月16日～3月31日までで、古館貞身が担当した
- 6 本書の執筆はⅠを国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、Ⅱを鈴木、Ⅲを古館が行い、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵは調査担当者間で分担し、編集は鈴木博之が行った。出土遺物の土器に関しては当センターの金子昭彦の監修をうけた。
- 7 基準点測量及び航空写真撮影は以下の業者に業務委託した。  
基準点測量・・・釜石測量設計株式会社  
航空写真撮影・・・東邦航空(株)
- 8 自然科学関連の分析鑑定は以下の機関に依頼した。  
放射性炭素年代測定(AMS測定)・・・(株)加速器分析研究所  
石質鑑定・・・花崗岩研究所
- 9 本書では国土地理院発行「田老 1：50,000」地図を使用した。また、土層及び土器の色調は「新版 標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修)に準拠した。
- 10 現地調査及び整理作業にあたり、以下の方々にご指導・ご助言を賜った。(五十音順、敬称略)  
石川日出志(明治大学)、宮古市教育委員会
- 11 調査に関わる諸記録及び出土遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 12 今回の調査に関わる成果については、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集「平成26年度発掘調査報告書」で公表しているが、本書の記載内容が優先する。

## 目 次

I	発掘調査に至る経過	1
II	立地と環境	3
	1 遺跡の位置と地理的環境	3
	2 周辺の遺跡	4
	3 基本層序	7
III	野外調査と室内整理の方法	8
	1 野外調査	8
	(1) 調査経過	8
	(2) グリッドの設定	9
	(3) 遺構の検出と精査	9
	(4) 写真撮影	9
	2 室内整理	10
	(1) 作業経過	10
	(2) 遺物整理の方法	10
	(3) 遺構図面の整理	10
	(4) 写真撮影と整理	10
IV	検出された遺構	12
	1 竪穴住居跡	12
	2 土坑と陥し穴状遺構	30
	3 焼土遺構・炉跡・不明遺構	39
V	出土遺物	42
	1 縄文～弥生土器	42
	2 石器・石製品	44

VI 自然化学分析 .....	71
1 放射性炭素年代測定 (AMS測定) .....	71
VII 総 括 .....	75
1 他遺跡との比較 .....	75
2 遺構について .....	75
3 遺物について .....	76
4 ま と め .....	76
報告書抄録 .....	132

## 図版目次

第1図 遺跡位置図 .....	2	第24図 SX04、05、06、07、08焼土遺構・炉跡、 SX09不明遺構 .....	40
第2図 地形分類図 .....	5	第25図 遺構内出土土器 (1) .....	50
第3図 周辺の遺跡図 .....	6	第26図 遺構内出土土器 (2) .....	51
第4図 基本層序模式図 .....	7	第27図 遺構内出土土器 (3) .....	52
第5図 遺構配置図・グリッド図 .....	11	第28図 遺構内出土土器 (4) .....	53
第6図 SI01竪穴住居跡 .....	13	第29図 遺構内出土土器 (5) .....	54
第7図 SI02竪穴住居跡 .....	14	第30図 遺構内出土土器 (6) .....	55
第8図 SI03竪穴住居跡 .....	15	第31図 遺構内出土土器 (7) .....	56
第9図 SI04竪穴住居跡 .....	16	第32図 遺構内出土土器 (8) .....	57
第10図 SI06竪穴住居跡 .....	17	第33図 遺構内出土土器 (9) .....	58
第11図 SI06、SI07、SI16竪穴住居跡 .....	18	第34図 遺構内出土土器 (10) .....	59
第12図 SI08、SI14竪穴住居跡 .....	21	第35図 遺構内出土土器 (11)・ 遺構外出土土器 (1) .....	60
第13図 SI09竪穴住居跡 .....	22	第36図 遺構外出土土器 (2) .....	61
第14図 SI10竪穴住居跡 .....	23	第37図 遺構外出土土器 (3) .....	62
第15図 SI12竪穴住居跡 .....	24	第38図 遺構外出土土器 (4) .....	63
第16図 SI13竪穴住居跡 .....	25	第39図 遺構外出土土器 (5) .....	64
第17図 SI15竪穴住居跡 .....	27	第40図 遺構外出土土器 (6) .....	65
第18図 SI18竪穴住居跡 .....	27	第41図 遺構内出土土器 (1) .....	66
第19図 SI19竪穴住居跡 .....	29	第42図 遺構内出土土器 (2) .....	67
第20図 SK01、02、03、04、05土坑 .....	31	第43図 遺構内出土土器 (3) .....	68
第21図 SK06、07、08、09、10、11土坑 .....	33	第44図 遺構内出土土器 (4) .....	69
第22図 SK12、13、14、15、16土坑 .....	36	第45図 石製品 .....	70
第23図 SK17土坑、SX01、02、 03焼土遺構・炉跡 .....	38		

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡……………4	第2表 石器・石製品観察表……………48
-----------------	----------------------

## 写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景……………79	写真図版27 遺構内出土石器(5)……………105
写真図版2 SI01竪穴住居跡……………80	写真図版28 遺構内出土石器(6)……………106
写真図版3 SI02竪穴住居跡……………81	写真図版29 遺構内出土石器(7)……………107
写真図版4 SI03竪穴住居跡……………82	写真図版30 遺構内出土石器(8)……………108
写真図版5 SI04竪穴住居跡……………83	写真図版31 遺構内出土石器(9)……………109
写真図版6 SI05竪穴住居跡……………84	写真図版32 遺構内出土石器(10)……………110
写真図版7 SI06・7竪穴住居跡……………85	写真図版33 遺構内出土石器(11)……………111
写真図版8 SI08・14竪穴住居跡……………86	写真図版34 遺構内出土石器(12)……………112
写真図版9 SI09竪穴住居跡……………87	写真図版35 遺構内出土石器(13)……………113
写真図版10 SI10竪穴住居跡……………88	写真図版36 遺構内出土石器(14)……………114
写真図版11 SI12竪穴住居跡……………89	写真図版37 遺構内出土石器(15)・ 遺構外出土石器(1)……………115
写真図版12 SI13・16竪穴住居跡……………90	写真図版38 遺構外出土石器(2)……………116
写真図版13 SI15竪穴住居跡……………91	写真図版39 遺構外出土石器(3)……………117
写真図版14 SI18竪穴住居跡……………92	写真図版40 遺構外出土石器(4)……………118
写真図版15 SI19竪穴住居跡……………93	写真図版41 遺構外出土石器(5)……………119
写真図版16 SK01～SK04土坑……………94	写真図版42 遺構外出土石器(6)……………120
写真図版17 SK05～SK08土坑……………95	写真図版43 遺構外出土石器(7)……………121
写真図版18 SK09～SK12土坑……………96	写真図版44 遺構外出土石器(8)……………122
写真図版19 SK13～SK16土坑……………97	写真図版45 遺構内出土石器(1)……………123
写真図版20 SK17土坑、SX01～SX03 焼土遺構・炉跡……………98	写真図版46 遺構内出土石器(2)……………124
写真図版21 SX04～SX07焼土遺構・炉跡……………99	写真図版47 遺構内出土石器(3)……………125
写真図版22 SX08焼土遺構、SX09不明遺構、 基本土層……………100	写真図版48 遺構内出土石器(4)……………126
写真図版23 遺構内出土石器(1)……………101	写真図版49 遺構内出土石器・石製品(5)……………127
写真図版24 遺構内出土石器(2)……………102	写真図版50 遺構外出土石器(1)……………128
写真図版25 遺構内出土石器(3)……………103	写真図版51 遺構外出土石器(2)……………129
写真図版26 遺構内出土石器(4)……………104	写真図版52 遺構外出土石器(3)……………130
	写真図版53 遺構外出土石器(4)……………131

## 凡 例

- 1 遺構実測図の縮尺は以下の通りで、各図にスケールと縮尺を付した。  
堅穴住居跡 (SI)・不明遺構 (SX)・・・1/60  
土坑・陥し穴状遺構 (SK)・・・1/40 焼土・炉跡 (SX)・・・1/30
- 2 遺構断面図の層位については、基本層序にローマ数字を用い、遺構の埋土には算用数字を用いた。
- 3 遺構断面図中の「S」は礎である。
- 4 各遺物の縮尺は以下の通りである。(遺物写真図版については縮尺不定である)  
土器・礫石器・・・1/3 剥片石器・石製品・・・2/3
- 5 遺構の略号は下記の通りである。  
SI・・・堅穴住居跡、SK・・・土坑、SX・・・焼土・炉跡・不明遺構とした。
- 6 遺構名・番号については整理時の混乱を避けるため、調査時に付した番号を使用し極力変えないようにしたが、堅穴住居跡については、SI11とSI17が欠番となる。
- 7 石器について、掲載番号の298～348までは、写真掲載のみである。
- 8 遺構図版、遺物図版の凡例は以下の通りである。



焼土



粗い磨り面



磨いた磨り面



節理



自然面



敲き痕

## I 発掘調査に至る経過

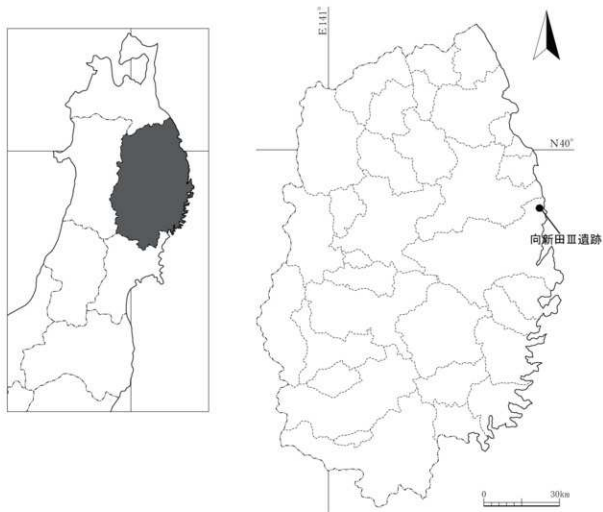
向新田Ⅲ遺跡は、一般国道45号三陸沿岸道路事業（田老～岩泉）の事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

三陸沿岸道路は、宮城、岩手、青森の各県の太平洋沿岸を結ぶ延長359kmの自動車専用道路で、東日本大震災からの早期復興に向けたリーディングプロジェクトとして、平成23年度にこれまで事業化されていた区間も含め、全線事業化された復興道路である。

当該遺跡に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成25年4月8日付け国東整陸一調第53号により、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長あてに試掘調査を依頼し、平成25年5月8日～5月9日にわたり試掘調査を行い、平成25年5月10日付け教生第935号により、工事に先立って発掘調査が必要と回答がなされたものである。

その結果を踏まえて、岩手県教育委員会と協議を行い、平成26年4月1日付けで公益財団法人岩手県文化振興事業団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所）



国土地理院発行地形図を改変

第1図 遺跡位置図



## II 立地と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

向新田Ⅲ遺跡は岩手県宮古市田老字向新田164-22他に所在し、宮古市役所田老総合事務所の北約7kmに位置する。遺跡の調査区中央における緯度・経度は、北緯39度47分13秒、東経141度57分54秒、である。国土地理院発行の5万分の1地形図「田老」図幅に含まれる。

宮古市は岩手県の最東端に位置し、東には太平洋、西には北上山地を擁する。現在の宮古市は、平成17年6月6日に田老町、新里村との新設合併により新制宮古市となり、平成22年1月1日に西に隣接していた川井村を編入合併した。これにより、人口は56,854人、面積は1,259.89km<sup>2</sup>（平成26年12月1日現在）となり、隣接する自治体は北に下閉伊郡岩泉町、西に盛岡市、南西に遠野市、花巻市、南に下閉伊郡山田町、上閉伊郡大槌町となった。

本遺跡の所在する田老地区は宮古市北部に位置する。前述のとおり平成17年に市町村合併により宮古市となったがそれ以前は下閉伊郡田老町であった。旧田老町は明治29年と昭和8年の二度にわたる三陸大津波で甚大な被害を受け、その結果日本有数の規模を誇る高さ10mに及ぶ巨大防潮堤（防浪堤）を建設した。昭和35年のチリ地震津波では、他市町村に比べ被害の程度は微細であった。平成23年の東日本大震災においては、この防潮堤があったにもかかわらず甚大な被害がもたらされた。震災後の復興については道半ばであるが、三陸鉄道全線復興や、高台移転事業、震災遺構の保存、漁業の振興など種々の施策が進行中である。今回被害が大きかったのは旧田老町の中心部となる地域で、ここは地形分類図（第2図）による海岸平野部分であるが、浸水域には田老町寺山遺跡遺跡（縄文時代、散布地）1件だけで、しかも山裾の浸水域際に立地するもので、これ以外に遺跡はこの場所には存在していない。このことは、防潮堤のない時代の津波被害を免れる方法の一端をうかがい知ることができるような気がする。今回の調査地は、この海岸平野部から北上した箇所広がる海岸段丘上の丘陵地である。この付近の地形を概観すると、西方で高く、東方に行くに従って高度が下がることが2段の段差が生じている。一つは標高900m以上の山地となる地域に対してその東側に400m～700mの孤立した山塊が分布する。この間には少なくとも200m以上の高度不連続線が認められる。もう一つの高度不連続線は、太平洋海岸線から3～4km内陸にあって、海岸線にはほぼ並行して見られるもので、これは地形の性格からいって、山地と丘陵地の境界線に相当する。いわゆる高山性の山地、中・低山性の山地、それに丘陵がそれぞれ比較的明瞭な境をしめして、南北方向に帯状に配列している状況を観察できる。このことは国道45号を利用するとき、進行方向に対して左右に広がる景色を見ればある程度理解できる。また、河川は延長20kmにも満たない中小河川のみである。その大半はこの近辺で最高峰の峠ノ神山（1229.7m）を中心とする山地に源を發し、大半は、東に流れて直接太平洋に注いでいる。各河川沿いには、狭長な谷底平野が断続的に形成されているが、まとまった平野とはなっていない。河岸段丘も一部には見られるが特に規模の大きいものはない。太平洋海岸線に沿う幅3～4kmの地帯は、古い海岸段丘が開析されて生じた丘陵地であるが、段丘面はほとんど失われ、大部分は基盤岩類の露出する地帯となっている。この丘陵は、比高100mにおよぼ海食涯をもって太平洋に臨んでおり、海岸の大部分は礎で、海水浴のできるような大規模な浜の発達は見られない。標高147mを測る本遺跡もこの丘陵面に立地する。

## 2 周辺の遺跡

宮古市との合併以前では、田老地区には63箇所の遺跡が登録されている。その後、宮古市との合併により、宮古市教育委員会による分布調査や、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査によって遺跡の新規発見や統合・範囲変更が行われ、平成26年度岩手県遺跡情報検索システムによると田老地区の遺跡は74箇所となった。本節では真崎以北に分布する遺跡を取り上げ、本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

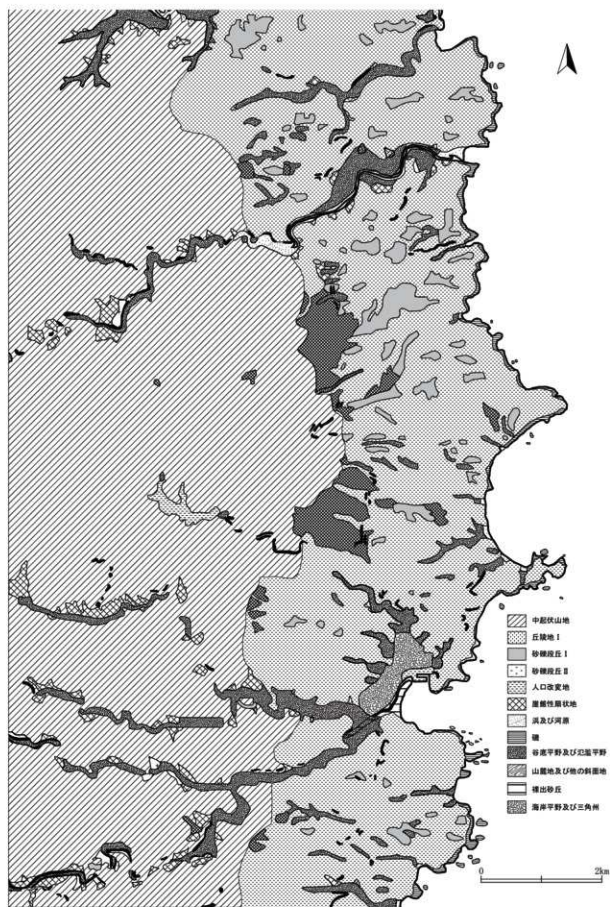
田老地区において開発等に伴う大規模な発掘調査が行われた事例は少ない。その中で、比較的大規模な調査事例として、昭和56年度に行われた田老大規模年金保養基地（現在のグリーンピア三陸みやこ）建設に伴う発掘調査がある。この調査では縄文時代早期～前期の土器、石器が出土しているものの、これに伴う遺構は確認されていない。なお、この発掘調査の成果は「小堀内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」として刊行されているが、現在はそのような名前で岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡はない。この報告書に記載された遺跡の位置と現在の遺跡分布図を照合すると、向新田Ⅹ遺跡（8）付近と思われる。近年では、平成25年度に三陸沿岸道路建設に伴い、乙部遺跡（25）の発掘調査が行われている。この調査では縄文時代前期～中期の土器、石器が出土している。また、これまでに行われた分布調査でも田老地区北部においては縄文時代各時期と弥生時代の遺物が採取されているが、それ以降の遺物は確認されていない。このように、田老地区北部では縄文時代の遺跡が数多くあると考えられるが、これまでに集落跡が確認された事例は小堀内Ⅰ遺跡の調査に先立って行われた昭和54年の試掘調査のみで、当地域における縄文時代から弥生時代における様相を詳細に把握するに至っていない。

一方、真崎以南では土師器や鉄滓といった古代以降のものと思われる遺物が採取できる遺跡もあり、向新田Ⅲ遺跡が位置する北部の丘陵上とは若干ではあるが、異なった様相を示す可能性がある。

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代	種別
1	摂待	縄文	散布地
2	鯨の煙	縄文	城館跡(伝)・散布地
3	水沢Ⅰ	縄文・弥生	散布地
4	向新田ⅩⅥ	縄文	散布地
5	向新田ⅩⅤ	縄文	散布地
6	向新田ⅩⅣ	縄文	散布地
7	向新田ⅩⅡ	縄文・弥生	集落跡
8	向新田Ⅹ	縄文	散布地
9	向新田ⅩⅠ	縄文	集落跡
10	向新田ⅩⅢ	縄文・弥生	散布地
11	向新田ⅩⅤ	縄文	散布地
12	向新田Ⅹ	縄文	散布地
13	向新田Ⅳ	縄文	散布地
14	向新田Ⅲ	縄文	散布地
15	向新田Ⅱ	縄文	散布地

No.	遺跡名	時代	種別
16	向新田Ⅰ	縄文	散布地
17	小堀内南Ⅰ	縄文	散布地
18	小堀内	縄文	散布地
19	青野滝北Ⅲ	縄文	集落跡
20	青野滝北Ⅱ	縄文	集落跡
21	青野滝北Ⅰ	縄文	集落跡
22	物見峠Ⅰ	縄文	集落跡
23	物見峠Ⅱ	縄文	散布地
24	物見峠Ⅲ	縄文	散布地
25	乙部	縄文	散布地
26	青野滝Ⅲ	縄文	集落跡
27	青野滝Ⅱ	縄文	集落跡
28	青野滝Ⅰ	縄文	キャンプ地
29	重津部Ⅰ	縄文	散布地



第2図 地形分類図



第3図 周辺の道路

### 3 基本層序

調査範囲の現地地形は、平坦であるが、元々の地形は南北には高低差なく、東西方向での高低差が大きい。いわゆる南北に軸をおいて馬の背状になりそこから東へかけて斜度を増しながら東方向に下降していく傾斜で特に南東方向へ向けての落ち込みが急となる。また一部切り盛りが行われた箇所もあるため、調査範囲の南端部と北東端の2箇所土層観察を行った。以下がその模式図である。

南端部基本層序

I層	10YR4/4	褐色土	(表土)	15cm
II層	10YR2/1	黒色土		15cm
III層	10YR2/3	黒褐色土		30cm
IV層	10YR3/3	暗褐色土		30cm
V層	10YR5/8	黄褐色土		15cm
VI層	10YR5/8	黄褐色土	礫多く混じる	層厚不明

北東端基本層序

	盛り土・・・黒褐色土と黄褐色土が混じり合う	40cm
II層		40cm
III層		20cm
IV層		20cm
V層		40cm
VI層		層厚不明

第4図 基本層序模式図

### Ⅲ 野外調査と室内整理の方法

#### 1 野 外 調 査

##### (1) 調 査 経 過

調査は9月16日(火)から始まった。調査面積は2,005㎡であるが、地権者の住居移転に伴う作業の進捗状況により、調査箇所を限定しながら、段階的な調査を行わなければならない状況であった。結果的には2段階に分けて調査が行われた。1回目の調査は11月7日(金)までで、1,805㎡の調査を終了し、2回目は住居移転作業の終了を待って、11月17日(月)から12月5日(金)までの期間で残り200㎡の調査を行った。

今回の調査は地権者の住居移転を伴うが、住居の移転先は今回の調査範囲に隣接し、この場所も遺跡にくくられている。この隣接する移転先に関しては、宮古市教育委員会による調査がすでに行われていた。

調査範囲は畑、資材置き場に利用されていた模様で、平坦地である。また宮古市教育委員会の調査時には一部残土置き場としても利用されていたとのことであった。

地権者の弁や、宮古市教育委員会の調査により調査区南東部にかけて落ち込みがあることが事前にわかっていたため、大量に出るであろうと予測される残土の置き場について苦慮した。このことについては幸い調査範囲外の工事用地内に置くことが可能となったがパワーショベル、及びキャリアダンプの通路を考慮した調査計画を立てる必要があった。さらに、調査範囲内に径40mmの水道管が調査範囲を縦断するかたちで埋設されており、しかもその図面がないため、慎重な作業をしいられることとなった。

当初、調査員1名、登録作業員14名、実質11名前後の人数で雑物撤去を行うが、そのほとんどが雑草の刈り取りと住居に伴う棄物の撤去であった。その後、1×5m、2×8mのトレンチを合計8箇所に入れ遺構遺物の様子を模索した。結果、遺物は全面的に出土するが遺構は調査範囲の南側には薄く、中央部から北寄りの箇所に集中することが予想された。以後重機による粗掘と人力による粗掘を部分的に分けて行って遺構検出につなげていった。

10月1日(水)からは上記人数に、調査員1名、作業員22名の増員があり調査が本格化され、遺構の検出と精査を同時進行で行っていくことができた。

10月17日(金)には基準杭の打設が行われ、調査範囲内にグリッドを設定できるようになった。

10月30日(木)には航空写真撮影を行った。これは強風により、予定されていた日より1日遅れのことであった。また同日、現在行っている調査範囲についての部分終了確認が岩手県教育委員会生涯学習文化課により行われた。

11月4日(火)には住居移転に伴う作業の予定が明らかになり、それまで調査に入れなかった部分の調査日程が11月17日(月)からと提示された。

11月7日(金)には前述のとおり、1,805㎡の調査について終了した。

11月17日(月)から調査再開した。調査員1名の交代があったが、作業員は同じである。重機を使った粗掘に4日かかったが、遺構検出と精査とはほぼ同時進行的に行った。

11月27日(木)には岩手県教育委員会生涯学習文化課により終了確認が行われた。

12月5日(金)には調査のすべてが終了し撤収となった。

## (2) グリッドの設定

グリッドの設定には、公共座標第X系（世界測地系）を使用した。そのために調査区内に基準点2点と補助点4点を打設した。各基準点及び補助点の座標値は以下の通りである。

基準点 1	X = -23,012.000m	Y = 96,920.000m	H = 147.457m
基準点 2	X = -23,012.000m	Y = 96,936.000m	H = 146.007m
補助点 1	X = -22,992.000m	Y = 96,920.000m	H = 146.936m
補助点 2	X = -23,024.000m	Y = 96,920.000m	H = 147.800m
補助点 3	X = -22,992.000m	Y = 96,936.000m	H = 145.277m
補助点 4	X = -23,024.000m	Y = 96,936.000m	H = 147.212m

この座標を元に原点を X = -22,940.000m、Y = 96,900.000m に設定し、大グリッドは 40×40m で原点を基点に西から東へアルファベットの英文字、北から南へローマ数字を、小グリッドは 4×4m で同じく西から東へアルファベットの小文字、北から南へ算用数字を付しそれらの組み合わせで「II A 5 g」などと呼称した。（第5図参照）

## (3) 遺構の検出と精査

遺構の検出はⅢ層からⅣ層上面で行った。Ⅱ層の黒色土での検出も試みたがほとんど不明瞭であった。検出した遺構は検出した順に番号を付した。住居及び住居状遺構にはSI01～、土坑にはSK01～、住居内柱穴にはPP01～、焼土遺構、単独の石囲い炉にはSX01～とした。なお精査を進める中で遺構の種別を変更したものや、ボツになったものもあるが、混乱を避けるためあえて付け直しは行わなかった。

竪穴住居跡の調査は四分法、その他の遺構については二分法を原則としたが、検出状況の差により原則どおりとはいかないものもある。個々の遺構は土層の堆積や遺物の出土状況、遺構の全景を写真撮影し、土層断面図は人力で平面図は電子平板により作図した。土層断面図は20分の1を原則としたが、炉跡や焼土遺構、柱穴などは10分の1で実測した。遺物の取り上げは、遺構内のは遺構名と地点を記載して取り上げ、遺構外のは出土地点のグリッド名と層位を記載して取り上げることを原則とした。

## (4) 写真撮影

写真撮影は、調査員が行った。デジタル一眼レフカメラ1台と35mm判モノクロームフィルムカメラ1台で遺構の土層断面と全景を撮影し、6×7判のモノクロームフィルムカメラ1台では竪穴住居跡の全景のみを撮影した。撮影に当たっては事前に日付や遺構名、撮影者を記した「撮影カード」を写し込み、室内整理時に活用した。この他に、適宜調査の様子も記録した。調査最終局面においては航空写真撮影を行い周辺の地形や遺構の配置状況についても記録した。

## 2 室内整理

### (1) 作業経過

平成27年1月16日(金)から整理作業員2名体制で室内整理に入る。出土遺物の土器は大コンテナ10箱、石器は中コンテナ7箱である。遺物の水洗から行ったが、土器の8箱は野外調査現場で水洗を行っており、室内整理をスムーズに行うためにはこのことは大変有効であった。

1月22日(木) 石材鑑定を300点行う

1月26日(月)からは土器の接合と記名、登録作業に入った。最終的には261点の土器を掲載候補として選別した。

2月4日(水)から接合した土器への石膏入れを行い実測の準備を行う。

2月13日(金)から土器実測に入る。

2月19日(木) 石器写真撮影を行う。

2月24日(火) 石器実測開始、土器拓本開始

3月6日(金) 土器・石器実測終了しトレースにはいる

3月18日(水) 拓本合成開始

3月19日(木) 遺物図版仮貼り開始

3月23日(月) 遺物図版仮貼り、点検終了

3月24日(火) 遺物図版本貼り

3月31日(火) 収納完了

### (2) 遺物整理の方法

出土した遺物は土器の他に、礫石器、剥片石器、石製品に分類される。土器と剥片については現場で取り上げ出土地点が記してある袋毎、石器・石製品については、1点毎重量計測を行い台帳登録した。土器については現場で取り上げた袋毎に仮の番号で台帳登録し、接合以後掲載遺物を抽出し、1点毎注記番号を付した。石器・石製品については全量仮番号を付し器種毎に分類し台帳登録し、その後に掲載遺物の抽出を行った。その後掲載遺物を実測、拓本、点検・修正、写真撮影、トレースを行い、図版を作成した。報告書掲載にあたっては、新たに掲載番号をつけ直している。順番は遺構内土器→遺構外土器→遺構内石器→遺構外石器の順番となる。なお掲載にあたっては遺構内出土の遺物を優先したが、参考資料として遺構外出土のものも若干掲載した。

### (3) 遺構図面の整理

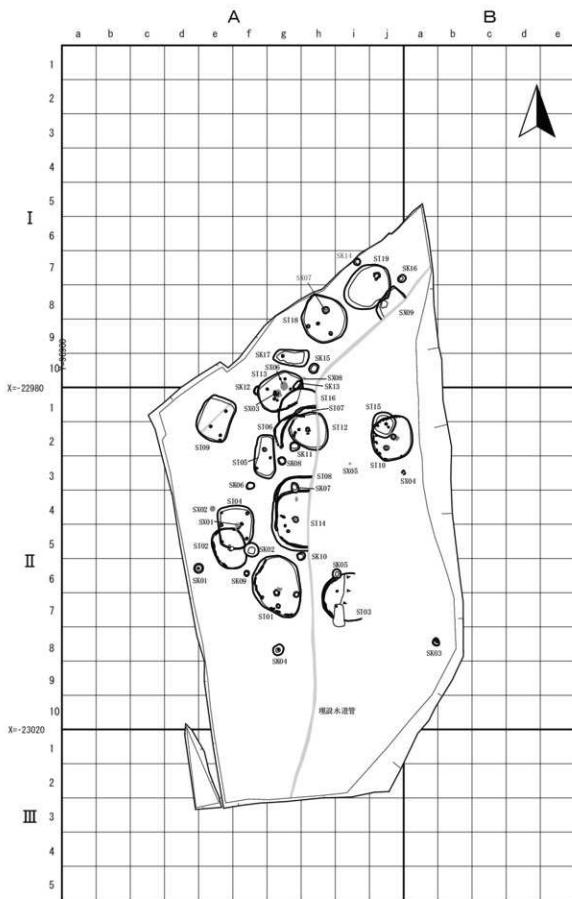
野外調査では、平面図は電子平板で、土層断面図は人力で記録したが、これらはすべて遺構台帳に登録し、点検・修正した後にデジタルデータ化した。その後図版作成のためにデジタルトレースを行った。

### (4) 写真撮影と整理

野外調査時に撮影した写真は、6×7判モノクローム、35mm判モノクローム写真についてはネガとともにアルバムに貼付し、台帳に登録した。デジタルカメラのデータは、撮影日付毎のフォルダーから遺構毎にフォルダーを作り替え、この中から報告書用の写真を抽出した。

掲載遺物は当センター写真室で撮影技師により1点毎撮影し、デジタルデータとして保存した。





第5図 遺構配置図・グリッド図

## IV 検出された遺構

### 1 竪穴住居跡

(SI01からSI19まで番号を付してあるが、凡例で既述のとおりSI11とSI17は欠番である)

#### SI01 竪穴住居跡 (図版6 写真図版2)

〈位置〉調査区のほぼ中央、II A 6 g グリッドを中心とする範囲である。ほぼ平坦面である。

〈検出状況〉V層上面で半円状の黒褐色土の広がりを確認した。西半はV層での検出であるが、II～IV層の堆積が始まる境界に位置し、東半はIII層での検出である。

〈形状・規模〉長軸の径が7.5mほどの楕円形を呈すると思われるが、北壁と東壁はIII層と堆積土が類似しており、明確に確認できなかった。

〈埋土〉8層に分層した。暗褐色～にぶい黄褐色シルトが主体となり、全体的に炭化物を僅かに含む。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉V層を壁とする西側は外傾して立ち上がる。床面は東側でやや下がるものの、概ね平坦である。硬化面は見られない。床の縁には幅10cm～15cm、深さ10cm程度の壁溝と壁柱穴が巡る。

〈柱穴〉2個の柱穴を検出した。PP01は本遺構に付随する柱穴と考えられる。PP02は浅い皿状の断面を呈し、本遺構に関わるものか不明である。

〈炉〉遺構中央付近で石囲炉を検出した。角礫を楕円形に配置し、規模は60cm×70cmほどである。炉内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは6cmほどである。また、炉の北東に焼土の広がりを確認した。焼土範囲は50cm×40cmほどで、不整な半円形を呈する。燃焼部の縁辺には浅い窪みが見られ、炉石が抜取られたものの可能性がある。したがって、本遺構では炉の作り変えが行われたと考えられる。

〈重複〉なし

〈出土遺物〉土器は18,111.8g出土で、37点(1～37 図版25～27 写真図版23～26)、石器は剥片石器7点、礫石器7点出土で3点(262、263、286 図版41、43 写真図版45、47)、石製品2点出土で2点(349、350 図版45 写真図版49)を掲載した。

〈時期〉出土炭化物の年代測定結果から弥生時代中期の可能性が高い。

#### SI02 竪穴住居跡 (図版7 写真図版3)

〈位置〉調査区中央の西寄り、II A 6 f グリッド付近に位置する。ほぼ平坦面である。

〈検出状況〉V層上面での検出である。暗褐色～褐色の不整形な広がりとして確認した。

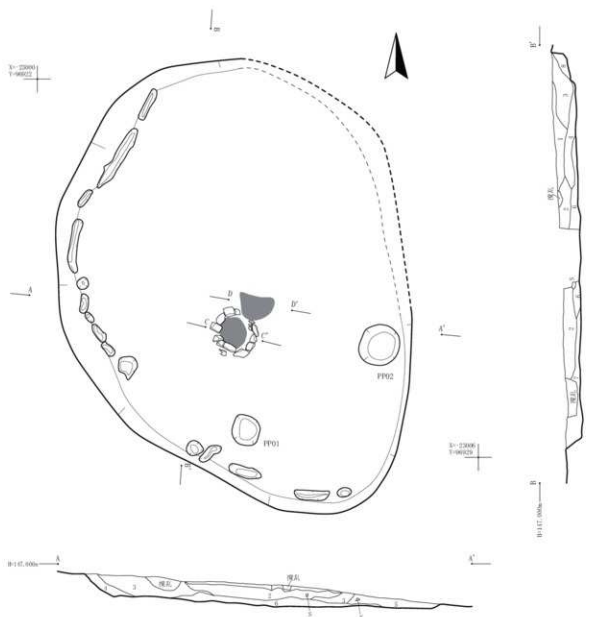
〈形状・規模〉上部は削平を受けており、北半は失われているが、概ね4.9m×3.7mの楕円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉削平により埋土はほとんど残っていなかったが、2層に分層した。暗褐色～褐色シルトで、いずれもV層由来の明黄褐色シルトが混入する。

〈壁・床〉既述のとおり遺構上部はほとんどが削平されており、壁もわずかな立ち上がりを残すのみで、北半と東半の壁は確認できなかった。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。西側では幅15cm、深さ15cmほどの壁溝を検出した。

〈柱穴〉検出されなかった。

〈炉〉遺構中央付近で地床炉と思われる焼土の広がりを確認した。弱い被熱で、暗赤褐色化した表面



## SI01 (A-A', B-B')

- 1 10TR2/3 黒褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや碎 炭化物粒 (φ1~3mm) 2%含む
- 2 10TR4/5 濃い黄褐色シルト 粘性やや強 しまりやや碎 炭化物粒 (φ5mm) 1%含む
- 3 10TR2/3 暗褐色シルト 粘性やや強 しまりやや碎 炭化物粒 (φ5mm) 1%含む
- 4 10TR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 炭化物ブロック (φ20mm) 1%含む
- 5 10TR4/4 褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや碎 明黄褐色土粒 (φ1mm) 1%含む
- 6 10TR5/4 濃い黄褐色シルト 粘性やや強 しまりやや碎 炭化物粒 (φ1mm)、炭化物ブロック (10~30mm) 10%含む
- 7 10TR5/6 黄褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 明黄褐色土ブロック (φ10~30mm) 10%含む
- 8 10TR2/2 黒褐色シルト 粘性やや強 しまりやや碎 明黄褐色土ブロック (φ50mm) 1%含む

## B-B', 1410.00m



## B-B', 1410.00m



## SI01B' (C-C')

- 1 10TR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 炭化物粒 (φ5mm) 1%、焼土ブロック (φ10mm) 3%含む
- 2 7.STR4/6 褐色シルト 粘性やや強 しまりやや碎 焼土粒 (φ5mm) 10%含む
- 3 2.STR4/6 赤褐色焼土 粘性弱 しまりやや碎
- 4 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや碎
- 5 10TR3/3 暗褐色シルト 粘性やや弱 しまりやや碎 黄褐色土粒混じる

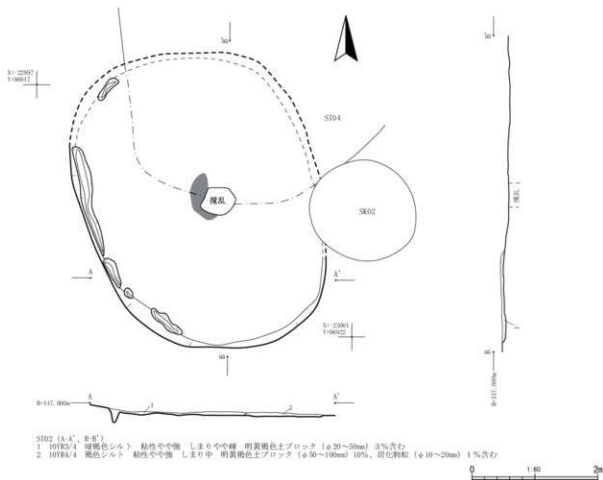
## SI01B' (D-D')

- 1 10TR3/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや碎
- 2 7.STR4/4 褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 (φ1~2mm) 1%含む
- 3 10TR2/3 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 炭化物粒 (φ5mm) 1%含む
- 4 7.STR2/4 暗褐色シルト 粘性中 しまりやや碎 焼土粒 (φ1~2mm) 1%含む
- 5 2.STR5/8 明赤褐色シルト (焼土) 粘性やや弱 しまりやや碎

SI01	PP01	PP02
径 (cm)	64×43	75×63
深さ (cm)	38	18

0 1.00 2.00

第6図 SI01竪穴住居跡



第7図 SI02竪穴住居跡

に焼土ブロックが散在する程度である。掘り込みは確認できない。攪乱により3割ほど失われているが、規模は70cm×35cmの楕円形を呈する。

〈重複〉 SI04、SK02と重複しており、SI04より新しく、SK02より古い。

〈出土遺物〉 土器は352.5g出土で、5点(38~42 図版28 写真図版26)掲載した。石器の出土はない。

〈時期〉 出土遺物から縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の可能性が高い。

#### SI03 竪穴住居跡 (図版8 写真図版4)

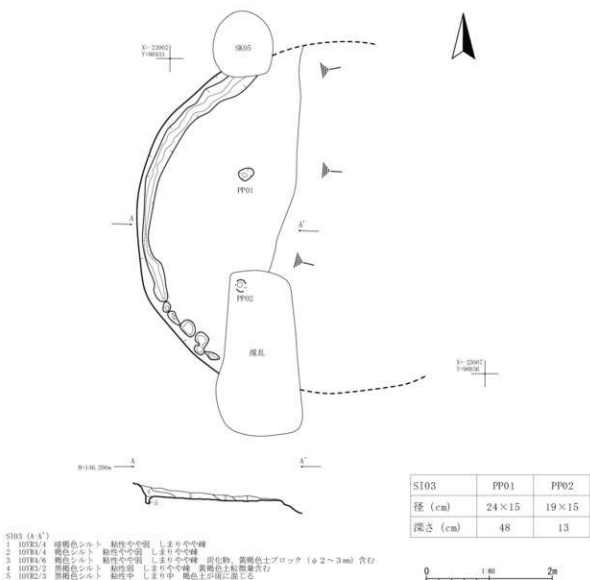
〈位置〉 調査区中部からやや南寄りのII A6 hグリッド付近である。現地形は平坦であるが、土層の堆積状況を見ると西から南にかけて下る緩斜面となっていたようである。

〈検出状況〉 表土除去後、V層黄褐色土の面で黒褐色の不定型な広がりを検出した。すでに東半分は削平されていたためベルト設定は一方向にした。

〈形状・規模〉 円形を呈する。残存部から推計して、径はおおよそ5mほどである。

〈埋土〉 黒褐色土及び暗褐色土が主体である。黄褐色土がブロック状に混入する箇所があるが概ね自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉 西側で壁の立ち上がり確認された。一部外傾する箇所があるがほとんどは床から直立気味である。床は黄褐色土で、一部固い面が見られるが小範囲である。残存部はほぼ平坦で、床と壁の



第8図 SI03竪穴住居跡

間には幅約15cm前後の壁溝及び壁柱穴が巡っている。

〈柱穴〉2個検出した。そのうちの1個は東半分の攪乱土を除去後の底部で検出した。径は19cm、残存床面からの深さは約40cmである。(検出面からは13cm)

〈炉〉残存部では検出できなかった。

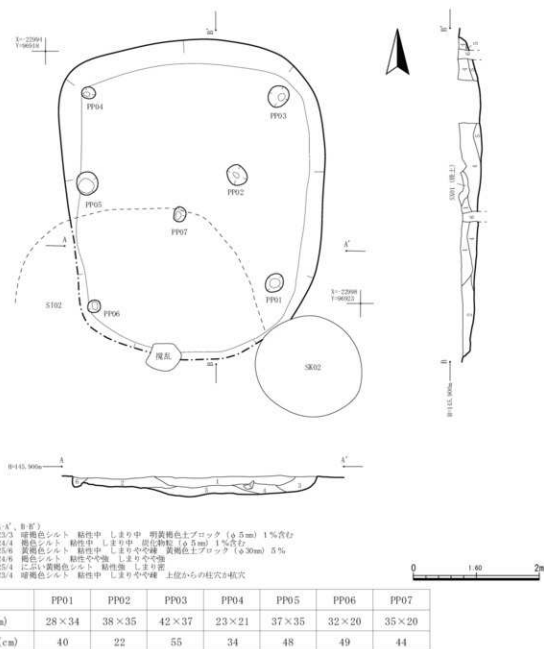
〈重複〉北側でSK05に切られる。南側は後世の攪乱をうけているがこの攪乱の底面で柱穴を1個検出している。東側半分は削平されている。

〈出土遺物〉土器は、823.5g、石器は磨石1点のみの出土で、いずれも掲載していない。

〈時期〉縄文時代晩期末葉から弥生時代の可能性が高い。

#### SI04 竪穴住居跡 (図版9 写真図版5)

〈位置〉調査区中央のやや西寄り、II A 5 f グリッド付近に位置する。



第9図 SI04竪穴住居跡

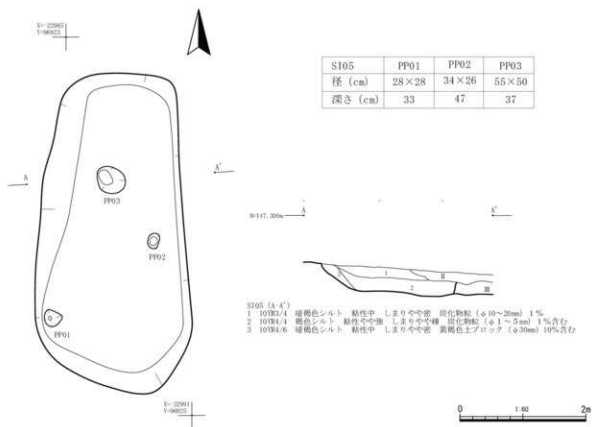
〈検出状況〉V層上面で半円状の黒褐色土の広がりを確認した。SI01と同様に、西半はV層での検出であるが、II～IV層の堆積が始まる境界に位置し、東半はIII層での検出である。

〈規模・形状〉平面形は、5m×4mの隅丸方形に近い楕円形を呈する。

〈埋土〉上位は暗褐色、下位は褐色～にぶい黄褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉東西方向での壁の立ち上がりは比較的明確に捉えられたが、南側はSI02により上部が削平されており、わずかに立ち上がりが確認できる程度である。また、北側は緩やかな立ち上がりとなる。V層を床面として使用しおり、概ね平坦である。

〈柱穴〉7個検出した。底面標高は概ね146.1mである。PP03の断面では柱痕跡が確認できる。全て本遺構に付随するものと考えられる。



第10図 SI05竪穴住居跡

〈炉〉なし。

〈重複〉SI02、SK02と重複し、本遺構が一番古い。

〈出土遺物〉土器は3,483.9g出土で、7点(43~49 図版28 写真図版26、27)、石器は剥片石器4点、礫石器4点出土で2点(264、287 図版41、43 写真図版45、47)を掲載した。

〈時期〉縄文時代前期の遺構の可能性が高い。

#### SI05 竪穴住居跡 (図版10 写真図版6)

〈位置〉調査区北寄り、II A 3 g グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉基本層序観察用のベルトを設定してトレンチ状に掘り下げを行っていたところ、V層が掘り込まれている箇所を確認したため、竪穴住居跡として精査を開始した。本来の検出面はIII層上面である。

〈規模・形状〉平面形は、5m×2.2mの隅丸矩形を呈する。

〈埋土〉暗褐色～褐色土が主体である。基本層序のII層が上位に堆積する。自然堆積の様相を呈する。

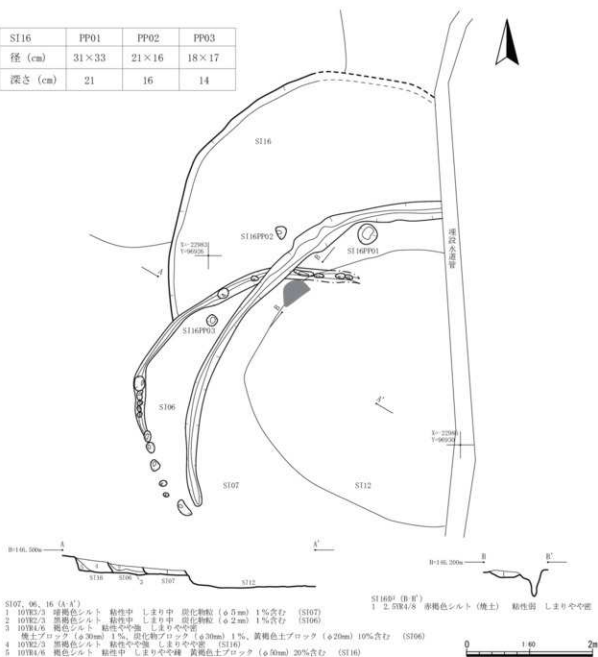
〈壁・床〉西壁、南壁、北壁の立ち上がりは比較的明確に捉えられたが、東側は不明瞭である。概ねやや傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。

〈柱穴〉3個検出した。底面標高は一定ではない。PP01とPP02は本遺構に付随するものと考えられるが、PP03については不明である。

〈炉〉なし。

1 竪穴住居跡

SI16	PP01	PP02	PP03
径 (cm)	31×33	21×16	18×17
深さ (cm)	21	16	14



第11図 SI06、SI07、SI16竪穴住居跡

〈重複〉なし。

〈出土遺物〉土器は2,952.4g出土で、5点 (50~54 図版28 写真図版27) の掲載、石器は剥片石器2点、礫石器1点出土であるが掲載していない。

〈時期〉縄文時代前期の遺構の可能性がある。

SI06 竪穴住居跡 (図版11 写真図版7)

〈位置〉調査区北寄り、II A 2 g グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉基本層序観察用のベルトを設定してトレンチ状に掘り下げを行っていたところ、V層上



面で溝状に延びる暗褐色土を確認した。これを竪穴住居跡の壁溝と想定して精査を開始した。

〈規模・形状〉上部は大幅に削平を受けており、また、東側は他遺構と重複しているため、全体像を知り得ないが、概ね径4.5mの円形を呈するものと推定される。

〈埋土〉削平及び重複により埋土はほとんど残っていないが、残存している埋土を2層に分層した。上位が黒褐色、下位が褐色シルトである。下位には焼土や炭化物が微量混入している。

〈壁・床〉既述のとおり埋土はほとんどが削平されており、壁もごく一部しか確認できなかった。V層を床面として使用しており、概ね平坦であると思われる。壁溝は幅10～15cmほどで、深さは床面から約40cmである。

〈柱穴〉なし。

〈炉〉なし。

〈重複〉SI07、SI12、SI16と重複しており、SI16より新しく、SI07、SI12よりも古い。

〈出土遺物〉土器は265.6gの出土で、1点(55 図版29 写真図版27)、石器は礫石器1点出土(288、図版43 写真図版47)を掲載した。

〈時期〉弥生時代前期の遺構の可能性が高い。

#### SI07 竪穴住居跡(図版11 写真図版7)

〈位置〉調査区北寄り、II A 2 h グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉SI06と同様に、基本層序観察用のベルトを設定してトレンチ状に掘り下げを行っていたところ、V層上面で溝状に延びる暗褐色土を確認した。これを竪穴住居跡の壁溝と想定して精査を開始した。

〈形状・規模〉上部は大幅に削平を受けており、また、東側はSI12に切られているため、全体像を知り得ないが、概ね径6.5m～7mの円形を呈するものと推定される。なお、水道管以東では本遺構は検出できなかった。

〈埋土〉削平及び重複により埋土はほとんど残っていないが、残存している埋土は炭化物粒を微量含む暗褐色土の単層であった。

〈壁・床〉既述のとおり埋土はほとんどが削平されており、壁は確認できなかった。V層を床面として使用しており、概ね平坦であると思われる。壁溝は幅20cm～30cmほどで、床面からの深さは約30cmである。

〈柱穴〉なし。

〈炉〉なし。

〈重複〉SI06、SI12、SI16と重複しており、SI06、SI16より新しく、SI12より古い。

〈遺物〉土器は121gの出土だが掲載はしていない。石器の出土はない。

〈時期〉弥生時代前期の遺構の可能性が高い。

#### SI16 竪穴住居跡(図版11 写真図版12)

〈位置〉調査区北端、II A 1 h グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面での検出であるが、検出作業時には確認できなかった。SI06、SI07の精査過程で、断面に本遺構の埋土を確認した。また、SI13精査時の南北断面の南端にも本遺構の埋土を確認した。

〈形状・規模〉南半は他の遺構に切られており、全容を把握するに至らないが、炉が中心になると想定すると、径6mほどの楕円形を呈するものと考えられる。

〈埋土〉確認できた埋土は2層に分層した。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉壁はごく一部でしか確認できなかったが、若干外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。

〈柱穴〉3個の柱穴を検出した。底面標高は概ね146m～145.9mである。

〈炉〉遺構のほぼ中央にあたると思われる場所で焼土を検出した。焼土の南半はSI12によって削平されており、炉全体の規模は知り得ないが、残存部の最大径は48cmで、焼土の厚さは最大で11cmである。

〈重複〉SI06、SI07、SI12、SI13と重複しており、SI06、SI07、SI12より古く、SI13より新しい。

〈出土遺物〉土器は975.5gの出土で、4点（134～137 図版33 写真図版34、35）、石器は礫石器1点出土で掲載はしていない。

〈時期〉縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の可能性が高い。

#### SI08 竪穴住居跡（図版12 写真図版8）

〈位置〉調査区のほぼ中央、IIA5hグリッド付近に位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面での検出である。溝状に延びる暗褐色土を確認した。これを竪穴住居跡の壁溝と想定して精査を開始した。当初は南に重複するSI14と同一の遺構と想定していたが、本遺構の壁溝とSI14の壁溝が連続しないことが判明し、別遺構とした。

〈形状・規模〉水道管を挟んだ東側では本遺構は検出されず、また、南側はSI14に切られているため全体像は知り得ないが、概ね径5mほどの隅丸方形もしくは隅丸矩形を呈するものと推定される。

〈埋土〉SI14との重複を把握する以前に本遺構の埋土を掘削してしまい、断面図や写真の記録を欠く。

〈壁・床〉壁は西側が残っており、やや外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦であると思われる。壁溝は幅20cmほどで、深さは床面から約10cmである。

〈柱穴〉なし。

〈炉〉なし。

〈重複〉SI14と重複しており、本遺構の壁溝がSI14石囲炉の付近まで巡る可能性があることと、壁溝埋土の状態から本遺構が古いと判断した。

〈出土遺物〉土器は87.3gの出土で、1点（56 図版29 写真図版27）の掲載、石器の出土はない。

〈時期〉出土炭化物の年代測定結果から弥生時代前期の遺構の可能性が高い。

#### SI14 竪穴住居跡（図版12 写真図版8）

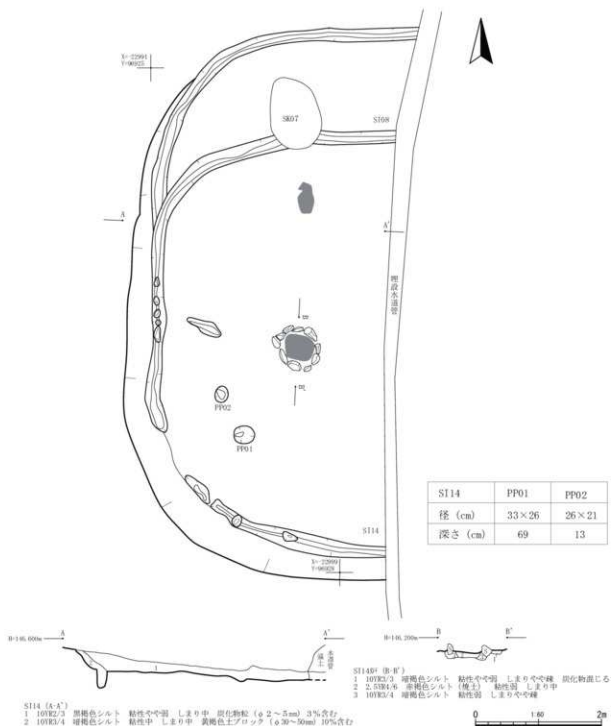
〈位置〉調査区のほぼ中央、IIA5hグリッド付近に位置する。

〈検出状況〉Ⅲ層上面での検出である。溝状に延びる暗褐色土を確認した。これを竪穴住居跡の壁溝と想定して精査を開始した。当初は北に重複するSI08の壁溝が本遺構まで巡るものと想定していたが、本遺構の壁溝とSI08の壁溝が連続しないことが判明し、それぞれ別の遺構として精査した。

〈形状・規模〉水道管を挟んだ東側では本遺構は検出されなかったため、東半の状態は不明であるが、長軸は7.2m、短軸は概ね5mほどの隅丸矩形を呈するものと思われる。

〈埋土〉2層に分層した。黒褐色～暗褐色土が主体となるが、埋土の堆積は薄い。全体に炭化物粒を微量含む。

〈壁・床〉壁は緩やかに外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。壁溝は幅20cm～25cm、床面からの深さ20cmほどである。



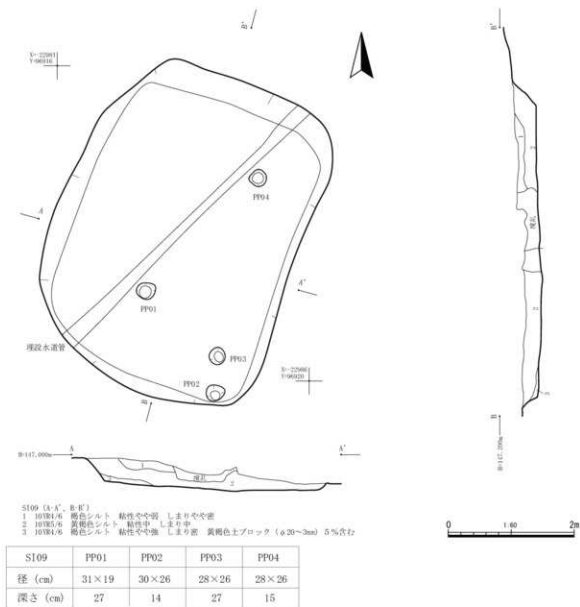
第12図 SI08、SI14竪穴住居跡

〈柱穴〉 2個の柱穴を検出。PP01は床面からの深さが69cmほどで、本遺構の支柱穴であると考えられる。

〈炉〉 遺構のほぼ中央にあたると思われる場所で石囲炉を検出した。10個の角礫を円形に配置しており、規模は70cm×63cmである。炉内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは最大で9cmである。

〈重複〉 SI08と重複しており、本遺構が新しい。

1 竪穴住居跡



第13図 SI09竪穴住居跡

〈出土遺物〉土器は9,889.2gの出土で、26点 (108~133 図版32、33 写真図版32~34)、石器は剥片石器5点、礫石器6点の出土で、2点 (274、294 図版41、44 写真図版45、48) を掲載した。

〈時期〉弥生時代前期の可能性が高い。

SI09 竪穴住居跡 (図版13 写真図版9)

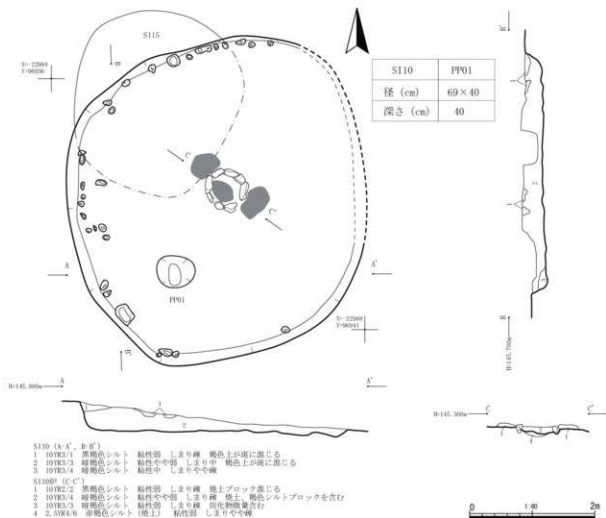
〈位置〉調査区北西端、II A 2 e グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉V層上面での検出である。褐色土の広がりとして確認した。

〈形状・規模〉5.1m×3.7mのやや丸みを帯びた隅丸矩形を呈する。

〈埋土〉3層に分層した。褐色~黄褐色土が主体となる。全体的に混じりが少ない。

〈壁・床〉壁はやや外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。



第14図 SI10竪穴住居跡

〈柱穴〉4個の柱穴を検出した。底面標高が146.4m前後のもの(PP02、PP04)と、146.2m前後のもの(PP01、PP03)がある。埋土は黒褐色～暗褐色が主体で、上位には微量の炭化物を含む。

〈炉〉なし。

〈重複〉なし。

〈出土遺物〉土器は179.7gの出土で、1点(57 図版29 写真図版28)、石器は剥片石器1点、礫石器1点出土で1点(265 図版41 写真図版45)を掲載した。

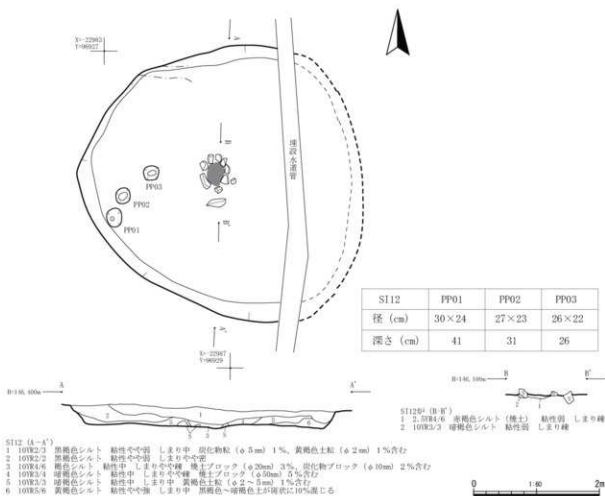
〈時期〉縄文時代前期の遺構の可能性ある。

#### SI10 竪穴住居跡(図版14 写真図版10)

〈位置〉調査区北東側、II A 2 j グリッドを中心とする。

〈検出状況〉調査区の東側の、落ち込みが始まる地点と思われる箇所検出した。ここは基本層序のII層(黒褐色土)が厚く堆積し始める部分である。表土除去後の面ではプランを確認できず、トレンチをいれて、石囲炉を検出した。その後ベルトを設定し精査した。石囲炉が手がかりに床面を把握し、

1 竪穴住居跡



第15図 SI12竪穴住居跡

床面を広げていき、西側(斜面上位)で立ち上りの壁を確認した。以後この壁を南側、北側にそれぞれ追いかけて全体にプランを確認しようとしたが、北東側での黒色土層では立ち上りの壁を確認できなかった。

〈形状・規模〉隅丸方形に近い円形を呈し、径は5m前後である。

〈埋土〉黒褐色土主体の埋土であり、遺物の混入も多い。

〈壁・床〉斜面上位(西側)では黒褐色土と黄褐色土の混入した面で壁が立ち上がるが、斜面下位(東側)では確認できない。床は西側に一部硬化面が見られるが、全体的には黄褐色土と褐色土の混じりで土器の混入も見られる。壁柱穴が残存する壁の一部に見られる。

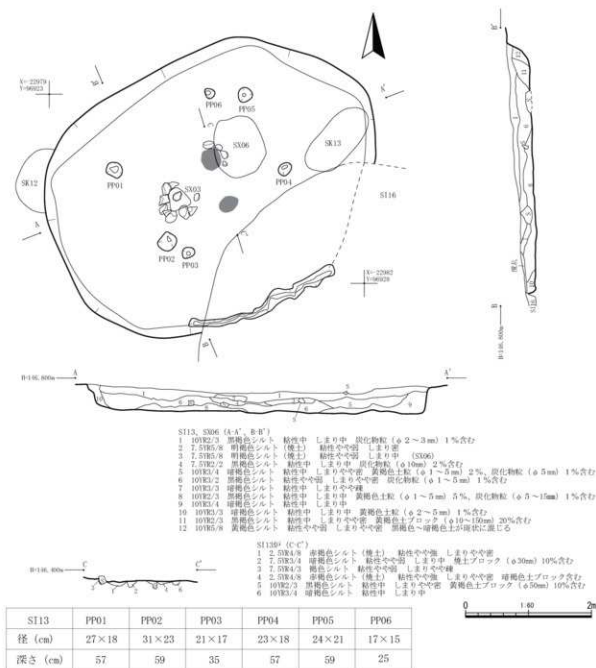
〈柱穴〉主柱穴1個、他に住居西側の壁際にもみ支柱穴が確認された。

〈炉〉住居はほぼ中央に径約50cmの円形に自然礫を回した石囲い炉がある。中央部ほど焼土の発達は良く焼土層は最大で10cm弱である。炉の外側の東西両方向に焼土を含むマウンド状の塊が見られる。

〈重複〉本遺構の西北部にSI15が重複し、本遺構の方が新しい。

〈出土遺物〉土器は5,380.1gの出土で、18点(58~75 図版29、30 写真図版28、29)、石器は剥片石器8点、礫石器6点出土で5点(266、267、268、269、289 図版41、43 写真図版45、47)を掲載した。

〈時期〉縄文時代晩期末葉から弥生時代前期の遺構の可能性が高い。



第16図 SI13竪穴住居跡

## SI12 竪穴住居跡 (図版15、写真図版11)

〈位置〉 調査区北寄り、II A 2 h グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉 基本層序観察用のペルトを設定してトレンチ状に掘り下げを行っていたところ、V層が掘り込まれている箇所を確認したため、竪穴住居跡として精査を開始した。本来の検出面はⅢ層上面である。

〈形状・規模〉 水道管以東では本遺構は検出できなかったため、全体像は不明瞭であるが、概ね径4.5mの円形を呈するものと推定される。

〈埋土〉 6層に分層した。黒褐色~暗褐色土が主体で、3層は炉の埋土である。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉壁はやや外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しており、概ね平坦である。硬化面は確認できなかった。

〈柱穴〉3個の柱穴を検出したが、重複するSI07の柱穴である可能性もある。

〈炉〉遺構のほぼ中央にあたと考えられる場所で石囲炉を検出した。7個の角礫を概ね円形に配置しており、規模は37cm×32cmである。炉内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは最大で6cmである。

〈重複〉SI06、SI07と重複しており、本遺構が一番新しい。

〈出土遺物〉土器は2,689.9gの出土で、4点(76~79 図版30 写真図版29)、石器は剥片石器5点、礫石器7点出土で4点(270、271、290、291 図版41、43 写真図版45、47)を掲載した。

〈時期〉出土炭化物の年代測定から弥生時代中期の遺構の可能性が高い。

### SI13 竪穴住居跡 (図版16 写真図版12)

〈位置〉調査区北端、II A 1 g グリッド付近に位置する。

〈検出状況〉遺構西端の一部はV層上面、それ以外はIII層上面にて検出した。

〈形状・規模〉南半はSI16との重複で切られているが、概ね5.3m×4.3mの隅丸矩形を呈する。

〈埋土〉12層に分層した。黒褐色～暗褐色土が主体である。埋土中位～下位にかけては微量の炭化物を含む。埋土上位にはSX03(2層)とSX06(3層)が重複しており、最上位の1層はこれら焼土・炉が属する竪穴住居跡の埋土の可能性も考えられる。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉壁はやや外傾して立ち上がる。V層を床面として使用しおり、概ね平坦である。床面検出直後は西側に局所的な硬化面が認められた。また、南側のみに幅20cm、床面からの深さ10cmほどの壁溝が認められる。

〈柱穴〉6個の柱穴を検出した。PP01、PP02、PP04、PP05は本遺構に付随する主柱穴である。

〈炉〉遺構のほぼ中央にあたと考えられる場所で炉を検出した。東側の三分の一ほどに4個の角礫が巡っており、円形を呈する石囲炉と考えられる。炉内部の燃焼部から、内径は30cm×32cmである。焼土の厚さは最大で7cmである。また、南側にも円形の焼土を確認した。周囲には炉石を巡らせた痕跡があり、前述の石囲炉よりも古い炉の可能性もある。

〈重複〉SI16、SK12、SK13と重複しており、SI16とSK13より古く、SK12より新しい。

〈出土遺物〉土器は13,387.1gの出土で、28点(80~107 図版30~32 写真図版30~32)、石器は剥片石器5点、礫石器13点出土で4点(272、273、292、293 図版41、44 写真図版44、48)を掲載した。

〈時期〉出土炭化物の年代測定から弥生時代中期の可能性が高い。

### SI15 竪穴住居跡 (図版17 写真図版13)

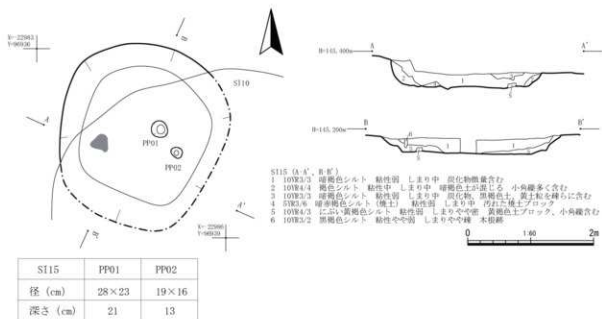
〈位置〉調査区北東部II A 2 j グリッド他に位置する。本遺構の南東部でSI10と切り合っている。西から東に向けてII層が次第に厚くなる箇所、元々は西側から東へ向かう斜面であった模様である。

〈検出状況〉SI10の精査時に検出した。SI10住居跡の西北部床及びそれに連なる立ち上がり壁に暗褐色土の広がりが見られた。SI10の精査終了後に前述の暗褐色土の範囲に、東西方向のトレンチをいれて確認したところ西側で床面らしき部分と立ち上がりが確認できたため、南北、東西の二方向にバルトを設定して、精査に入った。床面を広げて、それぞれの方向で立ち上がりの壁が確認できたため竪穴住居跡と認定した。

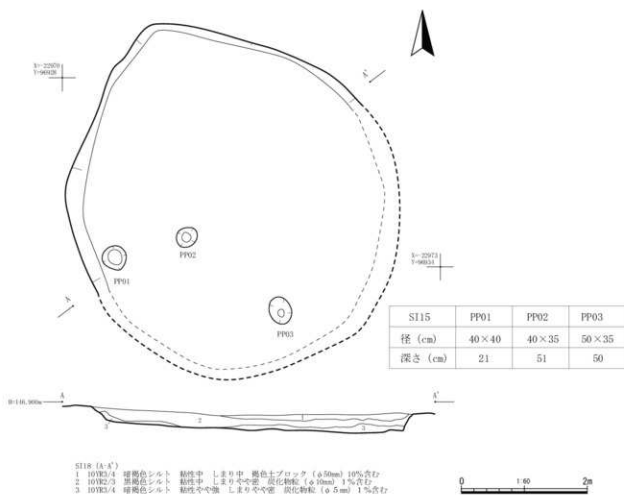
〈形状・規模〉平面形は不定型な円形を呈する。径は約3m程度

〈埋土〉下位に黄褐色土、上位に暗褐色土が主体となり、一部に炭化材混じりの層が上位に薄くある。





第17図 SI15竪穴住居跡



第18図 SI18竪穴住居跡

自然堆積の様相を呈する。埋土下位の床に近い面で径10cm～20cmの自然礫が疎らに散乱している。  
〈壁・床〉壁は外傾して立ち上がる。床は凹凸があり拳大の自然礫が散乱する。部分的に焼土が混じる面があり、凹部から土器片が出土している。

〈柱穴〉住居中央部よりやや東側に主柱穴（深さ約21cm）と思われる柱穴を1個検出した。他にそこからさらに東側に離れた箇所で支柱穴（深さ13cm）と思われる柱穴を1個検出した。どちらも埋土は1層である。

〈炉〉検出していない。

〈重複〉本遺構の東南部にSI10が重複するが、検出状況その他から本遺構の方が古い。

〈出土遺物〉土器は716.5g出土で、掲載はしていない。石器は剥片石器2点、礫石器1点出土で2点(275、276 図版41 写真図版45)を掲載した。

〈時期〉出土土器及び出土炭化物の年代測定結果より縄文時代前期に属すると考えられる。

#### SI18 竪穴住居跡（図版18 写真図版14）

〈位置〉調査区北端、IA9 i グリッド付近に位置する。本遺構付近は、宅地を造成する際に大きく改変されており、遺構の遺存状況は悪い。

〈検出状況〉北半ではV層上面で半円形の暗褐色土の広がりとして検出したが、南半では検出プランは確認できなかった。

〈形状・規模〉精査できたのは北半のみであるが、規模は概ね5mほどの円形を呈すると思われる。

〈埋土〉3層に分層した。黒褐色～暗褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。

〈壁・床〉壁はごく一部でしか確認できなかったが、やや外傾して立ち上がる。北側ほど直立に近い。V層を床面として使用している。緩やかに傾斜しており、北東側が15cm程低い。

〈柱穴〉3個の柱穴を検出した。底面標高は一定ではないが、PP02とPP03は本遺構の主柱穴であると考えられる。

〈炉〉なし。

〈重複〉SX07と重複している。SX07は本遺構の床面より高いレベルにあり、新しい。

〈出土遺物〉土器は2,459.1gの出土で、9点（148～156 図版34 写真図版35、36）、石器は剥片石器2点、礫石器1点出土で2点（278、295 図版42、44 写真図版46、49）を掲載した。

〈時期〉土器は縄文時代前期、中期、後期、晩期末葉、弥生時代前期までのものが出土しているが前述のとおり土地改変がなされていることから詳細は不明である。出土土器の示す範囲である可能性が高い。

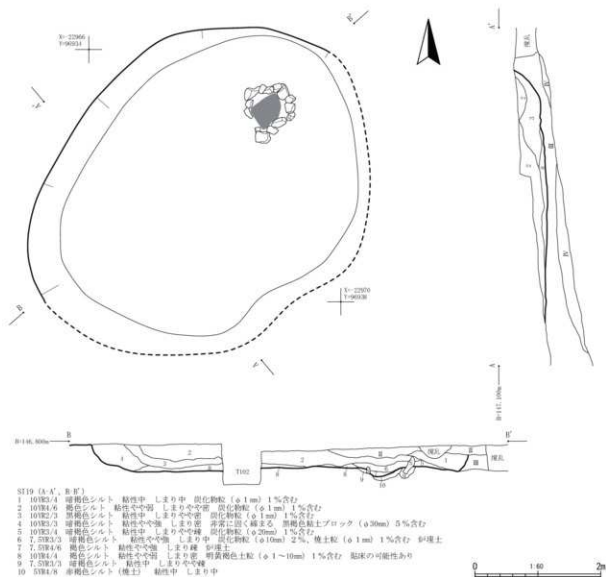
#### SI19 竪穴住居跡（図版19 写真図版15）

〈位置〉調査区北端、IA8 j グリッド付近に位置する。本遺構付近は、宅地を造成する際に大きく改変されており、遺構の遺存状況は悪い。

〈検出状況〉試掘トレンチの断面にて硬化面を確認し、これを本遺構の床面として精査を開始した。検出面はⅢ層上面である。

〈形状・規模〉南半は削平されており、失われている。そのため、全体の規模を知り得ていないが、長軸の規模は概ね6mほどで、楕円形もしくは隅丸矩形を呈すると思われる。

〈埋土〉10層に分層した。このうち、6、7、9、10層は炉の埋土と焼土である。埋土は暗褐色～褐色土が主体である。自然堆積の様相を呈する。



第19図 SI19竪穴住居跡

《壁・床》壁は緩やかに外傾して立ち上がる。Ⅲ層を床面として使用しており、概ね平坦である。

《柱穴》なし。

《炉》遺構の北西端で石囲炉を検出した。大小13個の角礫を概ね円形に配置しており、規模は80cm×70cmである。炉内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは最大で8cmである。

《重複》なし。

《出土遺物》土器は2,723.6gの出土で、4点 (157~160 図版34 写真図版36) 掲載、石器は剥片石器10点の出土で3点 (279, 280, 281 図版42 写真図版46) を掲載した。

《時期》出土土器は縄文時代前期のものが多い。ただし前述のとおり土地改変が激しく詳細は不明であるが縄文時代前期の可能性が高いと思われる。

## 2 土坑と陥し穴状遺構

### SK01 土坑 (図版20 写真図版16)

〈位置〉 調査区中央西端部、II A 6 d ~ 6 e グリッドに位置する。

〈検出状況〉 表土除去後、V層の黄褐色土の面で検出

〈重複〉 なし

〈平面形〉 円形で、開口部径126cm×114cm、底部径84cm×73cm

〈断面形・深さ〉 ビーカー型、73cm

〈壁・底面〉 底面中央部に径10cm程の副穴あり

〈埋土〉 埋土下位は黄褐色土と褐色土の互層、上位は褐色土が大半を占める

〈出土遺物〉 土器は228.6g出土で、石器は出土していない。

〈時期〉 埋土の状況から縄文時代のものと思われるが、詳細は不明である。

### SK02 土坑 (図版20 写真図版16)

〈位置〉 調査区中央部の西寄り、II A 5 f グリッドに位置する。

〈検出状況〉 表土除去後、プランは観察されなかったが、設定したトレンチの断面で検出した。

〈重複〉 SI02、SI04を切っており本遺構が新しい。

〈平面形〉 円形を呈する。開口部径170cm×160cm、底部径88cm×85cmとなる。

〈断面形・深さ〉 底面から直立するが、中段からは外傾する。深さは検出面から60cm。

〈壁・底面〉 底面は小規模な凹凸はあるがほぼ平坦となる。

〈埋土〉 本遺構の中央部は攪乱をうけている。それ以外の部分は暗褐色土と褐色土が斑に混合しており、人為堆積の様相を呈している。

〈出土遺物〉 土器は398.7gの出土で、2点(161、162 図版32 写真図版36、37)掲載した。

〈時期〉 縄文時代晩期末葉から弥生時代前期と思われるSI02を切ることから、これと同期か新しい時期と思われる。

### SK03 土坑 (図版20 写真図版16)

〈位置〉 調査区南寄りの東端、II B 8 a グリッドに位置する。

〈検出状況〉 V層の黄褐色土の面で円形に近い不定形のプランを検出した。

〈重複〉 なし

〈平面形〉 円形基調のやや不整形、開口部径91cm×74cm、底部径75cm×57cmとなる。

〈断面形・深さ〉 片方が外傾する。深さ32cmである。

〈壁・底面〉 周囲に角礫が多く、凹凸の多い壁、底面となる。

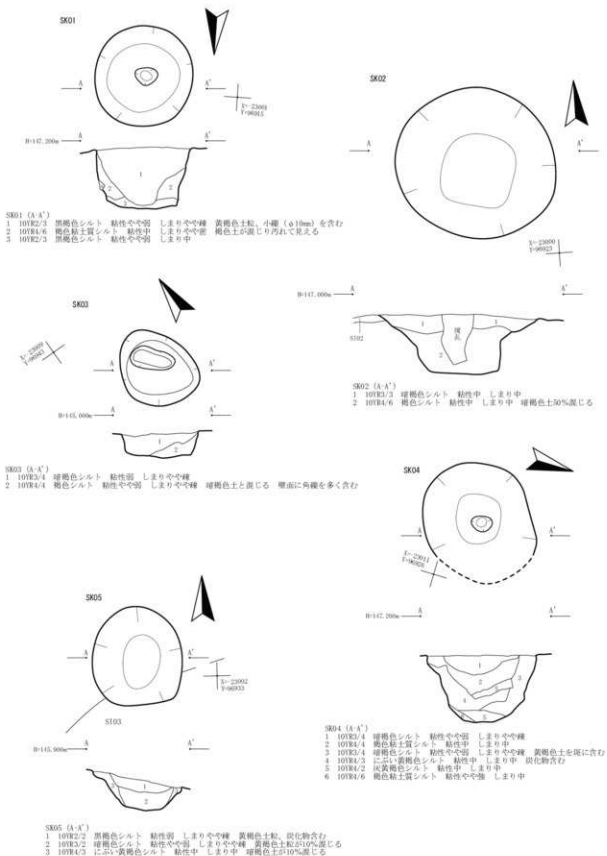
〈埋土〉 IV層褐色土が中心となる自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 検出状況及び埋土の状況から縄文時代前期に近い遺構と思われる

### SK04 土坑 (図版20 写真図版16)

〈位置〉 調査区中央よりやや南寄り。II A 8 g グリッドに位置する。



第20図 SK01、02、03、04、05土坑

〈検出状況〉 試掘調査である生文課トレンチと思われる箇所をクリーニングし、その断面で確認した。

〈重複〉 なし

〈平面形〉 開口部径146cm×107cm、底部径80cm×75cmの円形を呈する。

〈断面形・深さ〉 ビーカー型を基調とするが開口部近くでやや反する。深さは、検出面から底部までで83cmを測る。

〈壁・底面〉 基本土層のVI層を掘り込んであり、下部壁面及び底部には角礫が多く露出する。径20cm、深さ39cmの円形の副穴あり。

〈埋土〉 褐色土を主体とする。一部黄褐色土を小ブロック状に含むが自然堆積の様相を呈する。埋土中位には長方形の礫が斜に入り込み、さらに底部より10cm上には正方形に近い礫が中心部にある。

〈出土遺物〉 土器は1,188.4gの出土で掲載はなし。石器は剥片石器2点、礫石器1点出土で2点(282、283 図版42 写真図版46)掲載した。

〈時期〉 埋土の状況から縄文時代のものと思われるが、詳細は不明である。

#### SK05 土坑 (図版20 写真図版17)

〈位置〉 調査区中央付近、II A 6 h～6 i グリッドに位置する

〈検出状況〉 周溝をもつ住居跡SI03の精査中に検出した。

〈重複〉 SI03の床の一部及び周溝を切っており、本遺構が新しい。

〈平面形〉 開口部径116cm×106cm、底部径64cm×48cmの円形を呈する。

〈断面形・深さ〉 すり鉢状に開口部が開き、検出面からの深さは45cmを測る。

〈壁・底面〉 外傾して立ち上がり、底面は丸底である。

〈埋土〉 黒褐色土を主体に、一部褐色土、黄褐色土が入り込み自然堆積である。

〈出土遺物〉 土器は66.6g出土で1点(163 図版35 写真図版37)を掲載した。石器の出土はない。

〈時期〉 重複関係から、縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

#### SK06 土坑 (図版21 写真図版17)

〈位置〉 調査区中央部西寄り、II A 3 f グリッドに位置する。

〈検出状況〉 III層で検出した。

〈重複〉 なし。

〈平面形・規模〉 いびつな楕円形を呈し、開口部径96cm×76cm、底部径80cm×63cmとなる。

〈断面形・深さ〉 浅いビーカー型で最深部は検出面から30cmを測る。

〈壁・底面〉 壁はやや外傾するが場所によってはほぼ垂直となる箇所もある。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 暗褐色土、黒褐色土を主体とする。

〈出土遺物〉 土器は83.8gの出土で1点(164 図版35 写真図版37)掲載した。石器の出土はない。

〈時期〉 埋土の状況から縄文時代晩期末から弥生時代の可能性

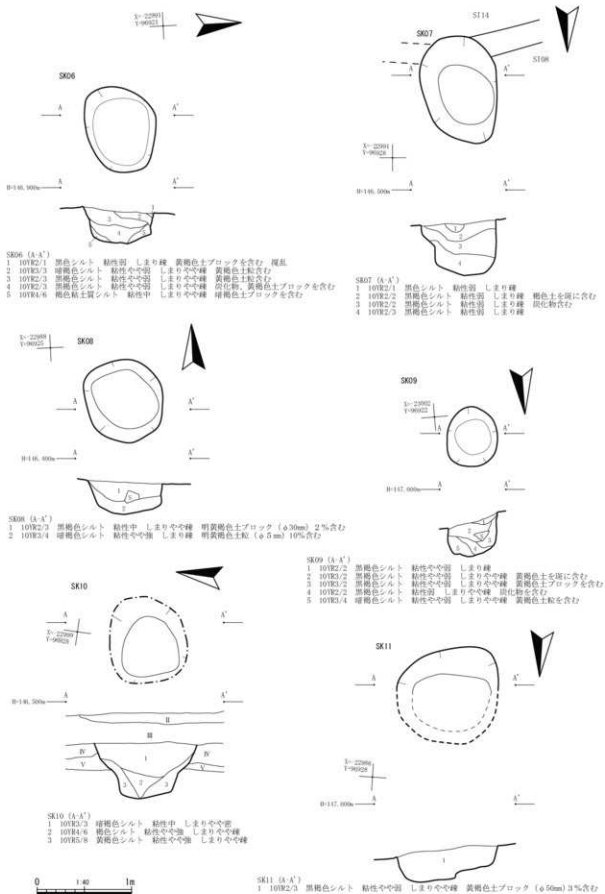
#### SK07 土坑 (図版21 写真図版17)

〈位置〉 調査区ほぼ中央部で、II A 3 g グリッドに位置する。

〈検出状況〉 III層で検出した。

〈重複関係〉 SI08、SI14の床面を切っている。

〈平面形・規模〉 楕円形基調で、開口部径118cm×80cm、底部径80cm×54cmである。



第21図 SK06、07、08、09、10、11土坑

- 〈断面形・深さ〉ピーカー型で最深部は検出面から68cmを測る。  
〈壁・底面〉壁はほぼ垂直に立ち上がるが一部不整形な部分がある。底面は鍋底型である。  
〈埋土〉黒色土～黒褐色土主体で、自然堆積の様相を呈する。  
〈出土遺物〉土器は140.7g出土で1点（165 図版35 写真図版37）掲載した。石器の出土はない。  
〈時期〉掲載土器は縄文時代中期のものであるが、埋土の状況及び重複関係から、弥生時代前期以降の可能性が高い。

SK08 土坑（図版21 写真図版17）

- 〈位置〉調査区中央部からやや北寄りで、II A 3 g グリッドに位置する。  
〈検出状況〉IV層で検出した。  
〈重複関係〉なし。  
〈平面形・規模〉円形を呈し、開口部径は約90cm×80cmとなる。  
〈断面形・深さ〉浅いU字形で最深部は検出面から35cmを測る。  
〈壁・底面〉壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は鍋底型である。  
〈埋土〉黒褐色土、暗褐色土を主体とする。径15cm程の角礫が中位に埋まっている。  
〈出土遺物〉土器が6.3g出土したのみで石器の出土はない。掲載していない。  
〈時期〉埋土の状況及び重複関係から縄文時代晩期末から弥生時代前期かそれ以降の可能性

SK09 土坑（図版21 写真図版18）

- 〈位置〉調査区中央からやや北寄りでII A 6 f グリッドに位置する。  
〈検出状況〉V層で検出した。  
〈重複関係〉なし。  
〈平面形・規模〉いびつな卵形を呈し、開口部径62cm×55cm、底部径38cm×35cmとなる。  
〈断面形・深さ〉不整形な浅いU字形で最深部は検出面から約38cmとなる。  
〈壁・底面〉壁は、ほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸がある。  
〈埋土〉黒褐色土が主体で、黄褐色土ブロックや径20cm大の角礫が上位に入り、人為堆積の様相  
〈出土遺物〉土器は9.4gの出土で、石器は出土していない。掲載遺物はない。  
〈時期〉埋土の状況から縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

SK10 土坑（図版21 写真図版18）

- 〈位置〉調査区中央やや南寄りで、II A 6 h グリッドに位置する。  
〈検出状況〉V層で検出したが、掘り込みはIV層からのようである。  
〈重複関係〉重複はない。  
〈平面形・規模〉正確な上端はないが、残存する箇所を元に推定すると、いびつな楕円形を呈し、開口部径で90cm×85cm、底部径は62cm×60cmとなる。  
〈断面形・深さ〉段が付くU字形で、検出面からは58cmを測る。  
〈壁・底面〉壁はやや外傾するが途中で段を持ちさらに外傾して立ち上がる。底面には凹凸がある。  
〈埋土〉下位から黄褐色土、褐色土、暗褐色土の順に自然堆積の様相である。  
〈出土遺物〉なし。  
〈時期〉埋土の状況から縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性



## SK11 土坑 (図版21 写真図版18)

- 〈位置〉調査区中央部やや北よりで、II A 2 g グリッドに位置する。
- 〈検出状況〉III層に入れたトレンチの断面で検出した。よって本遺構の半分は消失している。
- 〈重複関係〉なし。
- 〈平面形・規模〉残存箇所からの推定で、円形を呈し、開口部径115cm×108cm、底部径62cm×60cm
- 〈断面形・深さ〉上面は消失している。残存する箇所では浅いピーカー型で最深部は20cmを測る。
- 〈壁・底面〉壁はやや外傾して立ち上がる。底面はかなりの凹凸がある。
- 〈埋土〉黒褐色の埋土である。
- 〈出土遺物〉土器は49.6gの出土で、石器の出土はない。掲載遺物はない。
- 〈時期〉埋土の状況から縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

## SK12 土坑 (図版22 写真図版18)

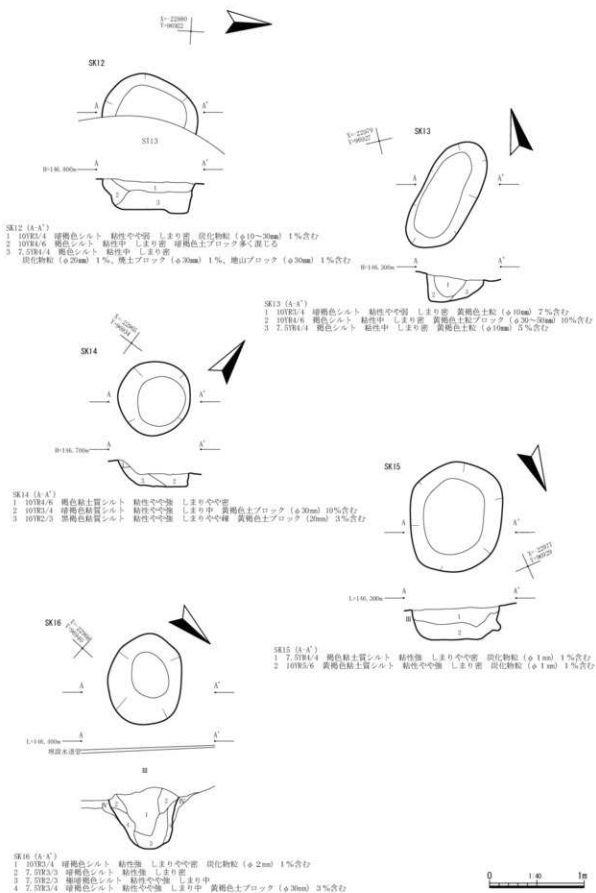
- 〈位置〉調査区北西側で、II A 1 f グリッドに位置する。
- 〈検出状況〉SI13の精査中にIII層で検出
- 〈重複関係〉SI13に切られている。本遺構のほうが古い。
- 〈平面形・規模〉残存箇所で見ると、楕円形を呈し、開口部径は102cm×45cm、底部径は72cm×31cm
- 〈断面形・深さ〉浅いピーカー型で、深さは30cmである。
- 〈壁・底面〉片方の壁はほぼ垂直に立ち上がるがもう一方は外傾する。底面に杭穴らしきものあり。
- 〈埋土〉3層に分層したが最下層に焼土・炭化物ブロックがある。
- 〈出土遺物〉土器は416.9gの出土で、2点(166、167 図版35 写真図版37)掲載、石器は礫石器1点出土しているが掲載していない。
- 〈時期〉SI13より古い。出土遺物は縄文時代前期に属するものが出ており該期か

## SK13 土坑 (図版22 写真図版19)

- 〈位置〉調査区北寄り、I A 10 g グリッドに位置する
- 〈検出状況〉IV層上面で検出した。
- 〈重複関係〉SI13を切っており、本遺構の方が新しい。
- 〈平面形・規模〉長楕円形を呈し、開口部径128cm×58cm、底部径98cm×34cmとなる。
- 〈断面形・深さ〉不整形で最深部は検出面から28cmである。
- 〈壁・底面〉壁はV層を掘り込んでおり固く締まる。底面は凹凸があり礫も露出している。
- 〈出土遺物〉土器は8.8gの出土で、石器の出土はない。いずれも掲載していない。
- 〈時期〉SI13(縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性)より新しいが、それほど離れていない時期と思われる。

## SK14 土坑 (図版22 写真図版19)

- 〈位置〉調査区北端で、I A 7 i グリッドに位置する。
- 〈検出状況〉V層上面で褐色土の広がりを検出した。
- 〈重複関係〉なし。
- 〈平面形・規模〉円形を呈し、開口部径80cm×80cm、底部径55cm×50cmとなる。
- 〈断面形・深さ〉不整形で、深さは検出面から30cmである。



第22図 SK12、13、14、15、16土坑

- 〈壁・底面〉壁はVI層を掘り込んでおり片方は直立、もう片方は外傾する。  
 〈埋土〉褐色土が主体で、暗褐色土ブロックや焼土ブロックが入り込み人為堆積と思われる。  
 〈出土遺物〉土器は62.9gの出土で、石器の出土はない。いずれも掲載していない。  
 〈時期〉検出状況から縄文時代と考えられるが詳細は不明である。

## SK15 土坑 (図版22 写真図版19)

- 〈位置〉調査区北側、I A10 h グリッドに位置する  
 〈検出状況〉V層で検出したが、掘り込みはIV層からのようである。  
 〈重複〉なし。  
 〈平面形〉やや隅丸方形に近い円形で、開口部径110cm×98cm、底部径82cm×64cmである。  
 〈断面形・深さ〉浅いピーカー状で、検出面からの深さは35cmを測る。  
 〈壁・底面〉直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。  
 〈埋土〉褐色土、黄褐色土が主体で、一部炭化物粒が混入する。自然堆積と思われる。  
 〈出土遺物〉土器は219.1gの出土で、石器は出土していない。いずれも掲載していない。  
 〈時期〉埋土の状況から縄文時代と思われるが詳細は不明である。

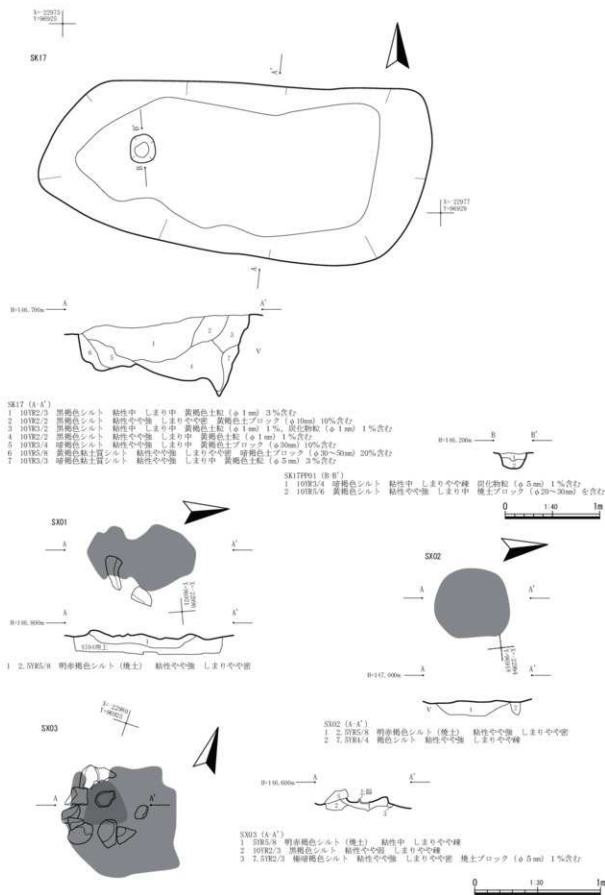
## SK16 土坑 (図版22 写真図版19)

- 〈位置〉調査区北東端で、I A7 j グリッドに位置する。  
 〈検出状況〉V層で検出したが、掘り込みはIV層からのようである。  
 〈重複関係〉なし。  
 〈平面形・規模〉円形を呈し、開口部径98cm×78cm、底部径50cm×40cmとなる。  
 〈断面形・深さ〉U字形で、最深部は検出面から約60cmを測る。  
 〈壁・底面〉壁はやや外傾するもののほぼ、垂直に立ち上がる。VI層の礫が露出する。  
 〈埋土〉暗褐色土を主体とする。  
 〈出土遺物〉なし  
 〈時期〉埋土の状況から縄文時代と思われるが詳細は不明である。

## SK17 土坑 (図版23 写真図版20)

- 〈位置〉調査区北側で、I A10 g グリッドに位置する。  
 〈検出状況〉V層で黒褐色土の広がりを検出し、当初住居跡としたが、底面の状況から土坑とした。  
 〈重複関係〉なし。  
 〈平面形・規模〉いびつな楕円形を呈し、開口部径412cm×182cm、底部径318cm×130cmとなる。  
 〈断面形・深さ〉不整形で最深部は検出面から65cmを測る。  
 〈壁・底面〉壁はやや外傾するが場所によってはほぼ垂直となる箇所もある。底面はVI層まで掘り込んであり赤褐色の礫が露出し、凹凸がある。  
 〈埋土〉黒褐色土が主体である。黄褐色土ブロックの混入が見られ、人為堆積の可能性がある。  
 〈出土遺物〉土器は5,307.6gの出土で、10点 (138~147 図版34 写真図版35)、石器は剥片石器5点、礫石器が3点で1点 (277 図版42 写真図版46) を掲載した。  
 〈時期〉埋土の状況及び遺物の出土状況から縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

2 土坑と陥し穴状遺構



第23図 SK17土坑、SK01、02、03焼土遺構・炉跡

## 3 焼土遺構・炉跡・不明遺構

## SX01 炉跡 (図版23 写真図版20)

〈位置〉 調査区中央からやや西寄りのⅡA5 f グリッドに位置する。

〈検出状況〉 検出面はSI04の埋土上である。

〈形状・規模〉 焼土の広がりは最大で86cm×53cmの範囲である。平面形は達磨形である。焼土の厚さは最大で10cmである。作り変えが行われた炉跡の可能性がある。

〈出土遺物〉 土器は497.9gの出土で、石器の出土はない。いずれも掲載していない。

〈時期〉 検出状況及び出土炭化物の年代測定から弥生時代中期の可能性

## SX02 炉跡 (図版23 写真図版20)

〈位置〉 調査区中央からやや北西寄りのⅡA4 e グリッドに位置する。

〈検出状況〉 V層上面で明赤褐色の焼土を確認した。

〈形状・規模〉 焼土の広がり最大で60cm×54cmの範囲で、平面形は円形である。焼土の厚さは最大で11cmである。焼土を囲むように暗褐色土が帯状に回っており、炉石が据えられていた可能性あり。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 検出状況から縄文時代と思われるが詳細は不明である。

## SX03 炉跡 (図版23 写真図版20)

〈位置〉 調査区北部のⅡA1 g グリッドに位置する。

〈検出状況〉 検出面はSI13の埋土中である。SI13を精査中に不整形な焼土の広がりを確認し、精査を開始した。精査過程で複数の礫を確認し、これが円形に配置されていることが確認できたため、石囲炉とした。上位の焼土と下位の石囲炉は別遺構の可能性はあるが、ここでまとめて報告する。

〈形状・規模〉 上位焼土の広がり最大値88cm×86cmで、平面形は歪な方形である。焼土の厚さは最大で7cmある。石囲炉は角礫で構成され、67cm×65cmの円形を呈する。石囲内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは最大で8cmある。なお、本遺構はSI13の1層を埋土とする遺構の炉跡の可能性はある。

〈出土遺物〉 土器は277.1gの出土で、1点(168 図版35 写真図版37)掲載した。

〈時期〉 SI13より新しい。縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

## SX04 炉跡 (図版24 写真図版21)

〈位置〉 調査区中央部からやや北側の東端、ⅡA3 j～ⅡB3 a にかけて、SI10の南隣に位置する。

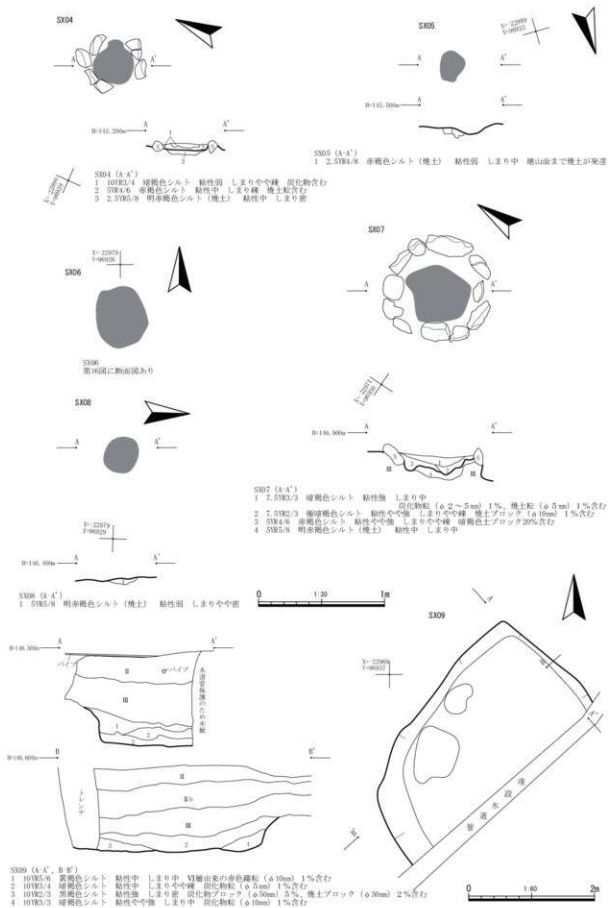
〈検出状況〉 SI10精査中にⅡ層の黒褐色土中で検出した。造成時の盛り土直下である。

〈形状・規模〉 角礫が円形に回る石囲炉であるが、径35cmである。焼土は断面観察では最大値5cmの厚さでレンズ状に形成されていた。住居の痕跡は確認できなかった。

〈出土遺物〉 なし。

〈時期〉 SI10の埋土と同じ土の上に形成されていることからみて、SI10と時期を同じくするかあるいはそれほど離れない新しい時期のものと思われる。縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

3 焼土遺構・炉跡・不明遺構



第24図 SX04、05、06、07、08焼土遺構・炉跡、SX09不明遺構

## SX05 焼土遺構 (図版24 写真図版21)

〈位置〉調査区中央部からやや北寄りのⅡA3 i に位置する。

〈検出状況〉Ⅳ層の褐色土で検出。

〈形状・規模〉方形を基調とし、平面形40cm×35cm、断面では5cm～10cmの厚さで焼土が形成される。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉Ⅳ層中に形成された焼土であることから、前述のSX04より古いと思われる。

## SX06 焼土遺構 (図版24 写真図版21)

〈位置〉調査区中央からやや西寄りのⅠA10g グリッドに位置する。

〈検出状況〉検出面はSI13の埋土中である。SI13の精査中に明赤褐色の焼土を確認し、精査した。

〈形状・規模〉焼土の広がりは92cm×80cmの範囲で、平面形は円形である。焼土の厚さは最大で11cmである。SX03と同様に、SI13の1層を埋土とする遺構の炉跡の可能性はある。

〈出土遺物〉土器は30.7gの出土で掲載していない。石器の出土はない。

〈時期〉縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

## SX07 炉跡 (図版24 写真図版21)

〈位置〉調査区北端のⅠA8h グリッドに位置する。

〈検出状況〉検出面はSI18の埋土中である。SI18の精査中にSI18の床面よりも上位で石囲炉を確認し、精査を開始した。本遺構が付随する堅穴住居跡は確認できなかった。

〈形状・規模〉石囲炉は主に角礫で構成され、85cm×85cmの円形を呈する。石囲内部には燃焼部を確認し、焼土の厚さは最大で7cmである

〈出土遺物〉土器は328.2gの出土で、1点(169 図版35 写真図版37)掲載、石器は礫石器が2点、出土しているが掲載していない。

〈時期〉SI18より新しい。縄文時代晩期末から弥生時代前期の可能性

## SX08 焼土遺構 (図版24 写真図版22)

〈位置〉調査区北端のⅠA10h グリッドに位置する。

〈検出状況〉検出面はⅣ層上面である。明赤褐色の焼土を確認し、精査を開始した。

〈形状・規模〉円形に広がりが30cm×29cmの範囲である。焼土の厚さは最大で6cmである。

〈出土遺物〉なし。

〈時期〉検出状況から縄文時代と思われるが、詳細は不明である。

## SX09 不明遺構 (図版24 写真図版22)

〈位置〉調査区北西端のⅠA8j グリッドに位置する。

〈検出状況〉検出面はⅤ層上面である。水道管際に暗褐色土の広がりを確認した。

〈形状・規模〉水道管を挟んだ南側では検出されておらず、全体の規模は不明であるが、径が3.9mほどの隅丸方形もしくは、隅丸矩形を呈するものと考えられる。床面には焼土や炭化物が広がり、規模から堅穴住居跡の可能性もあるが、全体像が不明であり、不明遺構として報告する。

〈出土遺物〉土器は8.4gのみの出土で、石器は出土していない。掲載遺物なし。

〈時期〉出土炭化物の化学分析、及び検出状況から縄文時代前期と思われる。

## V 出土遺物

### 1 縄文～弥生土器（図版25～40 写真図版23～43 観察表は図版内に付す）

<概要>大コンテナ（32×42×30cm）約10箱（接合前）出土した。遺跡の性格（集落）を表し、縄文時代晩期末（大洞A'式古期）～弥生時代中期前葉（谷起鳥式中段階？）、前期前葉（～大木2a式）が多いが、縄文時代中期中葉（円筒上層b式～大木8b式）も比較的多い。早期後半、後期、晩期後葉の土器は僅かである。

<整理状況・掲載基準>作業員4～5名で約7日間接合作業を行った。出土量の多い晩期末～弥生時代の土器は、概ね5×5cm以上のものを選んだが、それ以外の時期は、小片でも、文様があったり口縁部破片ならば、積極的に掲載した。胴部破片で地文のみのものは器形を復元できるもの以上しか選んでいない。

<記載要領・表の見方>個々の記載は表に記したので、ここで表の見方を補足しておく。“→”は調整順序を示し、矢印左側の方が前で、右側が後。“赤付”は赤色付着物のこと。壺と同じプローションをしていて深鉢と同じ煮炊きに使われたと推測されるものを“甕”と便宜的に呼称した。

<出土状況>個々の遺構の出土状況は、遺構の節参照。本項担当者は室内整理以後に関わったため詳細は知り得ない。

<出土土器の特徴>弥生土器は、器種・器形に関係なくスヤコゲが付着しているものが多い。中でも、109の高坏台部は、欠損後割れ口を調整して鉢として利用しているらしいことがわかった。255も、壺なのに煮炊きに使っているようである。弥生土器は、北上川流域と同様、前期まで肌～朱色基調で、中期になると焦げ茶色を呈するようになり金雲母を含む。金雲母のきらめきを引き立てるために地の色が濃くなるのかも知れない。

<特徴的な土器>64、254？は砂沢式新期の搬入品である。38、124は、砂沢式の模倣品である。

<時期・型式>詳細な時期・土器型式にふれていくが、冒頭で述べたように、弥生時代前期の土器が多く、地文のみで特定できなかったものは、この時期に多く帰属するものと思われるので、先にそれ以外の時期の土器を見ていく。

縄文時代早期と思われるのは、228、246で、228は内面に縄文が施される後葉、246は貝殻文が施される中葉土器である。

前期と思われるのは、11、45、46、50～53、55、56、58、77、149、151、156～158、163、166、167、170、171、178、180、181、184、188～190、196～198、200、203、206、210、213、207、215、221～224、226、231、234、238、244、252、257である。244は前期初頭だが、ほとんどが前期前葉と思われる（156、184、213は円筒下層d1式？）。明確な文様を持たず地文のみで小破片のものが多いので型式同定が難しいが、77、252は大木1式、11、50、52、163？、190、207、224、231は、大木2a式、その他の羽状縄文が主として施される、45、46、149？、151、157、158？、170？、178？、180、181、196～198？、215、221～223、226は、大木1式あるいはそれ以前に位置づけられるか。大木2a式と思われるものは、胎土に繊維混入は少なく、それ以前と思われるものに多い。

中期と思われるもの。少なく、小破片ながら、長期間にわたって見られる。87、220、237、253は、円筒上層b式、214？、250？は、大木7b式？、60、153？、165は、円筒上層d式、89は円筒上層e式？、199？、209？、229、243？、251？は、大木8a式、59、182、212、216、225は、大木8b式、



179?、185?は、大木10式か。150、211は、交互刺突意匠の文様が施されており、大木7a式新期か。195も大木7a式新期か。247は中期初頭?、その他、204、256も中期の可能性がある。

後期と思われるもの。148は、折り返し口縁で、初頭か。205の口縁部突起には強い刻目が認められ、瘤付土器か。

晩期（後葉まで）。137、208は、大洞A1式である。

以上の他のほとんどは、晩期末（大洞A'式古期）～弥生時代中期前葉（谷起鳥式中段階）と思われる（258も弥生土器か）。以下、土器型式が特定できたものを示すが、青木畑式までは金子（2007）、谷起鳥式については石川（2005）参照。大洞A'式古期と思われるのは、28?、29?、30?、69、72?、73、74、155?、162?、176?、202?、218?、230である。大洞A'式新期と思われるのは、19、33?、39～42?、48?、49?、67?、68、90、97、104、105?、107、124?、136?、140?、146?、168?、193、217、219?、259である。青木畑式と思われるのは、16=17、25、26、34?、38（砂沢式新期）、64（砂沢式系）、91?、93?、109、110（～谷起鳥式）、114、115、122?、135、154、175（～谷起鳥式古段階）、233?、236、254（砂沢式）。谷起鳥式古段階は、18、32、36?、47?、78（青木畑式?）、79、80?、94=95、96、98、101（青木畑式?）、102、121、123、126～129、130（青木畑式?）、132、133（青木畑式?）、145、161?、191、235、241（青木畑式?）、248?、249?。谷起鳥式中段階は、27、242、261のみである。125は、中期の異系統土器か。

本遺跡の谷起鳥式古段階は、流水文の先端が角張らず、青木畑式に近似するものが多い。しかし、色調は谷起鳥式のそれ（焦げ茶色）が多く、谷起鳥式の最古期のまとまりを示すものと思われる。

(a) 竪穴住居出土の土器（第25図1～第34図160、138～147除く）

縄文時代前期前葉か晩期末～弥生時代中期初頭のどちらかに帰属するものがほとんどである。層別に取り上げていないので何とも言えないが、時期幅を持つ住居が多い。ただし、SI14は、青木畑式新期あるいは谷起鳥式最古段階に限られるようである。

以下、表の補足。108の補修孔は、外面のみから開けられているか。109の上の欠損部は、調整されているように見え、付着物・残存状況から、鉢として転用され火にかけられた可能性が高い。

(b) 土坑、その他の遺構出土の土器（第34図138～147 第35図161～169）

竪穴住居跡出土土器と同様である。SK07は縄文時代中期になる可能性もあるが、掲載土器が一点のみで不明である。

(c) 遺構外出土の土器（第35図170～第40図261）

遺構内と顕著な違いは認められないが、縄文時代中期土器が比較的多い。また、早期（228、246）、後期後葉（205）なども出土している。

## 参考文献

- 石川日出志 2005「弥生中期谷起鳥式に後続する磨消縄文土器群」『岩手考古学』第17号 岩手考古学会  
金子 昭彦 2007「大洞A'式から青木畑式へ」『縄文時代』第18号 縄文時代文化研究会  
早瀬 亮介 2008「前期大木式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション

## 2 石器・石製品 (図版41~45 写真図版45~53)

最初におことわりしておくが、諸般の事情で、石器の掲載については、極限られたものしか掲載していない。具体的に言えば、図化したのは遺構内出土の選別されたもののみである。遺構外で掲載候補としたものは図化せず、写真掲載のみとした。

今回の調査で取り上げた石器及びそれに類するものの数量は中コンテナ7箱である。この中から明らかに人為的な痕跡が残るものを選別し登録した。剥片石器133点(遺構内56点、遺構外77点)、礫石器164点(遺構内61点、遺構外103点)となる。

本遺跡の前に調査した近隣の青野滝北Ⅰ遺跡と比較すると石器の出土率が土器の出土量に比べて格段に多い。(青野滝北Ⅰ遺跡は縄文時代中期を主とする遺跡である。)

青野滝北Ⅰ遺跡	検出住居15棟	石器40箱(大コンテナ)	石器14箱(中コンテナ)
向新田Ⅲ遺跡	検出住居17棟	石器10箱(大コンテナ)	石器7箱(中コンテナ)

上記の資料のとおり、本遺跡は、土器の出土量が青野滝北Ⅰ遺跡の量の四分の一であるのに対し石器の出土量は二分の一となる。が土器対石器の比で言えば、本遺跡の方が青野滝北Ⅰ遺跡の2倍の出土率であることがわかる。

## (1) 剥片石器

剥片を分類し石器として認定したのは合計133点ある。出土地点で分けると、遺構内56点、遺構外77点となる。器種別には、出土数の多い順に、石匙42点、石鏃27点、削器26点、搔器10点、石錐5点、石槍2点で、石匙が群を抜いて多い。この他に、加工痕のある形状不明の剥片が21点ある。

## ① 石鏃

遺構内17点、遺構外10点の計27点出土した。このうち遺構内の9点を図化し、これに遺構外の5点を加えて写真掲載とした。識別できるものでは、平基無茎、平基有形、凹基無茎、凸基有形、尖基、の5種類に分類される。270は基部に付着物が観察される。274は先端部に細かい剥離の跡が見られる。これは形状から石錐の可能性もある。270、271、278、302は先端部に欠けが見られる。石質はすべて北上山地産の頁岩である。

## ② 石匙

遺構内12点、遺構外30点の計42点出土した。このうち遺構内8点を図化し、これに遺構外の14点を加えて写真掲載とした。264、275、281、303は縦型であり、先端部を尖らせている。特に281は顕著である。267は縦型で先端部を丸く作っており搔器の様相も呈している。280はつまみ部の挟りが浅い。283は縦型であるが、つまみ部が薄く、縁辺部に自然面を残している。先端部は斜に平らになっており、もしかしたら欠損品を再加工したものかもしれない。石質はすべて北上山地産の頁岩である。

## ③ 石錐

遺構内5点のみで、そのうち2点を図化して掲載した。263はつまみ部に大きく欠けが見られ、錐部の先端もきれいに欠けている。使用できなくなったものを廃棄したものの可能性が高い。265は錐の部分が石鏃の先端部に似て扁平で尖っている。完形であるが僅かに先端部に使用跡が見られる。石質はすべて北上山地産の頁岩である。

## ④ 削器

剥片の側縁に連続的に刃部を形成したものをここに分類した。遺構内11点、遺構外15点の計26点出土した。このうち遺構内の3点を図化し、これに遺構外の3点を加えて写真掲載とした。269の石質は本遺跡出土遺物の中で唯一の玉髄である。側縁部両側に片面加工の刃部が形成されており、先端部には自然面を残す。273は側縁の片側から下端部に欠けて両面加工の刃部が形成されている。石質は頁岩である。276は赤色頁岩で262の石鏃と同じである。前述の269の玉髄と同様に他の石器に比して異色である。特に赤色へのこだわりがあったのであろうか。もしそうだとすれば、珍重されたに違いない。両側縁部に片面加工で刃部が形成され、端部を尖らせている。刺突的な使用も推測される。317も両側縁部に刃部を片面加工し、先端部を尖らせており、先端部に欠けが見られる。318、319は木葉状ではほぼ全面に加工がなされている。319は搔器の可能性もある。317～319の石質は頁岩である。

## ⑤ 搔器

急角度に調整された刃部をもつものをここに分類した。遺構内3点、遺構外7点の計10点中残りの良い遺構外出土の3点を写真掲載した。いずれもサイズは長さ4cm弱と小型であり内面にわずかな湾曲が見られる。320は剥片の打点を上に側縁部に加工痕をもつ。刃部は薄いが調整角度は急である。321は非常に粗い作りであり刃部も薄い。急角度の刃部には使用痕らしいものが見て取れる。322は片面加工で縁辺部を作り出し刃部は厚みをもつ。石質はいずれも北上山地産の頁岩であるが、不掲載遺物には凝灰岩、メノウ製のものもある。

## ⑥ 石槍

2点出土し掲載した。いずれも遺構外であり近辺に遺構のない箇所である。284は下半を欠く欠損品であるが表面に焼け弾けが見られる。石質は北上山地産の頁岩であるが、黒曜石のな輝きが見られる。285は完形である。先端部に使用痕と思われる剥離が見られる。縁辺部から先端部まで鋭利な面を残しており、基部には柄が付く。非常に丁寧に作られており、石質は本遺跡では唯一の黒曜石である。産地同定はしていない。この2点は石質が違うのみで、スケールのにも、加工方法にもかなりの類似点が見られ、同時代のものではないかと思われる。

## ⑦ その他

剥片石器に該当しないものを一括した。すべて不掲載であるが全部で21点ある。単なる剥片と違い、加工痕のあるものである。中には制作途中のもの含まれるかもしれない、あるいは使用に耐えなく廃棄されたものもあるかもしれない。

## (2) 礫石器

石器として認定したのは合計で164点である。出土地点で分けると、遺構内61点、遺構外103点となる。器種別にみると、出土数の多い順に、特殊磨石44点、磨石39点、敲石38点、凹石13点、磨製石斧12点、台石5点、石錘2点、石皿1点で、この他に分類ができない器種不明のものが10点ある。ただし複合的に使われているものは筆者の独断で主に使われていると判断した器種名で分類している。

## ① 特殊磨り石

遺構内7点、遺構外37点の計44点の出土であり、このうち遺構内出土の4点を図化し、これに遺構外出土の6点を加えて写真掲載とした。最大重量のものは1249.3gを量り、最小のものは176.6g、平均では548.58gとなる。以下の石器も同様であるが、片手で使用するにはどのくらいまでが限度であろうか。288、292、338、339、343は先端部に敲き痕がみられる。290は先端部に磨り痕がみられる。340は先端部に斑な黒色の色調変化があり、被熱かもしれない。341、342は側面の使用面に磨り面と

は別に敲打痕があり、剥離もみられる。

### ② 磨石

遺構内24点、遺構外15点の計39点の出土であり、このうち遺構内出土の4点を図化し、これに遺構外の5点を加えて写真掲載とした。最大重量のものは1603.2gを量り、最小のものは43.4g、平均では592.65gとなる。1000gを超えるものが5点ある。磨り面には大別して2種類ある。粗い磨り面と、磨かれた様な磨り面である。289、295、326、328、329は磨きのような磨り面をもつものである。前述のとおり複合的に使われているのもあり、289、294、327、329は磨り面のほかに敲打痕をもつものである。なお295は、腹面は磨きて、側縁は粗い磨り面となる。

### ③ 敲石

遺構内16点、遺構外22点の合計38点の出土であり、このうち遺構内の1点を図化し、これに遺構外の5点を加えて写真掲載とした。最大重量のものは1297.5gを量り、最小のものは45.5g、平均では481.79gとなる。1000gを超えるものは3点ある。図化した291は石質が砂岩であり、多くは石皿に利用されているものである。断面が台形状の直方体に加工されて端部の一端が使用されている。ちょうど堅柱のような使用が推測される。333は扁平である。両端部と側縁を使用しており端部の一端は欠けが生じている。334は端部の一方は敲き痕が残るがもう一方は対象物に直角に当たった様な磨り跡が顕著に見られる。335は円筒状の先端部に敲打痕がめぐり、ちょうど鉛筆を削ったような形になっている。336は扁平なかまほこ状の側縁部に敲打痕が残されている。337は断面形が卵形となる円筒状のもので先端部に近い箇所を側縁を利用している。これは、杖を持つような握り方ではなく、指揮棒を持つような握り方で使用したことが窺い知れる。

### ④ 凹石

遺構内8点、遺構外5点の合計13点の出土であり、このうち遺構内の2点を図化し、これに遺構外の3点を加えて写真掲載とした。最大重量のものは1708.4gを量り、最小のものは240.9g、平均では632.07gとなる。1000gを超えるものは2点ある。286は卵形で、凹みより先端部に磨かれた様な磨り面が顕著である。287は重量1000gを超えるもので、両面に凹みはあるが凹みは浅く、触れてみて確認できる程度である。323は扁平で両面に凹みをもつが、側縁に敲き痕が見られる。324は重量240gと小型である。凹みは両面にあるが片面は深く反対面は極端に浅い。側面に擦った跡がある。325は拳大より一回り大きい。これも両面に凹みをもつが複数穿たれている。

### ⑤ 磨製石斧

遺構内2点、遺構外10点の合計12点の出土であり、このうち残りの良い遺構外の5点を写真掲載とした。344は基部のみで下半部を欠くが、残存部の断面形が円形である。乳棒状石斧と思われる。345は基部の一部を欠き全長はわからないが、残存値で長さは11.4cmを測る。これも横断面形は円形で乳棒状石斧である。刃部のみ磨き跡が見られ円刃となっている。使用による欠けがある。346は完形である。これも乳棒状石斧と思われる。刃部の片面にだけ磨きの跡が見られる。使用痕が顕著である。この2点はベッキングにより全体が整形されている。347は定角式石斧である。表裏と両側面に磨き痕はあるが全体的に磨かれているわけではなく、磨かれていない部分を残す。装着のための工夫かもしれない。348は小型で定角式磨製石斧である。完形で、長さ4.8cmを測る。石質は砂岩で全面がきれいに磨かれている。刃部は扁刃となっている。

### ⑥ 台石

遺構内3点、遺構外2点の合計5点であり、このうち遺構内の1点のみを図化し掲載した。最大重量のものは5275.4g、最小は368.8g、平均では3079gとなる。293は堅穴住居跡の床面からの出土であり、

扁平な円形である。石質は砂岩で表面中央部に不定形に磨り面が広がる。裏面には使用痕は認められない。

#### ⑦ 石錘

遺構外からの2点のみの出土である。2点とも写真掲載とした。331は扁平な楕円形基調であり、重量は111.4gとなる。短軸の両側縁にわずかな抉りが入り、ここに擦痕が観察される。332はこれより大きく長径11cmの重量442.2gとなる。長軸の両側縁を敲いて抉りを入れている。これも抉り部分に擦痕が見られる。

#### ⑧ その他

以下は不掲載であるが、念のため概要だけ記しておく。石皿の欠損品が1点出土している。石質は砂岩で、前述の291敲石と同一のもの可能性が高い。他に平板な磨き面をもつ扁平な碟で欠損しており形状用途等不明である。石銚としたものか、加工の跡が残るが確認できないものが3点、加工したものか自然の形状なのか、棒状のものが3点、内2点は石質がホルンフェルスなため、石製品の未製品かもしれない。

### (3) 石製品

3点出土し、3点掲載した。上記の⑧その他の中に該当するものがあるかもしれないが、数的には多くない。

扁平なものを石刀とし横断面が円形を呈するものを石剣とした。349は完形、石質はホルンフェルスである。縁辺部に刃をつけるように薄く加工されている。縦断面は直線とはならず、わずかに湾曲している。350は断面形が楕円形となる。石質は安山岩で欠損品である。残存部では先端にかけて窄まり、全面がきれいに磨かれている。側縁とそれを挟む形で薄い稜線が形成されている。351は欠損で両端部を欠き全体像が不明であるが、横断面形は蒲鋒形で、棒状に作られたものの一部と思われる。

第2表 石器・石製品観察表

掲載No.	図版	写真	出土地点・層位	器種	法量値 ( ) は残存値				石材	産地	備考
					長さ[cm]	幅[cm]	厚さ[cm]	重量[g]			
262	41	45	SI01南西部・埋土	石鏃	(3.30)	1.25	0.90	3.30	赤色頁岩	北上山地	基部欠損 尖基
263	41	45	SI01南西部・埋土	石鏃	(3.75)	(2.70)	(1.00)	5.70	頁岩	北上山地	先端部・つまみ部欠損
264	41	45	SI04・埋土	石砦	5.80	2.60	0.85	7.00	頁岩	北上山地	完形 縦型
265	41	45	SI09南側・埋土	石鏃	4.30	1.80	0.70	4.00	頁岩	北上山地	完形
266	41	45	SI10南東部・埋土	石鏃	1.70	1.30	0.30	0.40	頁岩	北上山地	完形 小型 平基
267	41	45	SI10床	石砦	5.15	2.05	0.65	6.70	頁岩	北上山地	完形 縦型
268	41	45	SI10埋土	石砦	3.60	3.90	0.85	8.80	頁岩	北上山地	完形 横型
269	41	45	SI10北西部・埋土	簡器	4.60	3.05	1.10	11.80	玉髄	北上山地	完形 片面加工 先端部に自然破れ
270	41	45	SI12・埋土上位	石鏃	(3.15)	1.10	0.40	0.90	頁岩	北上山地	先端部欠け 凸基有基 基部付着物
271	41	45	SI12・埋土上位	石鏃	(2.75)	1.00	0.50	1.10	頁岩	北上山地	先端部欠け 平基有基
272	41	45	SI13・埋土下位	石鏃	3.80	1.20	0.80	3.80	頁岩	北上山地	完形 尖基
273	41	45	SI13南東部・埋土	簡器	6.50	5.20	1.40	40.00	頁岩	北上山地	片面加工 先端部に調整加工
274	41	45	SI14・埋土	石鏃	3.60	1.20	0.65	1.50	頁岩	北上山地	先端部割断 石鏃の可能性も
275	41	45	SI15・埋土	石砦	4.50	2.10	0.85	4.70	頁岩	北上山地	完形 縦型
276	41	45	SI15・埋土	簡器	4.50	2.85	0.80	9.80	赤色頁岩	北上山地	完形 先端部やや突起
277	42	46	SK17西側・埋土	石鏃	2.70	1.45	0.50	1.50	頁岩	北上山地	完形 平基無基
278	42	46	SI18・埋土	石鏃	(2.45)	1.50	0.30	0.90	頁岩	北上山地	先端部欠け 凹基無基
279	42	46	SI19・埋土	石砦	5.30	2.15	1.00	8.20	頁岩	北上山地	完形 縦型 片面加工
280	42	46	SI19・埋土	石砦	7.20	4.30	1.20	25.70	頁岩	北上山地	完形 挟り浅い
281	42	46	SI19・埋土	石砦	4.30	2.80	0.70	6.40	頁岩	北上山地	完形 縦型 先端部尖状
282	42	46	SK04・埋土	石鏃	2.30	1.35	0.25	0.60	頁岩	北上山地	完形 浅い凹基
283	42	46	SK04・埋土	石砦	5.20	2.85	1.05	12.00	頁岩	北上山地	縦型 先端部欠けを再調整か?
284	42	46	II A5・Ⅱ層	石槍	(7.55)	(3.15)	(1.00)	17.00	頁岩	北上山地	下半欠損
285	42	46	II A2h・Ⅲ層	石槍	9.40	3.00	1.20	29.60	黒曜石	不明	完形
286	43	47	SI01・埋土	凹石	8.70	5.70	4.70	344.20	燧岩	北上山地	凹みと端部に磨り面
287	43	47	SI04北西部・埋土	凹石	13.60	11.50	5.00	1283.40	砂岩	北上山地	両面に凹み、鋭き痕あり
288	43	47	SI06北端・埋土	特殊磨石	15.40	7.20	5.00	874.40	砂岩	北上山地	先端部敲打痕
289	43	47	SI10東北部・埋土	磨石	9.70	7.60	5.50	583.90	燧岩	北上山地	磨かれた磨り面 鋭き痕あり
290	43	47	SI12・埋土下位	特殊磨石	11.50	6.20	5.30	482.00	砂岩	北上山地	先端部にも磨り面
291	43	47	SI12中石	敲き石	15.90	6.60	4.20	538.30	砂岩	宮古郡郡	材質は石胆と同一
292	44	48	SI13・埋土下位	特殊磨石	12.70	5.40	5.20	539.90	砂岩	北上山地	両端部敲き痕
293	44	48	SI13・床	台石	22.60	19.00	6.80	5072.90	砂岩	北上山地	中央部に磨り痕
294	44	48	SI14・埋土	磨石	15.30	8.70	7.60	1543.80	砂岩	北上山地	敲打痕あり
295	44	49	SI18・埋土	磨石	10.60	9.50	5.60	908.80	砂岩	北上山地	縁部凹み・磨り痕、表面は磨き痕
296	44	49	SK04・埋土	磨石	9.20	6.20	2.30	226.80	砂岩	北上山地	側面のみ使用
297	44	49	SK12・埋土	特殊磨石	15.80	7.40	4.70	855.00	デイスサイト	北上山地	
298	50	Ⅱ A2f・Ⅲ層	石鏃	2.00	1.50	0.40	0.80	頁岩	北上山地	完形 平基無基	
299	50	Ⅱ A1h・盛り土	石鏃	1.70	1.20	0.30	0.50	頁岩	北上山地	完形 凹基無基	
300	50	調査区 北西側・Ⅲ層	石鏃	3.70	1.80	0.50	2.90	頁岩	北上山地	完形 凹基無基	
301	50	Ⅱ A4j・Ⅳ層	石鏃	2.00	1.50	0.30	0.70	頁岩	北上山地	完形 平基無基	
302	50	Ⅱ A2g・Ⅲ層	石鏃	3.00	0.90	0.50	1.10	頁岩	北上山地	平基有基 先端部に僅かな欠け?	
303	50	Ⅱ A2g・Ⅲ層	石砦	5.00	3.00	0.60	5.90	頁岩	北上山地	完形 縦型	
304	50	Ⅱ A2e・Ⅲ層	石砦	4.10	2.90	0.60	5.40	頁岩	北上山地	完形 横型	
305	50	Ⅱ A1j・Ⅲ層	石砦	5.00	3.50	0.80	10.80	頁岩	北上山地	完形 横型	
306	50	調査区北側Ⅲ層上位	石砦	(4.30)	3.20	0.80	8.60	頁岩	北上山地	一部欠損 横型	
307	50	I A8f・Ⅲ層	石砦	3.90	2.90	0.60	6.10	頁岩	北上山地	ほぼ完形 横型	
308	50	Ⅱ B1a・Ⅳ層	石砦	(5.30)	3.20	0.70	9.80	頁岩	北上山地	一部欠損 横型	
309	50	Ⅱ A10g・Ⅲ層	石砦	5.90	2.20	0.70	9.20	頁岩	北上山地	完形 縦型	

掲載No.	図版	写真	出土地点・層位	器種	法量値 ( )は残存値				石材	産地	備考
					長さ[cm]	幅[cm]	厚さ[cm]	重量[g]			
310	50	II A4f-III層	石匙	6.20	2.10	0.60	7.50	頁岩	北上山地	完形 假型	
311	50	I B7a-III層	石匙	4.50	2.20	0.50	4.30	頁岩	北上山地	完形 假型	
312	50	II B1a-IV層	石匙	6.10	1.60	0.50	5.50	頁岩	北上山地	完形 假型	
313	50	II A1i-III層	石匙	5.70	1.80	0.60	6.10	頁岩	北上山地	完形 假型	
314	50	II B2 a-III層	石匙	6.10	2.50	0.80	13.20	頁岩	北上山地	完形 假型	
315	50	II A2e-III~IV層	石匙	6.40	2.30	0.70	10.20	頁岩	北上山地	完形 假型	
316	50	II A2g-III層	石匙	6.00	1.50	0.70	5.50	頁岩	北上山地	完形 假型	
317	50	II A2j-III層	刮器	5.60	3.60	1.00	19.00	頁岩	北上山地	完形 片面加工	
318	50	II B1a-III層	刮器	5.60	3.30	0.80	16.70	頁岩	北上山地	完形	
319	50	II B1a-IV層	刮器	5.00	2.80	1.10	17.90	頁岩	北上山地	刮器かもしれない	
320	50	I A8i-III層	刮器	3.50	1.70	0.60	3.00	頁岩	北上山地	完形 側面も加工	
321	50	II B4a-IV層	刮器	3.90	1.90	0.70	3.30	頁岩	北上山地	完形 片面加工	
322	50	I A8i-III層	刮器	3.90	2.60	0.80	8.00	頁岩	北上山地	片面加工 側面も加工	
323	51	II A2e-III~IV層	凹石	8.80	7.30	3.20	234.70	頁岩	北上山地	両面に凹み、側縁に敲き痕	
324	51	II A3f-III層上位	凹石	9.70	5.70	2.80	249.90	頁岩	北上山地	表裏に凹みをもつ、両面に磨り痕	
325	51	II A2f-III層	凹石	11.40	8.70	6.40	928.60	砂岩	北上山地	表裏両面に凹み	
326	51	II A2h-III層?	磨石	14.50	8.00	6.00	1052.90	アイサイト	原地山層	磨面に磨かれた様な磨面をもつ	
327	51	II A2h-III層	磨石	11.10	6.10	3.10	384.40	アイサイト	原地山層	両端部に敲打痕	
328	51	II A3h-III層	磨石	12.40	9.50	8.20	1407.40	石英琺瑯岩	北上山地	磨かれた様な磨面	
329	51	II A4j-IV層	磨石	9.50	6.70	4.20	413.70	砂岩	北上山地	磨きのような磨面と敲打痕	
330	51	II A2h-III層	磨石	12.50	7.20	4.70	578.60	アイサイト	原地山層	使用面に剥離	
331	51	I A10i-1層	石鏃	7.00	4.90	1.40	111.40	砂岩	北上山地	短軸の両端に尖り、磨れ痕あり	
332	51	II A4j-IV層	石鏃	11.00	7.70	3.40	442.20	頁岩	北上山地	長軸の両端に尖り、磨れ痕あり	
333	52	II A2f-III層	敲石	13.90	7.70	3.70	640.60	砂岩	北上山地	両端部と側縁部に敲打痕	
334	52	調査区東側-III層	敲石	9.70	4.80	3.20	217.70	凝灰岩	北上山地	端部に粗い磨面と敲打痕	
335	52	II A6f-III層	敲石	12.50	6.60	6.30	786.20	砂岩	北上山地	先端部敲打痕顕著	
336	52	II A3f-III層	敲石	11.50	7.00	2.60	329.90	砂岩	北上山地	側面に敲打痕	
337	52	II A4j-IV層	敲石	13.80	5.90	4.90	632.30	ヒン岩	北上山地	先端部の両側面使用	
338	52	I A9h-III層	特殊磨石	12.40	6.60	5.40	667.55	アイサイト	原地山層	両端部に敲打痕顕著	
339	52	II A2f-III層	特殊磨石	13.30	7.50	5.30	822.32	アイサイト	原地山層	端部に敲き痕	
340	52	II A2i-III層	特殊磨石	11.80	5.80	3.30	311.80	砂岩	北上山地	端部に黒色付着物	
341	52	II B1a-IV層	特殊磨石	(13.50)	6.30	4.00	512.00	砂岩	北上山地	先端部欠け、側面に敲打痕	
342	53	II A2f-III層	特殊磨石	13.20	8.00	4.30	691.40	砂岩	北上山地	使用面に剥離	
343	53	II A2f-III層	特殊磨石	12.90	8.30	6.10	1025.10	ヒン岩	北上山地	6面使用、敲・磨	
344	53	II A4h-III層	磨製石斧	(6.40)	(4.00)	(3.80)	126.90	細粒閃緑岩	北上山地	基部のみ 乳棒状石斧?	
345	53	II A4h-III層	磨製石斧	(11.40)	4.80	(3.80)	335.50	凝灰岩	北上山地	刃部のみ磨き、基部を欠く	
346	53	II A6h-III層	磨製石斧	9.80	4.10	3.50	221.20	細粒閃緑岩	北上山地	刃部に磨き	
347	53	I A10i-1層	磨製石斧	9.70	5.10	2.80	201.70	凝灰岩	北上山地	刃部剥離、使用痕か?	
348	53	I A7j-III層	磨製石斧	4.80	2.20	0.80	19.90	砂岩	北上山地	小型 偏刃 再調整か?	

## 石製品

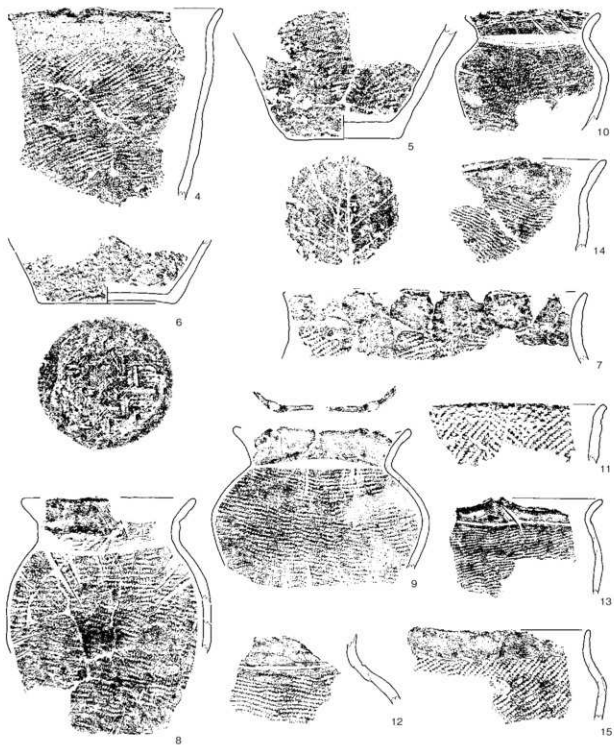
掲載No.	図版	写真	出土地点・層位	器種	法量値 ( )は残存値				石材	産地	備考
					長さ[cm]	幅[cm]	厚さ[cm]	重量[g]			
349	45	49	S01北東部-埋土下位	石刀	18.80	4.80	1.40	105.70	キルンフェルス	北上山地	完形 両側縁に刃部
350	45	49	S01-埋土中位	石剣	(8.00)	(2.00)	(1.10)	34.00	安山岩	北上山地	側縁に残存 全面に磨き 先端部摩耗
351	45	49	I A8i-III層	石剣	(8.80)	(2.05)	(1.50)	43.40	キルンフェルス	北上山地	断面は薄剣形 欠損



No.	出土地点・層位	器種・部位	内面		備考	本文記載
			(口縁部・胴部・底部/器身・継ぎ足など)	(脚部など)		
1	SI01-埋土	深鉢(一部欠損)	口縁上縁ヨコ・胴部ナデ(口縁部)・外縁・底部一部ナデ	ナデ	外面スス付着、内面灰けはじけ	
2	SI01-埋土	深鉢(口縁部未残)	口縁ナデ/口縁上縁ヨコ、フイロイロ	ナデ輪筋痕	外面上スス、フ二次焼成、内面コゲ付着	
3	SI01-埋土	深鉢(口縁一部)	口縁内/口縁ナデ/口縁上縁ヨコ、フタナメ、フタナ	ナデ凹点	外上スス、フ二次焼成、内フコゲ	

第25図 遺構内出土土器(1)





SI01

0 10cm 100cm

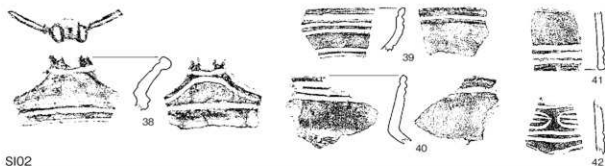
No.	出土地点・層位	器種・部位	内面		備考	参考図
			(口縁部、胴部、底部、裏面、横断面等々)	(面線など)		
4	SI01-埴土	深鉢(口縁一部)	口縁内、口縁ナテ/LR、上ヨコ、ナナメ	ナテ	外面無紋? 内面スス付着	
5	SI01-埴土	深鉢(底のみ一部)	LRヨコ、ナナメ→底部ナテ/裏面木葉紋	ナテ/編織紋	外面スス付着、内面コゲ付着	
6	SI01-埴土	深鉢(底のみ一部)	LRヨコ/口縁面斜状	ナテ	外面スス付着、内面コゲ付着	
7	SI01-埴土	深鉢(口縁未滿)	口縁ナテ/LR、ヨコ、ナナメ	ナテ	外面スス付着	
8	SI01-埴土	深鉢(底のみ一部)	口縁突起、口縁ナテ/縦帯彫刻(沈澱)/LR上ヨコ、下ナテ	ナテ	外スス二次焼成、内面下コゲ付着	
9	SI01-埴土	深鉢(口縁未滿)	口縁突起(部分)/口縁無文/LRナナメ	ナテ/編織紋	外面スス多、下二次焼成、内面コゲ多	
10	SI01-埴土	深鉢(底のみ一部)	口縁突起/口縁突起(沈澱)/口縁突起/LRヨコ	ナテ/編織紋	外面スス付着、下側部、内面コゲ付着	
11	SI01-埴土	深鉢(口縁部)	口縁突起、縦突起/LRヨコ/口縁無文	ナテ	口縁突起多	
12	SI01-埴土	深鉢(口縁部)	口縁ナテ/口縁突起/LRナナメ	ナテ/編織紋	外面スス付着	
13	SI01-埴土	鉢(口縁未滿)	口縁突起/口縁突起/LRヨコ	ナテ	口縁突起多	
14	SI01-埴土	鉢(口縁部)	口縁突起(沈澱)/口縁ナテ/LRナテ、ナナメ	ナテ	内面スス	
15	SI01-埴土	深鉢(口縁部)	口縁無文/LRヨコ	ナテ		

第26図 遺構内出土土器(2)

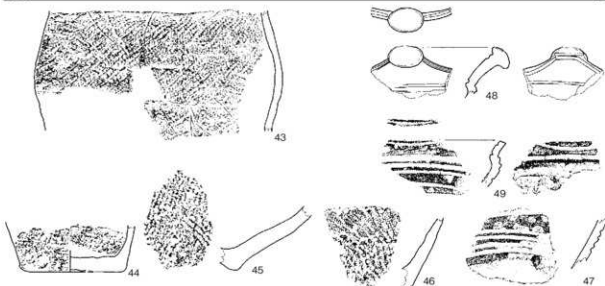


No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胴部・底部・裏面、横文関係など)	内 面 (内面など)	備 考	本文 記載
16	SI01-埋土	高杯(丸底本蓋)	口縁内面水平沈線・深め沈線・土灰ナメ	ナメ	厚板・丸行同一器体	
17	SI01-埋土	高杯(口縁)			●口縁一器体	
18	SI01-埋土	高杯(口縁本蓋)	深い沈線・土灰	ナメ	厚板? 外面赤色付着物	
19	SI01-埋土	高杯(口縁)	土灰	土灰	赤色付着物、内面スス付着物	
20	SI01-埋土	浅鉢(口縁部)	内面風化沈線・土灰コブ・外面土灰	土灰		
21	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面水平沈線・深い沈線・粘土粒・土灰	土灰		
22	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面水平沈線・土灰	土灰	●接合片(色澤)	
23	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面水平沈線・土灰	土灰		
24	SI01-埋土	深鉢(口縁部)	土灰コブ・断面沈線	ナメ	外面スス付着	
25	SI01-埋土	高杯(口縁)	深い沈線・土灰	土灰	外面スス付着	
26	SI01-埋土	高杯(口縁)	土灰	土灰	厚板	
27	SI01-埋土	高杯(口縁)	土灰コブ・深い沈線・土灰	土灰	内面スス付着物	
28	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面水平沈線・突起部部2段で口縁沈線・粘土粒小	厚板		
29	SI01-埋土	鉢(口縁部)	内面浅・水平沈線・粘土粒	土灰	外沈線風赤色付着物	
30	SI01-埋土	高杯(口縁)	土灰	土灰	厚板	
31	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面水平沈線・土灰	土灰	厚板・深い沈線?	
32	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面浅・水平沈線・土灰	土灰		
33	SI01-埋土	浅鉢(口縁部)	内面水平沈線・沈線・粘土粒大・土灰	土灰		
34	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面大(浅・水平沈線)・土灰	土灰		
35	SI01-埋土	高杯(口縁部)	内面浅・水平沈線・粘土粒	土灰		
36	SI01-埋土	浅鉢(口縁部)	内面風化水平沈線・土灰コブ	土灰		
37	SI01-埋土	浅鉢?	土灰コブ(内面沈線見えず)・断面(口縁)	厚板	外面赤色付着物、内面厚板	

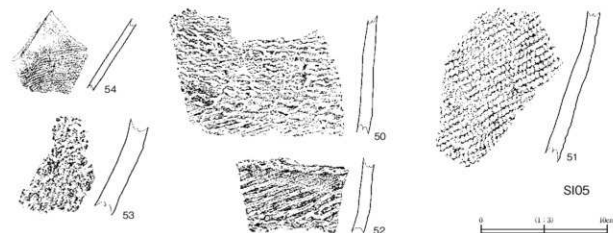
第27回 遺構内出土土器 (3)



SI02

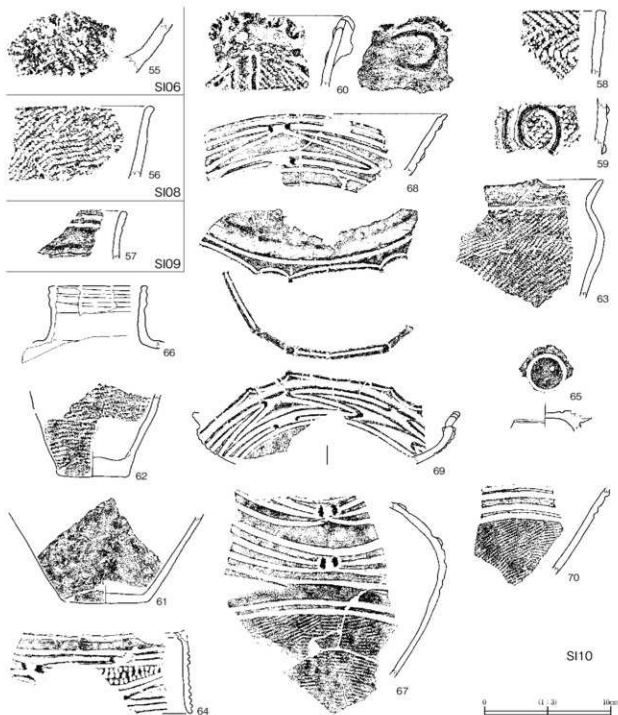


SI04



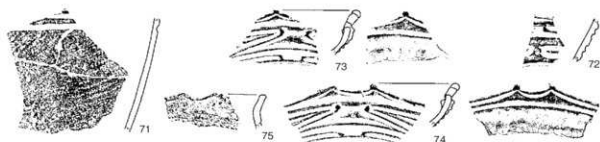
No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胴部・底部／裏面、線文彫刻など)	内 面 (裏面など)	備 考	本文 記載
38	SI02-埋土	高杯-口縁部	内面沈澱、口縁突起粘土粒(新田様みで沈澱)・砂キ	砂キ	内面黒染	
39	SI02-埋土	高杯-口縁部	内面水干沈澱・砂キ	砂キ		
40	SI02-埋土	高杯-口縁部(未測)	内面浅い水干沈澱／砂キ	砂キ		
41	SI02-埋土	高杯-台	砂キ	砂キ		
42	SI02-埋土	高杯-台	砂キ	砂キ		
43	SI04-埋土	漆鉢-胴(1/3程度未測)	LRココ	ナデ刷毛肌	外・内ス、下二次焼成、内面ココ付着	
44	SI04-埋土	漆鉢-胴(1/3程度未測)	LRココ	ナデ	外面に一次焼成、内面ココ付着	
45	SI04-埋土	漆鉢-底部	LRココ／矢張	ナデ	粘土繊維多、外表面乾	
46	SI04-埋土	漆鉢-底部	LRココ／矢張	ナデ	粘土繊維	
47	SI04-埋土	高杯-口縁部	砂キ	砂キ	内面黒染	
48	SI04-埋土	高杯-口縁部	内面沈澱／口縁突起粘土で沈澱／砂キ	砂キ		
49	SI04-埋土	高杯-口縁部	内面沈澱／口縁突起粘土・砂キ	砂キ		
50	SI06-埋土	漆鉢-胴部	結晶LRココ／単軸線1A(原)ココ?	ナデ丁筆	外表面ス付着	
51	SI06-埋土	漆鉢-胴部	LRココ	ナデ片占	粘土繊維多	
52	SI06-埋土	漆鉢-胴部	結晶LRココ／単軸線1A(原)ココ?	ナデ丁筆		
53	SI06-埋土	漆鉢-底部	LRココ／矢張	ナデ	織物多、外表面乾、内面黒(ココ?)	
54	SI06-埋土	蓋付	成沢文のどとで飾られているLRイロイロ・砂キ	面ナデ?	外赤付、内面スス、内面黒影・刷毛?	

第28回 遺構内出土土器(4)

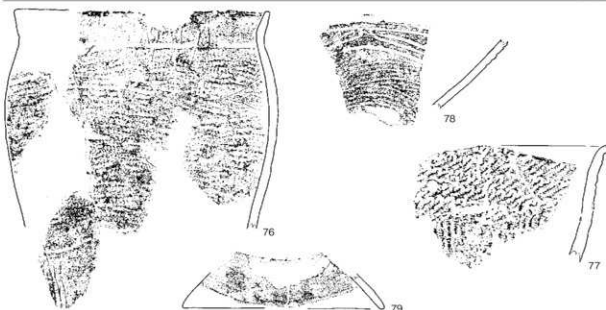


No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胴部・底部・肩部・継ぎ目等付々)	内 面 (胴部等)	備 考	本文 記載
55	S109-埋土	漆鉢・底部	黒染(黒)	ナデ		
56	S109-埋土	漆鉢・胴部	白粉ナデ / 黒石イロ	ナデ	横線多, 外面二次焼成, 内面黒(コナデ)	
57	S109-埋土	漆鉢・胴部	内面水平状横直線のナデ	ナデ	筋上横線多	
58	S109-埋土	漆鉢・胴部	白粉ナデ / 筋上横直線+筋コ	ナデ丁塗	筋上横線含む	
59	S109-埋土	漆鉢・胴部	筋コナデ → 黒染(口縁ナデ)	ナデ		
60	S109-埋土	漆鉢・胴部	内外面直交した斜紋 / 口縁部直交した斜紋 / 上及下ナデ → 筋・横線	ナデ	外面スス, 二次焼成, 内面コナデ付着	
61	S109-埋土	漆鉢(口縁未測)	横直線ナデ	ナデ		
62	S109-埋土	漆鉢(口縁未測)	上及下ナデ → 横線・直線ナデ	ナデ	内面黒染, 外面スス付着	
63	S109-埋土	漆鉢・胴部	白粉変装 / 黒石コ	ナデ	外面スス多, 内面コナデ付着	
64	S109-埋土	漆鉢(口縁未測)	上ナデ → 横線・筋・筋上斜紋 / 筋コ	ナデ		
65	S109-埋土	漆鉢・底部	内面直交した斜紋 / 筋コ	ナデ		
66	S109-埋土	漆鉢・胴部	内面水平状横直線のナデ	筋コナデ	内面筋部相交	
67	S109-埋土	漆鉢・胴部	太い横線・筋上斜紋 / 黒石イロ	ナデ	外丁塗, 内面筋部直交で横直線	
68	S109-埋土	漆鉢(口縁未測)	内面水平状横直線のナデ	ナデ		
69	S109-埋土	漆鉢(口縁未測)	内面直交した斜紋 / 筋コ	ナデ		
70	S109-埋土	漆鉢・胴部	上及下ナデ / 筋コナデ	ナデ	外面黒染, 内面横直線色付垂物	

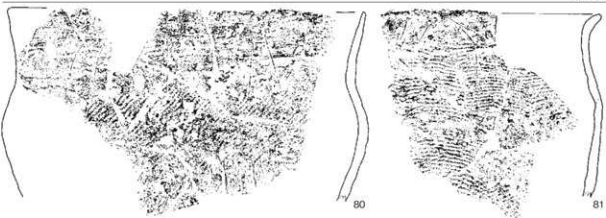
第29図 遺構内出土土器(5)



SI10



SI12



SI13

No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部・胴部/底部/底面, 繪文全体など)		内面 (器底など)	備考	本文 記載
			図	説明			
71	SI10-埴土	浅鉢・胴部	①図	②図	③図	外面は土多, 内面コウ付着	
72	SI10-埴土	浅鉢・口縁部	①図	②図	③図	内外磨光	
73	SI10-埴土	高杯・口縁部	①図	②図	③図	内外又付着	
74	SI10-埴土	高杯・口縁部	①図	②図	③図	内外又付着	
75	SI10-埴土	深鉢・口縁部	①図	②図	③図	外土文多	
76	SI10-埴土	深鉢(口縁以下)	①図	②図	③図	外土文, 下二枚焼, 内面コウ付着	
77	SI12-埴土	深鉢・口縁部	①図	②図	③図	新土織物多	
78	SI12-埴土	高杯・底部	①図	②図	③図	二枚焼	
79	SI12-埴土	高杯(口縁未満)	①図	②図	③図	二枚焼, 内面又付着	
80	SI12-埴土	深鉢(口縁未満)	①図	②図	③図	内面織物, 外土文, 二枚焼	
81	SI13-埴土	深鉢	①図	②図	③図	外土文, 内面コウ付着, 垂付?	

第30回 遺構内出土土器(6)

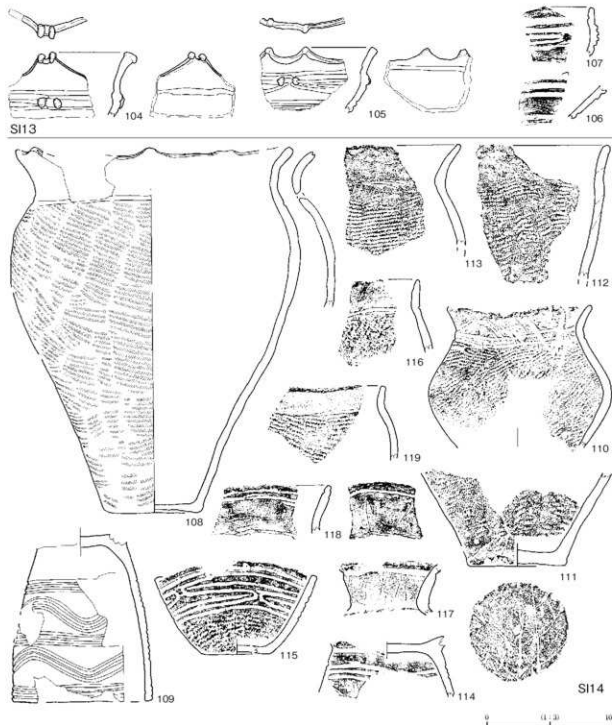


S113

0 1 2 cm

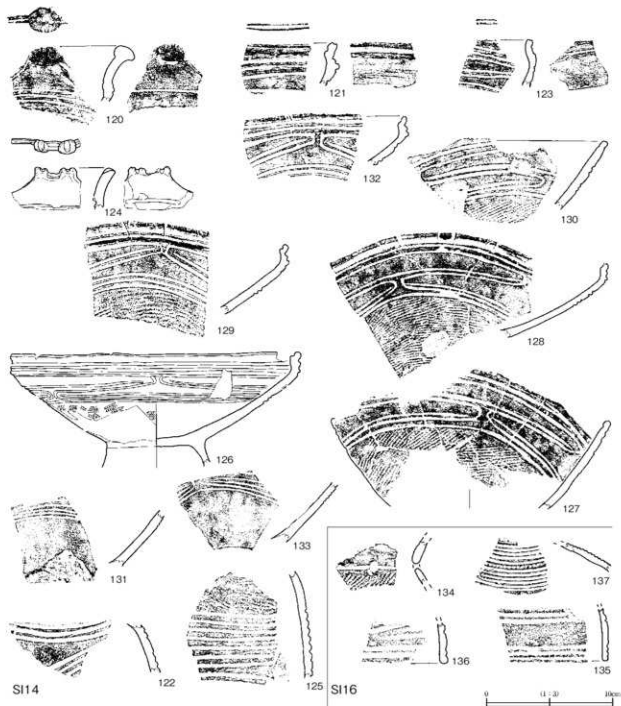
No.	出土地点・層位	器種・部位	内面 (口縁部・腹部・底部、裏面、縄文模様など)	内面 (裏面など)	備考	本文 記載
82	S13-埴土	埴鉢<口縁部	小波状口縁部、口縁下ナメ→京字ナ	ナデ	外面ナメ、内面コゲ付着	
83	S13-埴土	埴鉢<口縁部	口縁部ナメ、口縁下ナメ→京字の流麗な京字ナメ	ナデ	外面ナメ付着	
84	S13-埴土	埴鉢<口縁部	口縁部突起部直下口縁下ナメ	ナデ	外ナメ多、内コゲ付着	
85	S13-埴土	埴鉢<口縁部	京字ナメ	ナデ	外面ナメ付着	
86	S13-埴土	埴鉢<口縁部	口縁突起部、面沈線、彫形部?	ナデ	外面ナメ付着	
87	S13-埴土	埴鉢<口縁部	京字無面(京字高い線部)	ナデ		
88	S13-埴土	埴鉢<口縁部	京字ナメ	ナデ		
89	S13-埴土	埴鉢<口縁部	内面彫部、京字ナメ→浅い線状沈線	ナデ		
90	S13-埴土	鉢(口縁未満)	内面水平沈線、深い沈線・粘土粒大	京字	外面ナメ付着	
91	S13-埴土	高杯<口縁	京字	京字	外面ナメ付着	
92	S13-埴土	高杯<口縁部	内面水平沈線、京字ナメ	京字	粘土塗層厚薄大、内外両面ナメ	
93	S13-埴土	高杯<口縁部	細い京字沈線	無痕	内外両面ナメ	
94	S13-埴土	高杯<口縁部	内面水平沈線、口縁突起部入で沈線、京字(●60区同一)	京字	塗層厚、外面赤付、内外ナメ付着物	
95	S13-埴土	高杯(口縁未満)	京字ナメ→細い沈線	京字	●94区同一個体	
96	S13-埴土	高杯<口縁部	内面水平沈線、粘土粒大・京字	京字	粘土塗層厚薄大、外面赤付	
97	S13-埴土	高杯<口縁部	内面水平沈線	京字	粘土塗層厚薄大	
98	S13-埴土	高杯<口縁部	内面水平沈線	京字	粘土塗層厚薄大	
99	S13-埴土	浅鉢<口縁部	内面水平沈線・浅い	京字		
100	S13-埴土	浅鉢<口縁部	内面太(浅い)水平沈線、深い沈線	京字		
101	S13-埴土	浅鉢<口縁部	細い京字沈線	京字	内外両面ナメ	
102	S13-埴土	浅鉢<口縁部	細い京字沈線	京字	内外両面ナメ	
103	S13-埴土	浅鉢<口縁部	内面太(浅い)水平沈線、深い沈線	京字	外面ナメ付着物	

第31回 遺構内出土土器 (7)



No.	出土地点・層位	器種・部位	内面		備考	本文 記載
			(口縁部・胴部・底部・肩部・継ぎ目部分など)	(継ぎ目など)		
104	SH13-層上	口縁部	内面水平波線・放射線部・斜め・粘土粒大	シ字	外面部付着物	
105	SH13-層上	口縁部	内面水平波線・口沿突起部で波線・粘土粒小	シ字	内面黒染	
106	SH13-層上	胴部	高面水平波線・粘土粒大	シ字	内外スス付着物	
107	SH13-層上	口縁部	高面水平波線・粘土粒大	シ字	内外黒染	
108	SH13-層上	胴部(底のみ一部)	口沿突起部・放射線・波線・波線・LR/ロロ/底ナメ	ナ字	★口沿突起部・外スス二次焼成・内コケ	○
109	SH13-層上	高面(約1/4周未満)	波線・シ字	シ字	上・文部部黒染・外スス・一次焼成・内コケ	○
110	SH13-層上	胴(1/2周未満)	LR/ロロ・胴部・波線・波線	ナ字	外スス多・内コケ多	
111	SH13-層上	胴部(底のみ一部)	LR/ロロ/底・木葉道	細なシ	内面凹凸	
112	SH13-層上	胴部(胴の一部)	LR/ロロ/ナメ	ナ字	外面スス・内面コケ付着	
113	SH13-層上	胴部(胴部)	放射線	ナ字	外面スス付着物	
114	SH13-層上	高面(約1/4周未満)	波線・シ字	シ字	外面スス付着物	
115	SH13-層上	浅鉢(1/4周以下)	内面水平波線・LR/ナメ	ナ字	外・文部部黒染・内面凹凸	
116	SH13-層上	胴部(胴部)	LR/ロロ・胴部・波線	ナ字	外面スス・一次焼成・内面コケ付着	
117	SH13-層上	底(1/2周未満)	シ字	シ字	内面黒染	
118	SH13-層上	高面(約1/4周未満)	内面水平波線・波線	シ字	外面黒染	
119	SH13-層上	胴(胴部)	LR/ナメ	シ字	内外黒染	

第32回 遺構内出土土器(8)



No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面		備 考	本文 記載
			(口縁部、胴部、底部、裏面、横断面など)	内 面 (裏面など)		
120	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 内面突起状の沈線 / 細い沈線	3号キ	黒染付、内面磨肌	
121	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 内面沈線 / 3号キ	3号キ	胎土含炭屑混入	
122	SI14-層上	高杯(口縁部)	口縁部	3号キ	外沈線状突起、外口唇色	
123	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線直線的 / 内面沈線 / 細い沈線	3号キ		
124	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 突起部 / 内面突起状の沈線	3号キ		
125	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線	3号キ		
126	SI14-層上	高杯(口縁部)	細い沈線	9号ク		
127	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 文様3部分 / 1.8x1.2x	3号キ	胎土含炭屑混入、外面磨肌	
128	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 細い沈線 / 1.8x1.2x	3号キ	外面赤色付着層	
129	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 細い沈線 / 1.8x1.2x	3号キ	胎土含炭屑混入、外面赤色付着層	
130	SI14-層上	高杯(口縁部)	内面水平沈線 / 3号キ / 1.8x1.2x	3号キ	胎土含炭屑混入	
131	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	細い沈線	3号キ	磨肌	
132	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	内面水平沈線 / 突起 / 3号キ / 1.8x1.2x	3号キ	●131と同一致	
133	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	細い沈線	3号キ	●131と同一致	
134	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	内面水平沈線 / 3号キ	3号キ	胎土含炭屑混入	
135	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	細い沈線	3号キ	外又、内縁付(1.2x1.2) ●131と同一致	
136	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	口縁部 / 3号キ / 1.8x1.2x	3号キ	外面赤色付着層	
137	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	細い沈線	3号キ	磨肌のみ	
137	SI14-層上	浅鉢(口縁部)	細い沈線 / 突起 / 1.8x1.2x	胎土含	内面磨肌直、磨肌	

第33回 遺構内出土土器 (9)



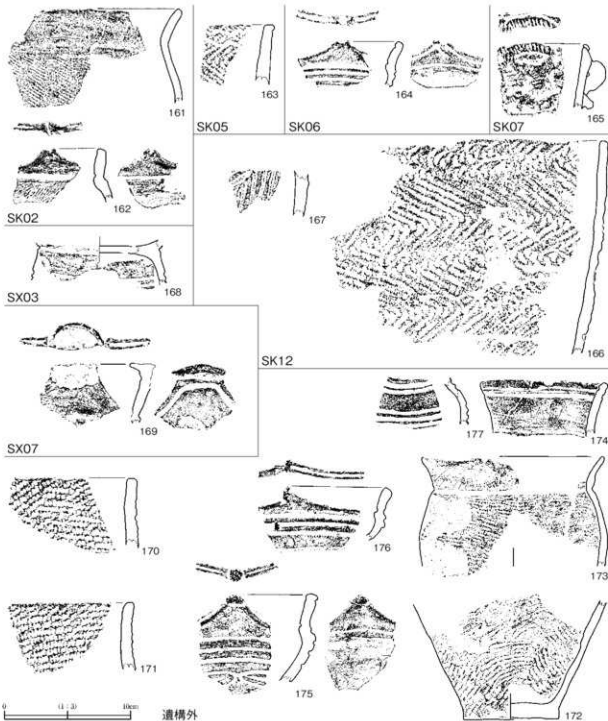


S18

S19

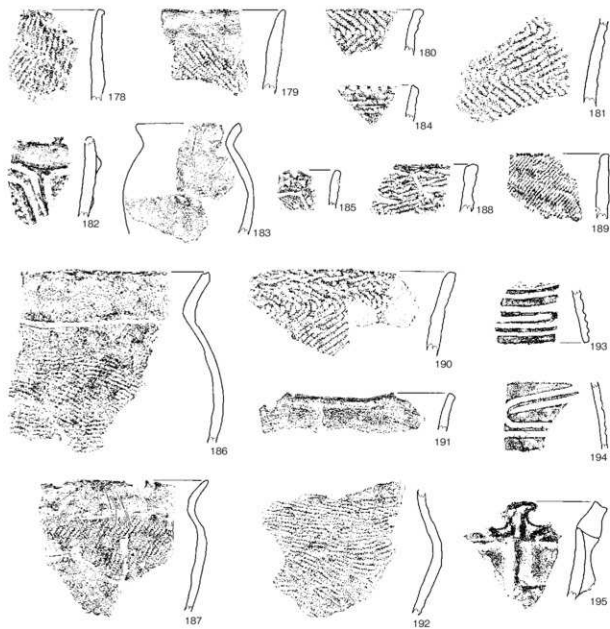
No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面		備 考	本文 記載
			(口縁部・胴部・底部・底面・器蓋面など)	(口縁部など)		
138	SK17-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ		
139	SK17-埋土	浅鉢・底面	口縁コ/底面ナデ	ナデ		
140	SK17-埋土	口縁部	内面水平沈線/船上板大(シギキ)	ナデ	内面摩耗	
141	SK17-埋土	底・背面(23周未測)	シギキ	ナデ	下の割れ口縁上接合面遺塵・摩耗	
142	SK17-埋土	口縁・胴部	内面水平沈線/シギキ	シギキ	下の割れ口縁上接合面遺塵	
143	SK17-埋土	浅鉢・胴部	摩耗の多い	摩耗		
144	SK17-埋土	浅鉢・胴部	シギキ	シギキ	内外摩耗	
145	SK17-埋土	浅鉢・胴部	シギキ	ナデ		
146	SK17-埋土	高杯・口縁部	内面筋線の水平沈線/シギキ	シギキ		
147	SK17-埋土	高杯・口縁部	内面沈線/シギキ	摩耗	内面摩耗の多い	
148	SK18-埋土	深鉢(口縁未測)	口縁部/胴部/底面/底面	ナデ	砂多、割上スス、下二次焼成、内ナデ	
149	SK18-埋土	深鉢・胴部	筋線(輪・底・口縁)ナデ	ナデ	筋上織線多	
150	SK18-埋土	深鉢・胴部	筋線(輪・底・口縁)ナデ	ナデ	筋上織線多	
151	SK18-埋土	深鉢・胴部	筋線(輪・底・口縁)ナデ	ナデ	筋上織線多	
152	SK18-埋土	深鉢・胴部	筋線(輪・底・口縁)ナデ	ナデ	筋上織線多	
153	SK18-埋土	深鉢・胴部	筋線(輪・底・口縁)ナデ	ナデ	筋上織線多	
154	SK18-埋土	高杯・口縁部	内面水平沈線/口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多、外周スス付着	
155	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	
156	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	
157	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	
158	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	
159	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	
160	SK18-埋土	深鉢・口縁部	口縁突起部(ノミ)取付コ	ナデ	筋上織線多	

第34回 遺構内出土土器 (10)



No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部、頸部、底部、裏面、縄文彫刻など)	内面 (裏面など)	備考	本文 記載
161	SK02-埋土	深鉢<1/4残末部	1段ツギ<1/4残土	ナシ	胎土含有層あり	
162	SK02-埋土	鉢<1/4残末部	内面水平沈着・外面屈折部(胎土)内面沈着・1段ツギ	ツギキ	外面スス、内面ツギ多	
163	SK05-埋土	深鉢<1/4残末部	胎土1輪<1/4残、口ツギ<1/4残(胎土)1段ツギ	ナシ	胎土沈着、外面スス付着	
164	SK06-埋土	高杯<1/4残末部	内面沈着、(口)変形部(胎土)内面沈着	摩耗	外面赤色付着物?	
165	SK07-埋土	深鉢<1/4残末部	胎土はなし、胎土沈着	ナシ	外面スス付着	
166	SK12-埋土	深鉢(1/4残末部)	胎土1輪<1/4残、上下交互に	ナシ(口)	胎土沈着多、外面スス、内面ツギ付着	
167	SK12-埋土	深鉢<1/4残末部	胎土1輪<1/4残(口)	ナシ	外面スス付着	
168	SK03	高杯<1/4残末部	摩耗のみ	摩耗		
169	SK07	高杯<1/4残末部	内面沈着、(口)変形部は胎土で沈着<ツギキ	ツギキ		
170	SK07-1層	深鉢<1/4残末部	胎土付	ナシ	胎土沈着あり、外面スス付着	
171	丸上(1層)	深鉢<1/4残末部	胎土付	ナシ	外面スス、内面ツギ付着	
172	丸上(2層)	深鉢(底のみ一層)	1段ツギ→胎土→胎土付	ナシ	胎土沈着、外面スス、一次焼成、内ツギ	
173	丸上(3層)	鉢(1/3残末部)	胎土付、胎土付沈着、胎土付	ナシ	外面スス多、内面ツギ多	
174	丸上(4層)	胎土付	内面水平沈着<ツギキ	摩耗		
175	丸上(5層)	高杯<1/4残末部	内面水平沈着、(口)変形部(胎土)内面沈着(胎土)胎土付	胎土付	内面沈着あり、外面沈着あり<ツギキ	
176	丸上(6層)	高杯<1/4残末部	内面水平沈着、(口)変形部(胎土)内面沈着<胎土付<1/4残	胎土付	内面ツギ付着物	
177	丸上(7層)	深鉢<1/4残末部	胎土付	胎土付	外面摩耗、内面胎土沈着	
178	丸上(8層)	深鉢<1/4残末部	胎土付	胎土付	外面摩耗、内面胎土沈着	
179	丸上(9層)	深鉢<1/4残末部	胎土付	胎土付	外面摩耗、内面胎土沈着	

第35図 遺構内出土土器(11)・遺構外出土土器(1)

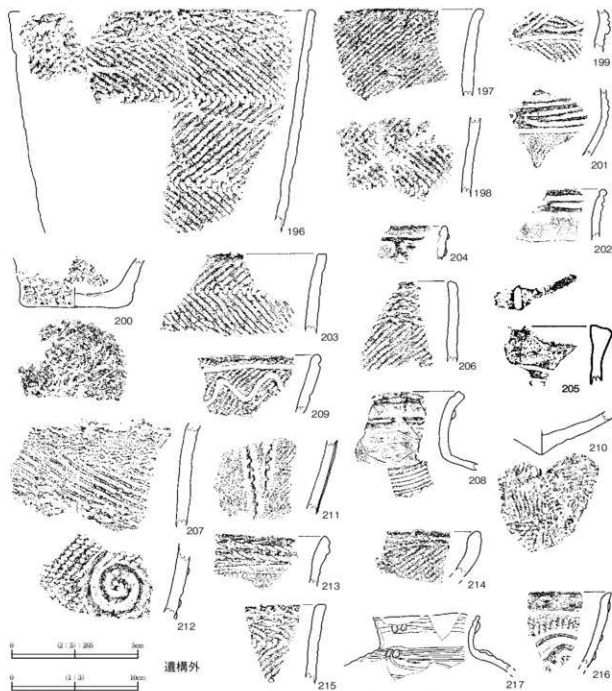


## 遺構外

0 10cm 20cm

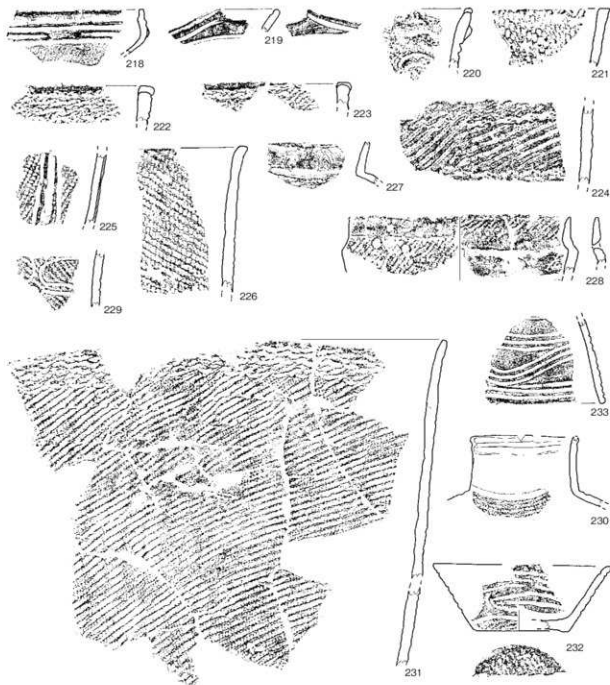
No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面 (口縁部・胴部・底部/裏面, 縄文型体など)	外 面 (縄文など)	備 考	本文 記載	
178	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・LRノコ	●筋上織線多	ナデ	外面スス、二次焼成、内面コゲ付着	
179	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ→LRコ		ナデ	内面コゲ付着	
180	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・結実1種別+LRノコ		ナデ	筋上織線多、外面風損	
181	IA1c-遺層	深鉢-胴部	結実1種別+LR上+交互口		ナデ	筋上織線多、外面一次焼成	
182	IA1c-遺層	深鉢-胴部	LRナデ→最帯1種別ナデ		ナデ		
183	IA1c-遺層	深鉢-胴部	LRコ→27キ(胴口)		ナデ	外面スス、下二次焼成、内面コゲ付着	
184	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ→口縁、胴部風損		ナデ	外面スス付着	
185	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・結実1種別+LRコ	→浅い沈線	ナデ	内面風損、外面スス付着	
186	IA1c-遺層	深鉢-胴部	口唇ナデ・筋上織線/LRナデ		ナデ	筋上織線多	
187	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・LRコ		ナデ	筋上織線多、外面スス付着	
188	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・LRコ		ナデ	筋上織線多	
189	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	口唇ナデ・結実1種別+LR→口縁部基部コ		ナデ	筋上織線多、外面スス付着	
190	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	波瀾部押圧/27キ		27キ	筋上全帯付着、外面スス付着	
191	IA1c-遺層	深鉢-胴部	LRナメ→ナデ		ナデ	外面スス付着、二次焼成	
192	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	高い突輪状部		27キ	27キ	
193	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	高い突輪状部		ナデ?	外面スス付着	
194	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	高い突輪状部		ナデ?	外面スス付着	
195	IA1c-遺層	深鉢-口縁部	高い突輪状部		ナデ?	外面スス付着	

第36図 遺構外出土土器(2)



No.	出土地点・層位	器種・部位	外 面 (口縁部・胴部・底部・裏面、線文部位など)	内 面 (内面など)	備 考	本文 図版
196	BA1a層-1区層	深鉢(口縁・胴部)	結実(横線+縦上下交互並列)→1線筋並列	ナデ	胎土織様多、外面スリ多、内面コゲ付着	
197	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	1線筋	ナデ	胎土織様多、外面スリ多	
198	BA1a層-1区層	深鉢・胴部	結実(横線+縦コゲ)	ナデ円凸	胎土織様多、外面一次焼成、内面コゲ多	
199	BA1a層-1区層	深鉢・胴部	縦コゲ→低い沈線	ナデ		
200	BA1a層-1区層	深鉢・底部(口縁・胴部)	1線筋	ナデ	胎土織様多、内面コゲ付着	
201	BA1a層-1区層	深鉢・胴部	1線筋→太い沈線	ナデ	胎土織様多、内面コゲ多	
202	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	内面水引沈線、7字文	7字文		
203	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	口縁部沈線/結実(横線+縦コゲ)	ナデ	胎土織様多、外面煎焼?	
204	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	隆帯ナデ	溝底		
205	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	突起部煎焼	7字文	外面スリ付着	
206	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	1線筋→口縁筋並列	ナデ	胎土織様多、内面コゲ多	
207	BA1a層-1区層	深鉢・胴部	斜平輪筋(1線筋)→1線筋並列	ナデ	外面二次焼成、内面コゲ付着	
208	BA1a層-1区層	深鉢・胴部	内面沈線・沈線・煎焼帯、裏の沈み・沈線底煎焼	ナデ	外面7字文	
209	BA1a層-1区層	深鉢(口縁部)	1線筋→太い沈線	ナデ丁字		
210	BD1a層-1区層	深鉢・胴部	1線筋コゲ沈線	ナデ	外面二次焼成、内面コゲ付着	
211	BD1a層-1区層	深鉢・胴部	1線筋コゲ煎焼文(煎焼)	ナデ		
212	BD1a層-1区層	深鉢・胴部	1線筋コゲ→隆帯見付→隆帯(高リ)ナデ	ナデ		
213	BD1a層-1区層	深鉢(口縁部)	折り筋(口縁上縁部沈線)	ナデ		
214	BD1a層-1区層	浅鉢(口縁部)	1線筋コゲ→口縁筋並列	ナデ		
215	BD1a層-1区層	深鉢(口縁部)	口縁コゲ・結実(横線+縦コゲ)→口縁筋並列	ナデ	外面スリ付着	
216	BD1a層-1区層	深鉢(口縁部)	1線筋ナデ→煎焼コゲナデ	ナデ丁字		
217	BD1a層-1区層以下	深鉢(口縁部)	内面水引沈線2・帯状	隆帯		

第37回 遺構外出土土器 (3)

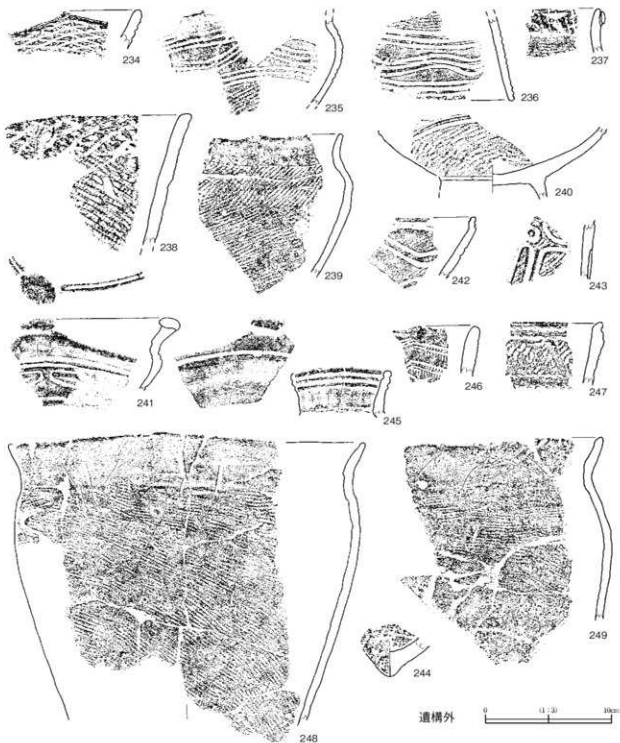


0 0.30 10cm

## 遺構外

No.	出土地点・層位	器種・部位	内面 (口縁部・胴部・底部・底面、継ぎ目等全て)	外面 (胴部全て)	備考	本文 記載
218	0B3a五層	深鉢-口縁部	内面水平波線・上縁に十字線	無紋		
219	0B3a五層	浅鉢-口縁部	内面波線・口縁突起部に波線・1層半	無紋		
220	0B3a五層	深鉢-口縁部	内面波線・口縁突起部・波線	ナデ	外面スス付着・内面コシ付着	
221	0B3a五層	深鉢-口縁部	口縁部にナデ・口縁コ	ナデ	粘土織目入	
222	0B3a五層	深鉢-口縁部	口縁部にナデ・口縁コ	ナデ	粘土織目入	
223	0B3a五層	深鉢-口縁部	口縁部にナデ・口縁コ	ナデ	粘土織目入	
224	0B3a五層	深鉢-胴部	単軸線1A(灰)十字線	ナデ	粘土織目多・外面スス付着	
225	0B3a五層	深鉢-胴部	単軸線1A(灰)十字線	ナデ丁寧		
226	IA2b五層	深鉢-胴・胴部	口縁ナデ・口縁コ	ナデ四角	粘土織目多・外面スス付着	
227	IA2b五層	深鉢-口縁部	1層半・波線	ナデ	口縁に輪痕・内面スス付着物	
228	IA2b五層	深鉢-口縁部	内面波線・口縁突起部・1層半・口縁ナデ	ナデ	縁部口縁部から・外スス・内コシ付着	
229	IA2b五層	深鉢-胴部	1層半→波線	ナデ	外面スス付着	
230	IA2b五層	深鉢-胴部	内面水平波線・1層半・1層半	口縁1層半	内面胴部凹み	
231	IA2b五層	深鉢(口縁未測)	1層半・1層半(灰)十字線	ナデ	粘土織目多・内下スス多・内ナデが丸	
232	IA2b五層	深鉢(口縁未測)	内面水平波線・1層半・1層半→波線・底面銅代灰	コシ多	内面コシ多・外面スス付着	
233	IA2b五層	高杯-台	1層半	コシ多		

第38回 遺構外出土土器(4)



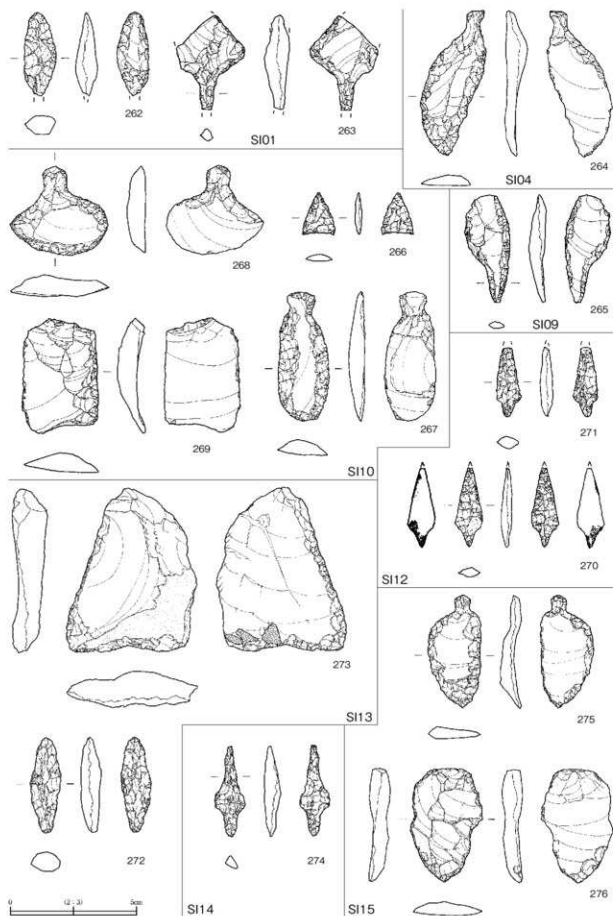
No.	出土地点・層位	器種・部位	外面 (口縁部・胴部・底部ノ表面, 縄文器体など)	内面 (裏面など)	備考	本文 記載
234	IA-遺跡	深鉢(口縁部)	突刺ノ車輪筋(口縁部)	ナデノ葉	筋ノ織織入	
235	IA-遺跡	聚(口縁未滿)	LRコゴ	ナデ?	外面スス多, 内面コゴ多	
236	IA-遺跡	高杯(口縁未滿)	LRコナデ	コゴ?	内面コゴ多(ナデ?)に似い, 外車付	
237	IA-中層部	深鉢(口縁部)	隆着上ノ車輪筋(突刺)LRコゴ	ナデ		
238	IA-中層部	深鉢(口縁部)	口縁ナデノLRコナデ(口縁部で脱)LRコゴ	ナデ	筋ノ織織多, 外面スス付着	
239	IB-遺跡	深鉢(口縁一側部)	口縁突刺? LRコゴ	ナデ	外スス多, 二次焼成, 内面コゴ	
240	IA-遺跡	高杯(底のみ一側)	LRコゴ	コゴ?	内面天耳縁ナデ?	
241	IA-遺跡	高杯(口縁部)	内面天耳縁(口縁突刺部)で沈着	コゴ?	外面スス付着	
242	IA-遺跡	高杯(口縁部)	LRコゴ(口縁部)で沈着	コゴ?	外面一次焼成, 内面コゴ付着	
243	IIA-遺跡	深鉢(胴部)	LRコゴ(口縁部)	ナデ	外面スス付着	
244	IA-遺跡上	深鉢(胴部)	LRコゴ(口縁部)	ナデ?	筋ノ織織多, 外面スス多	
245	IIA-遺跡(遺跡層上)	口(口縁未滿)	内面天耳縁(口縁部)で沈着	コゴ?		
246	IA-遺跡	深鉢(口縁部)	内面天耳縁(口縁部)で沈着(口縁部)で沈着	ナデ?	外面スス付着	
247	IA-遺跡	深鉢(口縁部)	LRコゴ(口縁部)で沈着	ナデ?	外面スス付着	
248	IA-中層部	深鉢(口縁未滿)	LRコゴ, ナデ?	ナデ(筋織)	筋ノ織織入, 外面スス多, 内面コゴ	
249	IA-中層部	深鉢(口縁一側部)	LRコナデ	ナデ(筋織)	筋ノ織織, 外スス多, 内コゴ, 縁部口縁部ノ突刺	

第39回 遺構外出土土器 (5)



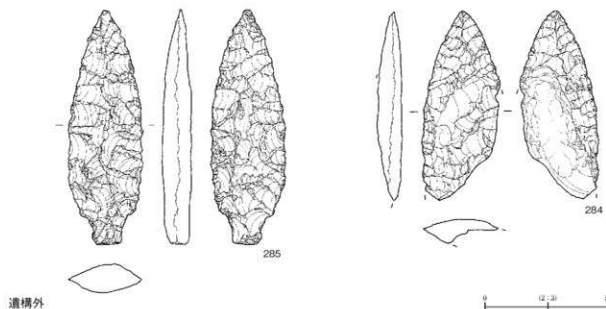
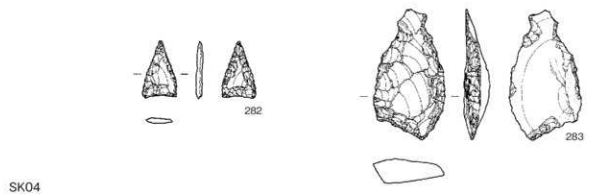
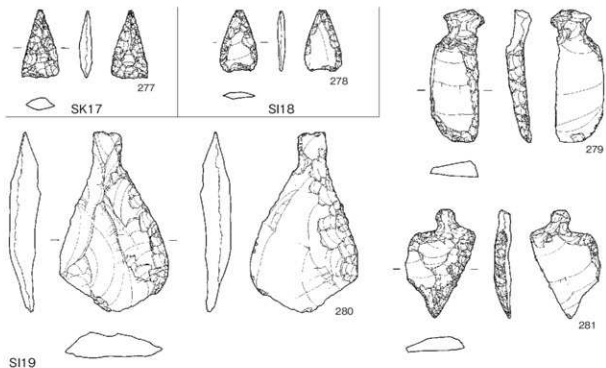
No.	出土地点・層位	器種・部位	内 面		備 考	本文 図版
			(口縁部、胴部、底部、底部、継ぎ目付近など)	(底面など)		
250	IA9f1層	深鉢・胴部	内面横・斜めシ上縁・上縁面圧痕	ナデ	横溝孔外から穿孔	
251	IA9f1層	深鉢・胴部	底面ナデ→底面縦溝に引ナデ	ナデ		
252	IA9f1層	深鉢・胴部	口内面ナデ・内面縦文刻・底面コ→重層木炭クープ文(底)口コ	ナデ	粘土織線流入、外二次焼成、内面コグ多	
253	IA9f1層	深鉢・胴部	口縁面圧痕	ナデ		
254	IA9f1層	高杯・台	深い沈線・口コ刺突	シグキ		
255	個人名不明層	深鉢(口縁一部)	内面水平沈線刻・シグキ・上縁ナデ	口内シグキ	内縁部などで横溝痕、外スス二次焼成、内コグ	
256	個人名不明層	深鉢・口縁部	細い沈線	ナデ		
257	BB5b1層	深鉢・口縁部	口内ナデ・結果口縁刻・口上上下交り口コ	ナデ	粘土織線多、内面スス多	
258	BB5b1層	高杯	横溝深溝・深い沈線	ナデ層	中堅土版伏土製品?	
259	個人名不明層	高杯・台(2.3面未測)	沈線刻・シグキ	シグキ		
260	BB5a1層	高杯・口縁変形	内面沈線・口内変形部などで沈線・変形沈線・シグキ	シグキ		
261	高杯	高杯・台	上縁ナデ→細い沈線	ナデ	粘土金言用器人、内面スス付着	

第40図 遺構外出土土器(6)

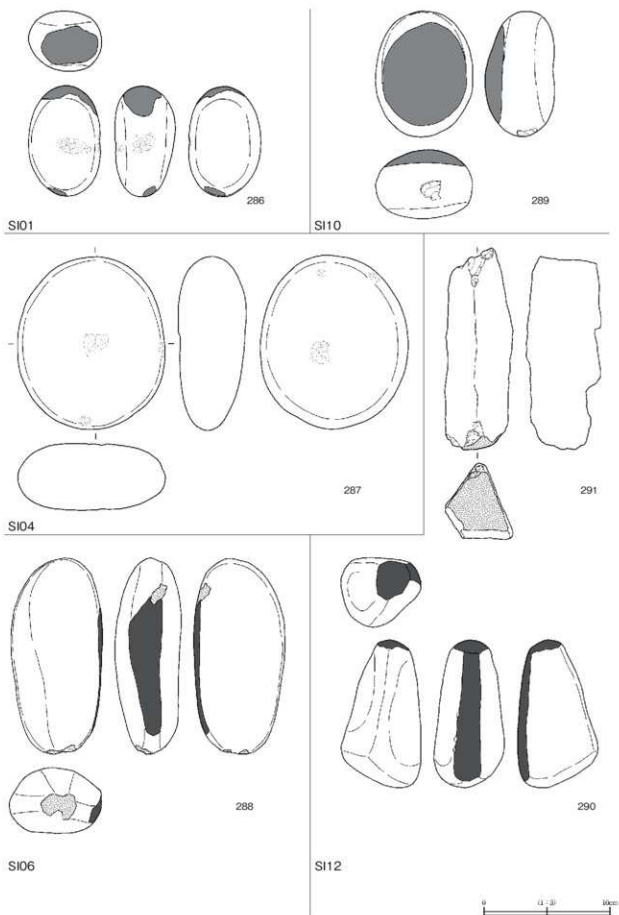


第41回 遺構内出土石器 (1)

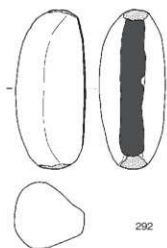




第42図 遺構内出土石器 (2)



第43図 遺構内出土石器(3)

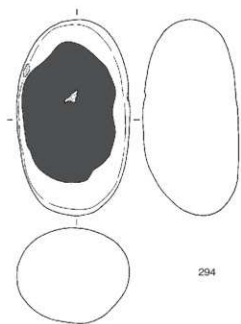


292



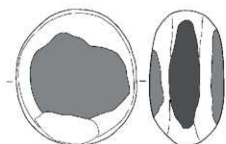
SI13

293



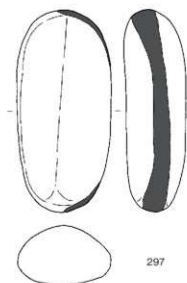
294

SI14



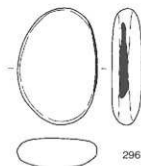
295

SI18



297

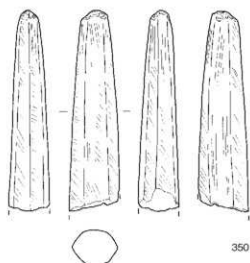
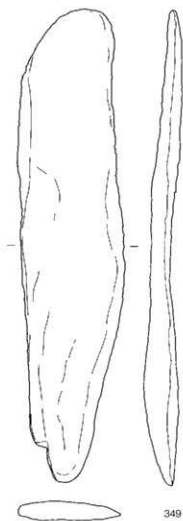
SK12 SK04



296



第44回 遺構内出土石器 (4)



SI01



遺構外

## VI 自然化学分析

### 1 放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

#### (1) 測定対象試料

向新田Ⅲ遺跡は、岩手県宮古市田老字向新田地内に所在し、北上山地が太平洋に接する海岸段丘(標高約147m前後)に立地する。測定対象試料は竪穴住居跡等の遺構から出土した炭化物7点である(表1)。

竪穴住居跡から出土した土器の時期は、SI01が縄文時代晩期後葉、SI08、SI12、SI13が縄文時代晩期、SI15が縄文時代前期とされる。

#### (2) 測定の意義

試料が出土した遺構の年代を明らかにする。

#### (3) 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA: Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/ℓ (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### (4) 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOXII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### (5) 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する

必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## (6) 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料7点の $^{14}\text{C}$ 年代は、11、12、15、16が2200yrBP前後でまとまり、13がこれらからやや離れた2430 $\pm$ 20yrBPという値を示す。14、17は他の5点から大きく離れた5700~5800yrBP頃の値となっている。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、古い方から順に14、17が縄文時代前期前葉頃、13が縄文時代晩期後葉から末葉ないし弥生時代前期頃、11、12、15、16が弥生時代前期から中期頃に相当する (小林2009、小林編2008)。13、14は出土土器が示す時期におおむね整合すると見られるが、12、15、16は土器の時期よりも新しい年代値を示した。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

## 文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
- 小林謙一 2009 近畿地方以东の地域への拡散 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 55-82
- 小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

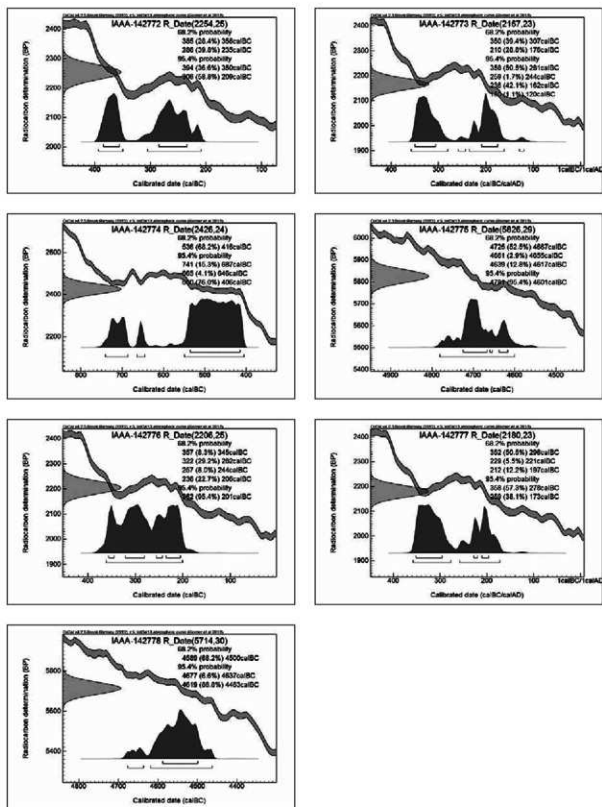
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-142772	11	SX01	炭化物	AAA	-2421 ± 0.29	2250 ± 30	75.53 ± 0.24
IAAA-142773	12	SI01 埋土下位	炭化物	AAA	-2500 ± 0.26	2170 ± 20	76.35 ± 0.23
IAAA-142774	13	SI08 埋土下位～床	炭化物	AAA	-26.38 ± 0.29	2430 ± 20	73.93 ± 0.22
IAAA-142775	14	SI15 埋土下位～床	炭化物	AAA	-25.93 ± 0.29	5830 ± 30	48.42 ± 0.18
IAAA-142776	15	SI12 伊路内	炭化物	AAA	-1994 ± 0.29	2210 ± 30	75.98 ± 0.24
IAAA-142777	16	SI13 埋土下位	炭化物	AAA	-23.48 ± 0.28	2180 ± 20	76.23 ± 0.23
IAAA-142778	17	SX09 埋土下位～床	炭化物	AaA	-25.75 ± 0.25	5710 ± 30	49.10 ± 0.19

[#7096]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-142772	2240 ± 20	75.65 ± 0.23	2254 ± 25	385calBC - 356calBC (28.4%) 286calBC - 235calBC (39.8%)	394calBC - 350calBC (36.6%) 306calBC - 209calBC (58.8%)
IAAA-142773	2170 ± 20	76.35 ± 0.22	2167 ± 23	350calBC - 307calBC (39.4%) 210calBC - 176calBC (28.8%)	358calBC - 281calBC (50.5%) 259calBC - 244calBC (1.7%) 236calBC - 162calBC (42.1%) 130calBC - 120calBC (1.1%)
IAAA-142774	2450 ± 20	73.72 ± 0.22	2426 ± 24	536calBC - 416calBC (68.2%)	741calBC - 687calBC (15.3%) 665calBC - 646calBC (4.1%) 550calBC - 406calBC (76.0%)
IAAA-142775	5840 ± 30	48.32 ± 0.18	5826 ± 29	4725calBC - 4667calBC (52.5%) 4661calBC - 4655calBC (2.9%) 4639calBC - 4617calBC (12.8%)	4781calBC - 4601calBC (95.4%)
IAAA-142776	2120 ± 30	76.77 ± 0.24	2206 ± 25	357calBC - 345calBC (8.3%) 322calBC - 282calBC (29.2%) 257calBC - 244calBC (8.0%) 236calBC - 206calBC (22.7%)	362calBC - 201calBC (95.4%)
IAAA-142777	2160 ± 20	76.47 ± 0.22	2180 ± 23	352calBC - 296calBC (50.5%) 229calBC - 221calBC (5.5%) 212calBC - 197calBC (12.2%)	358calBC - 278calBC (57.3%) 259calBC - 173calBC (38.1%)
IAAA-142778	5730 ± 30	49.02 ± 0.18	5714 ± 30	4589calBC - 4500calBC (68.2%)	4677calBC - 4637calBC (6.6%) 4619calBC - 4463calBC (88.8%)

1 放射性炭素年代(AMS測定)



〔図版〕 曆年較正年代グラフ (参考)



## Ⅶ 総 括

### 1 他遺跡との比較

今回調査を行った古宮市田老地区は、今まで本格的な調査事例は少なく、周辺の状況がデータ不足のまま調査に入った。参考までに、調査報告書等が出されているものは、小堀内地区の年金保養基地建設に関するもの以外はない。この報告書では、遺跡全体が調査されたのではなく、建物建設に絡んでごく一部の調査しか行われていない。ここでは縄文時代前期の遺物が出土しているが、炭焼き跡以外、遺構らしいものは報告されていない。平成25年度調査では乙部遺跡の調査を当センターで行ったが、この報告は略報本報告となっている。すなわち、遺構に関して言えば住居に該当するものはなく、土坑数基のみである。また、平成26年度調査では、青野滝北Ⅰ・同Ⅱ・同Ⅲ遺跡が行われている。この遺跡では、縄文時代中期を主体とする住居跡が18棟、土坑10数基、出土遺物は土器が大コンテナで25箱、石器が中コンテナで10箱である。遺物の中で特筆すべきものは滑石製の垂飾りで、これは原材料を持ち込んで、制作していたことをうかがわせる資料がまとめて出土している。さらに縄文時代中期を主体とする土器群の中に、Ⅱ遺跡では縄文時代早期の土器が若干ではあるが出土している。早期に該当する遺構は調査範囲の中からは検出できなかったが、この遺跡の付近には存在するであろう。

翻って本遺跡の調査範囲は、遺物及び放射性炭素の化学分析より、縄文時代前期の遺物・遺構と同晩期末葉から弥生時代前期、同中期にかけての遺構・遺物が出土しており、該期の生活の場であったらしい。前述の青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡との距離は直線で南北軸の1km程北に位置する。

### 2 遺構について

遺構数は住居跡17棟中、縄文時代前期に該当するものは4棟で、これらはやや隅丸形状の屋内に炬を持たないものである。残り11棟は縄文時代晩期末葉から弥生時代にかけての住居跡となる。これらは屋内に円形の石囲炉を持ち、そのほとんどが壁溝を巡らせている。他2棟は不明である。

土坑については17基検出したが、2基ほど、副穴をもつものがある。このうち1基はプラスチック土坑の崩落したものと判断した。根拠は埋土の堆積の様子と、副穴の深さが浅いことである。もう1基は円形でしっかりした副穴を持ち、これは陥し穴状土坑と判断している。この陥し穴状土坑の埋土には、中位に長軸50cm、短軸30cm、厚さ15cmの礫が斜に埋まっておりさらにその下に人頭大の多少凹凸のある円礫が入っていた。このように重い礫を埋土にもつ土坑は他にももう1基あった。また調査終了間際に精査した最後の土坑は埋設水道管の直下で全体像は精査できなかった。これは、検出面からは浅い掘り込みをもつ焼成土坑と思われるが不明遺構として報告してある。この土坑の炭化物は放射性炭素同定で縄文時代前期に該当する年代が出ており、該期の住居跡との関連が推測される。

炉跡については炉石が確実に残存するものを炉跡とし、それ以外の、焼土だけが残っているものは焼土遺構とした。炉跡は3基、焼土遺構は6基であるがこのうちのSX09は前述の縄文時代前期に該当するものである。この中には住居に伴うものも存在すると思われるが、検出時点で周囲にプランを検出できなかった。

### 3 遺物について

出土遺物は土器が大コンテナ10箱、石器が中コンテナ7箱（大コンテナ換算5箱）である。内容についてはそれぞれの項目で詳述しているの、ここでは概要だけ述べるにとどめる。土器については、縄文時代前期と同晩期末葉から弥生時代の遺物が同一遺構から出土している事例もあり、後世の土地改変の人為的作用が多かったことがうかがえる。石器について言えば、土器の出土量に比較して石器の率が多い。特に石匙の出土が多く、逆に石鏃、特殊磨石、磨製石斧、石皿の出土が少ない。石器について時代を特定できるものは少ないが、磨製石斧で、乳棒状石斧が数点出土しており、このことが弥生時代の遺構と関わりを持つと思われる。特筆すべきは黒曜石製の石槍（285 図版42

写真図版46）が完形で出土していることである。本遺跡で剥片石器、剥片すべてで、石質はほとんどが頁岩であり、黒曜石のものは1点もない。この完形の石槍1点のみである。さらにこの石槍を模倣するかのよう、頁岩製の石槍（284 図版 42 写真図版46）が出土している。残念ながら、これは基部を欠くが、残存値はうり二つで類似している。黒曜石製の石槍はここで作られたものではなく、製品として持ち込まれた可能性がうかがわれる。ただしこれが出土した地点は、調査範囲の最南端の遺構が見当たらない箇所である。トレンチ掘削中に出土したもので、デボの形跡もとらえられなかった。石製品は3点出土しており扁平な石刀と棒状の石剣の一部を掲載した。

### 4 ま と め

本遺跡は田老地区における、縄文時代晩期末葉から弥生時代にかけての資料を提供するものと思われる。弥生時代といっても、西日本と違って水田耕作の跡は見られない。現在でも、遺跡の周辺には水田耕作は見られず、耕地のほとんどは畑作である。しかも、冷涼な気候で、夏にはやませ（山背）の影響が大であり、秋には他地区より早く降雪も見られる。このような条件下で、弥生時代の定義とされる水田耕作は不可能と思われる。要は縄文時代と変わらない生活が営まれていたであろうことが推測される。出土遺物を詳しく分析することにより当時の生活の様子をうかがい知ることができるとはなからうか。そういった意味からも、今回の調査結果は、この地域での縄文時代晩期末葉から弥生時代前期にかけての資料を提供することにより、今後の調査による比較対象の資料として役立つものと思われる。

#### 参考・引用文献

- 鈴木道之助 1991 『図解 石器入門書典—縄文』 柏書房
- 岩手県企画開発室 1973 『土地分類基本調査』 田老
- (財)岩手県埋蔵文化財センター 1983 『小堀内1 遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第52集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『本内II 遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013 『大畑田遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第606集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2014 『平成25年度発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第630集

写 真 图 版





遺跡遠景(南から)



遺跡遠景(画面左が北)

写真図版1 遺跡遠景



完掘(南東から)



断面(南から)



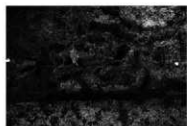
断面(東から)



炉 全景(南から)

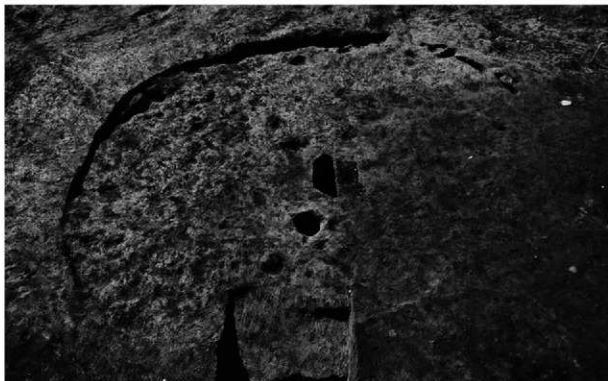


炉 断面(南から)



旧炉 全景(北から)

写真図版2 S101竪穴住居跡



完掘(東から)



断面(南から)



断面(東から)



炉 断面(南から)

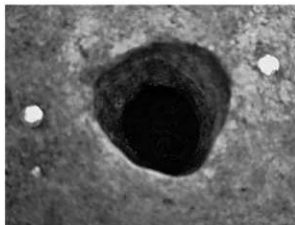
写真図版3 SI02竪穴住居跡



完掘(西から)



断面(南から)



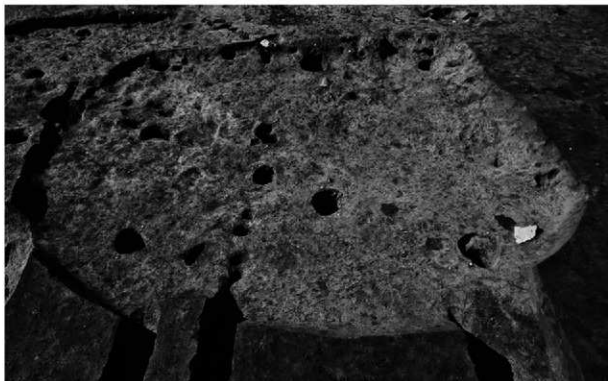
PP01完掘(南から)



PP02完掘(南から)

写真図版4 S103竪穴住居跡





完掘(東から)



断面(南から)

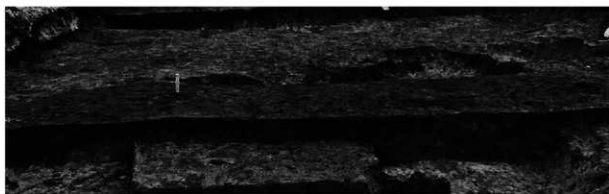


断面(東から)

写真図版5 S104竪穴住居跡



完掘(東から)



断面(北から)



調査風景

写真図版6 SI05竪穴住居跡



S106・07・12完掘(西から)



断面(南から)



調査風景

写真図版7 S106・07竪穴住居跡



SI08・14 完掘(南から)



断面(南から)



SI14 炉 全景(西から)



SI14 炉 断面(西から)

写真図版 8 SI08・14 竪穴住居跡



完掘(東南から)



断面(東から)



断面(南から)



完掘(東から)



断面(南から)



断面(西から)



炉 全景(南から)



炉 断面(南西から)

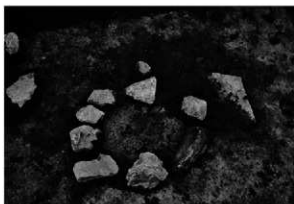
写真図版10 SI10竪穴住居跡



完掘(西から)SI06-07を含む



断面(西から)



炉 全景(西から)



炉 断面(西から)

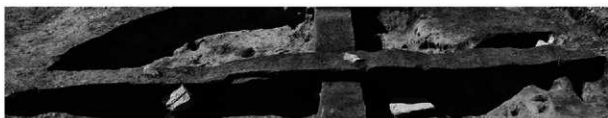
写真図版11 SI12竪穴住居跡



SI13-16 完掘(西から)



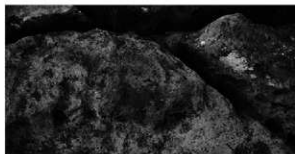
断面(南から)



断面(東から)



SI13 炉 全景(西から)



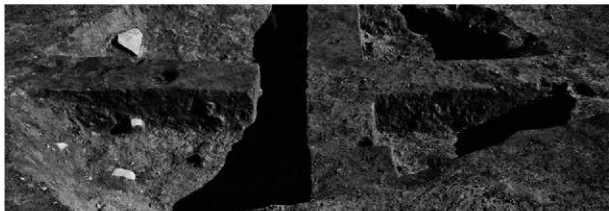
SI16 炉 全景(南から)

写真図版12 SI13・16竪穴住居跡

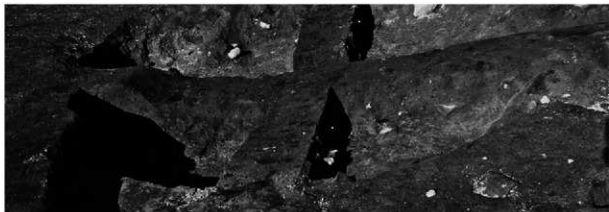




完掘(北西から)

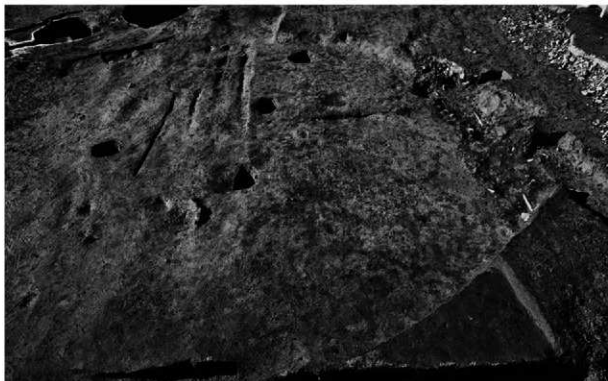


断面(西から)



断面(南から)

写真図版13 SI15竪穴住居跡



完掘(東から)



断面(東から)



断面(南から)

写真図版14 SI18竪穴住居跡



完掘(南から)



完掘(東から)



炉 完掘(南から)



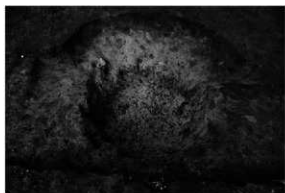
炉 断面(南から)



SK01 完掘(南から)



SK01 断面(北から)



SK02 完掘(南から)



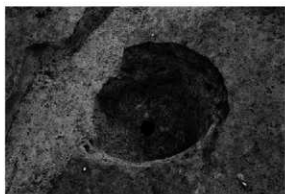
SK02 断面(南から)



SK03 完掘(南から)



SK03 断面(西から)

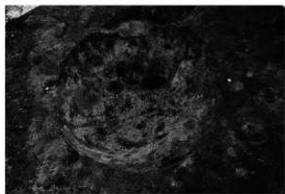


SK04 完掘(北から)

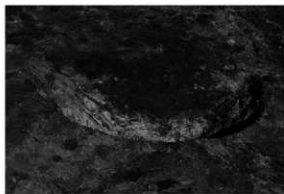


SK04 断面(東から)

写真図版16 SK01~SK04土坑



S K05 完掘(北から)



S K05 断面(南から)



S K06 完掘(東から)



S K06 断面(東から)



S K07 完掘(東から)



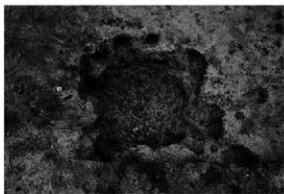
S K07 断面(北から)



S K08 完掘(東から)



S K08 断面(南から)



SK09 完掘(南から)



SK09 断面(北から)



SK10 完掘(東から)



SK10 断面(西から)



SK11 完掘(東から)



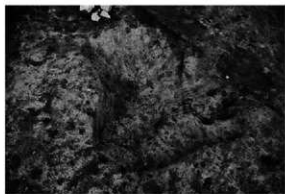
作業風景



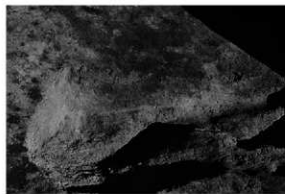
SK12 完掘(東から)



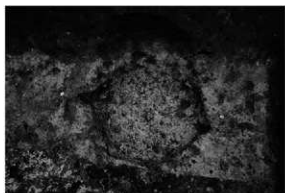
SK12 断面(東から)



SK13 完掘(南から)



SK13 断面(南から)



SK14 完掘(南から)



SK14 断面(南から)



SK15 完掘(東から)



SK15 断面(東から)



SK16 完掘(東から)



SK16 断面(東から)



SK17 完掘(東から)



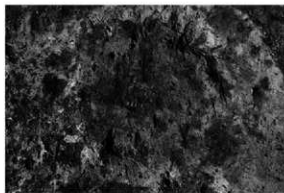
SK17 断面(東から)



SX01 検出状況(東から)



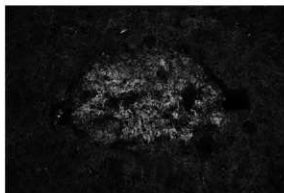
SX01 断面(東から)



SX02 検出状況(南から)



SX02 断面(東から)



SX03 上位の焼土(南から)



SX03 下位の石囲炉(南から)

写真図版20 SK17土坑、SX01～SX03焼土遺構・炉跡

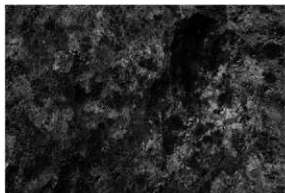




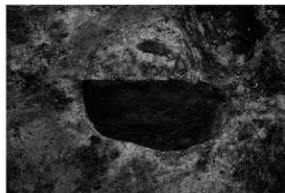
S X04 検出状況(西から)



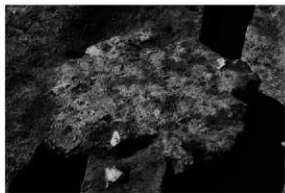
S X04 断面(南西から)



S X05 検出状況(北から)



S X05 断面(北から)



S X06 検出状況(東から)



S X06 断面(南から)



S X07 検出状況(南から)



S X07 断面(西から)



S X08 検出状況(東から)



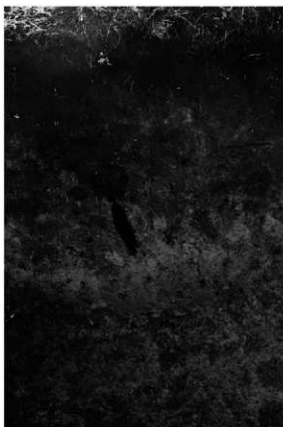
S X08 断面(東から)



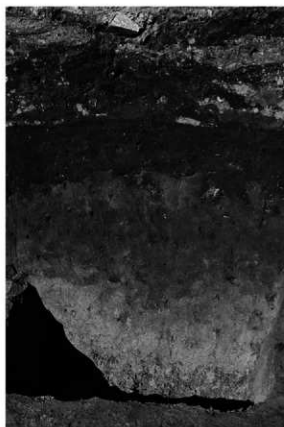
S X09 完掘(西から)



S X09 断面(北から)

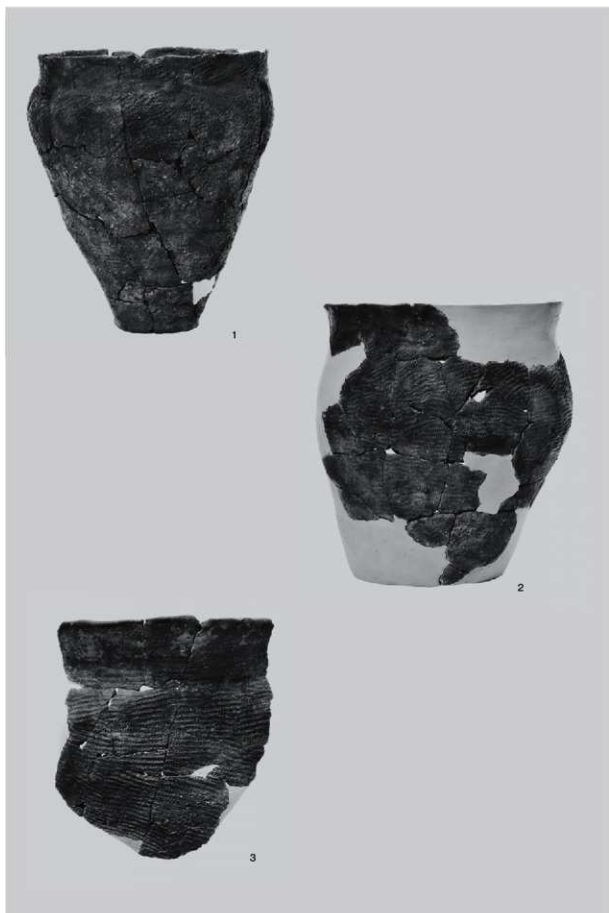


基本土層(南端部)

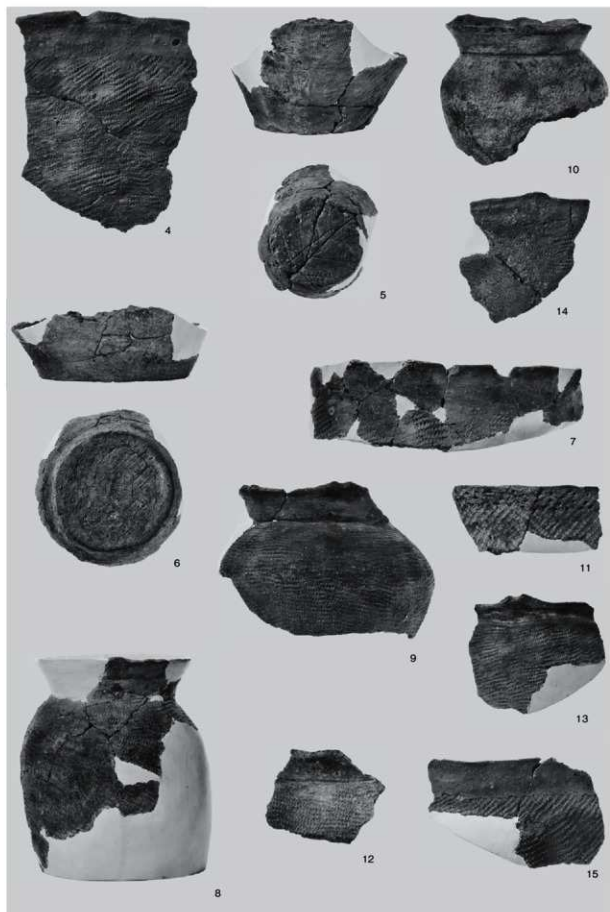


基本土層(北端部)

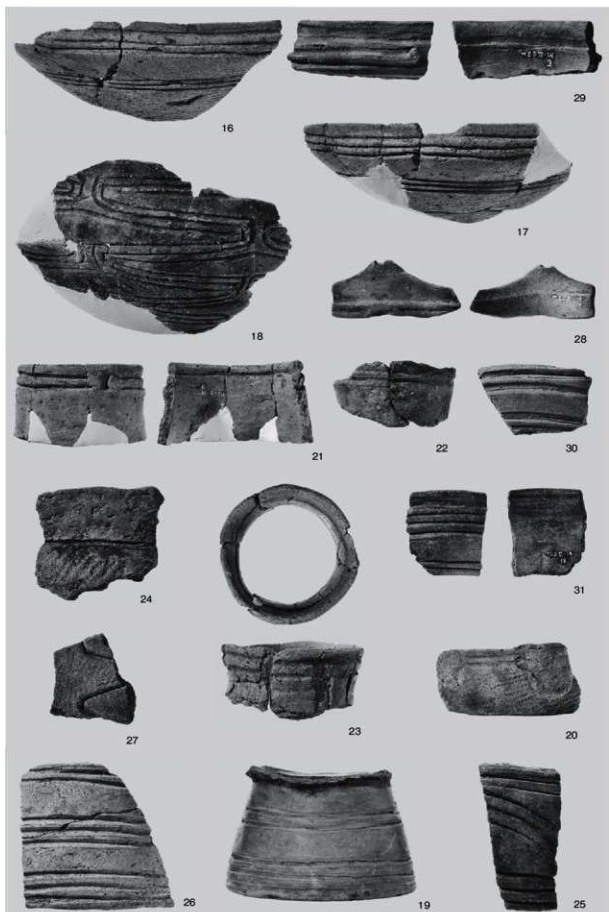
写真図版22 SX08焼土遺構、SX09不明遺構、基本土層



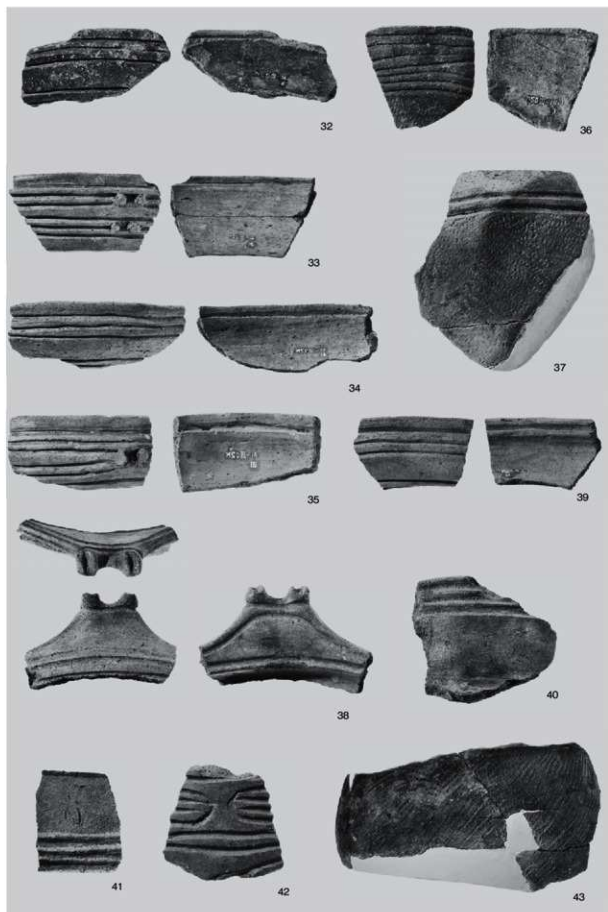
写真図版23 遺構内出土土器 (1)



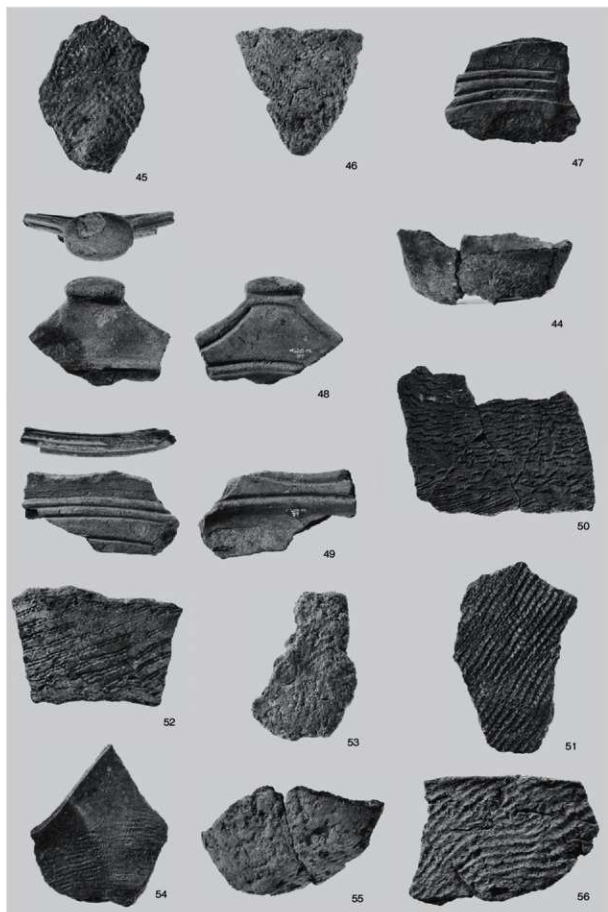
写真図版24 遺構内出土土器(2)



写真図版25 遺構内出土土器 (3)



写真図版26 遺構内出土土器(4)

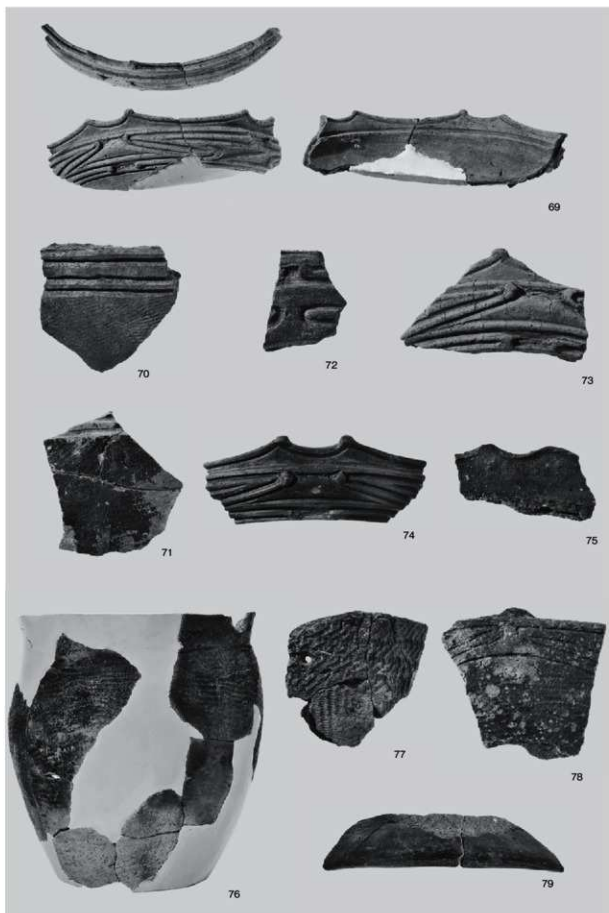


写真図版27 遺構内出土土器 (5)

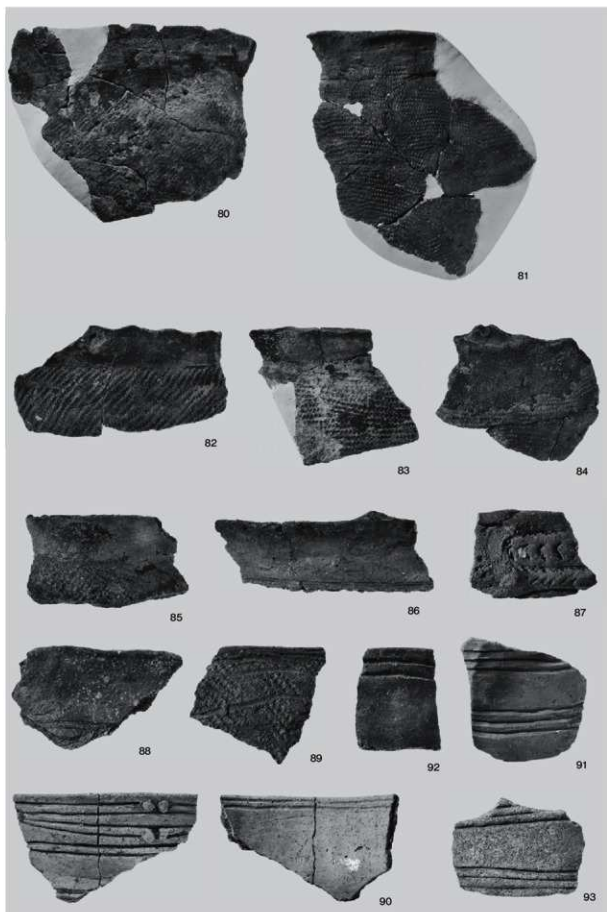


写真図版28 遺構内出土土器(6)

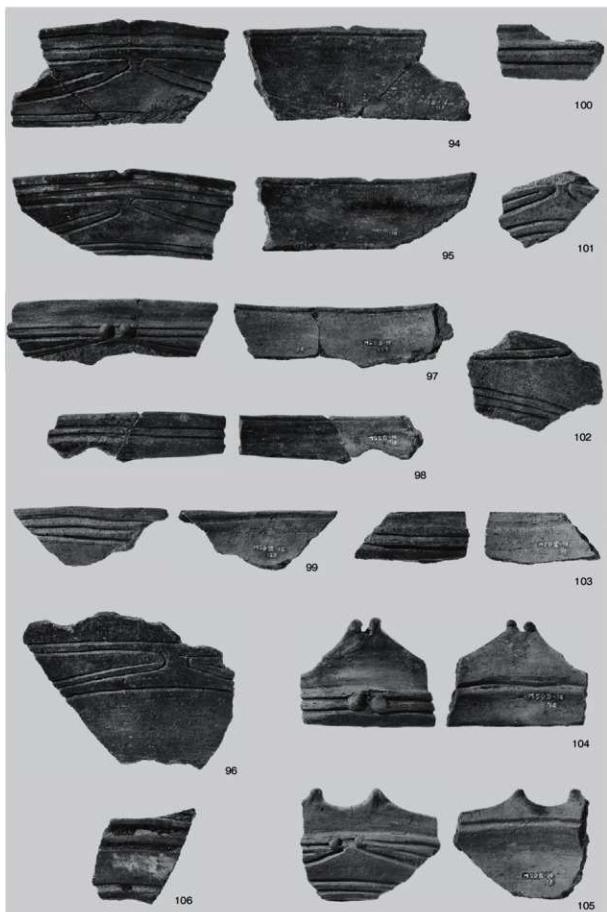




写真図版29 遺構内出土土器(7)



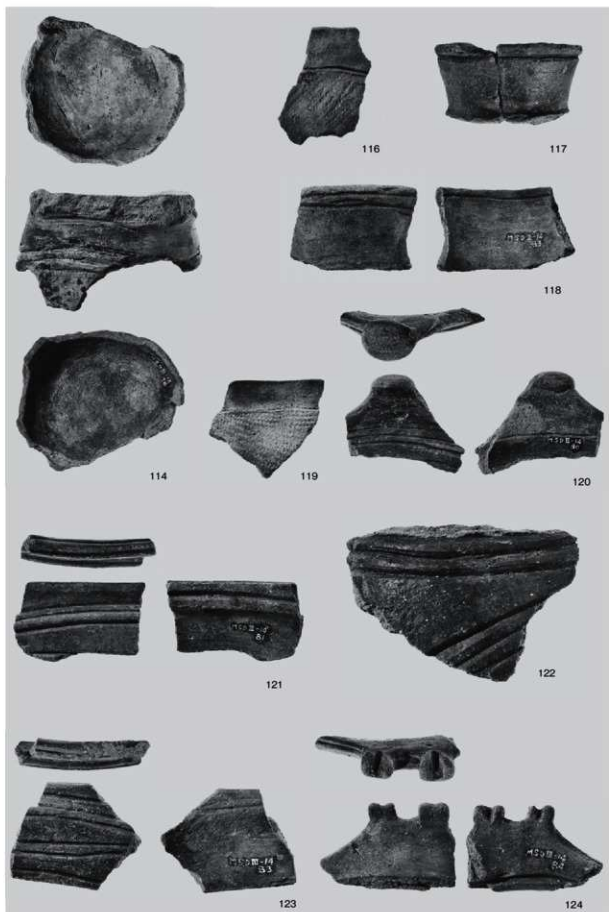
写真図版30 遺構内出土土器(8)



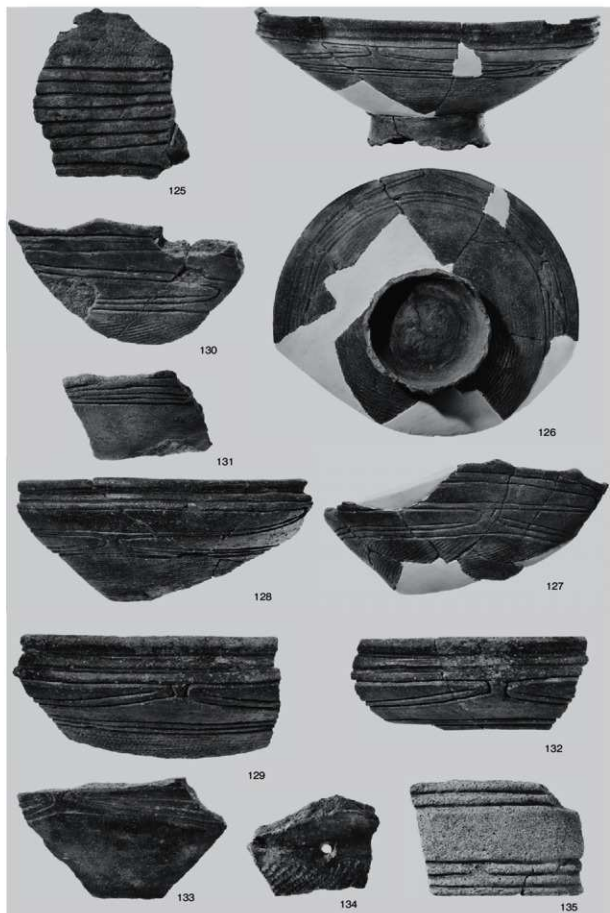
写真図版31 遺構内出土土器 (9)



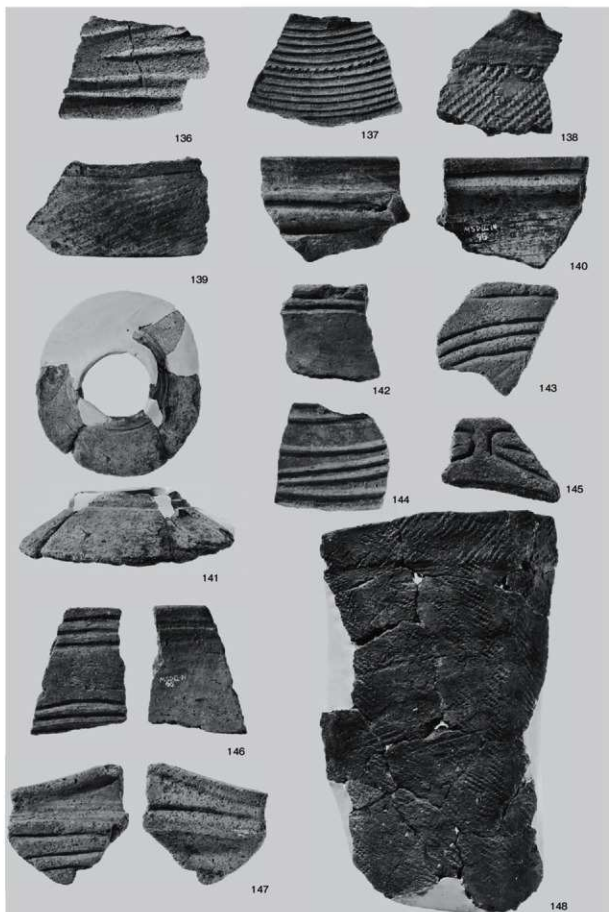
写真図版32 遺構内出土土器 (10)



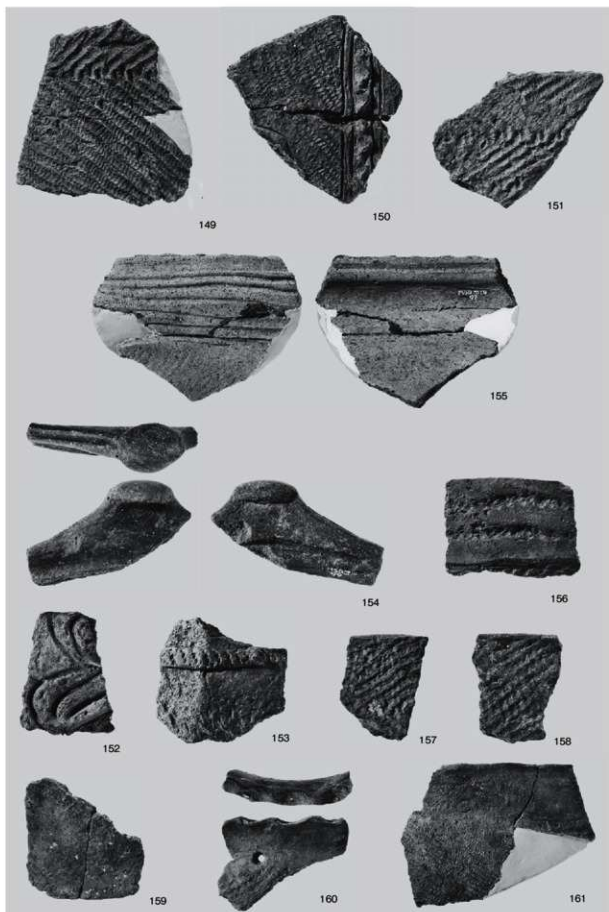
写真図版33 遺構内出土土器 (11)



写真図版34 遺構内出土土器 (12)

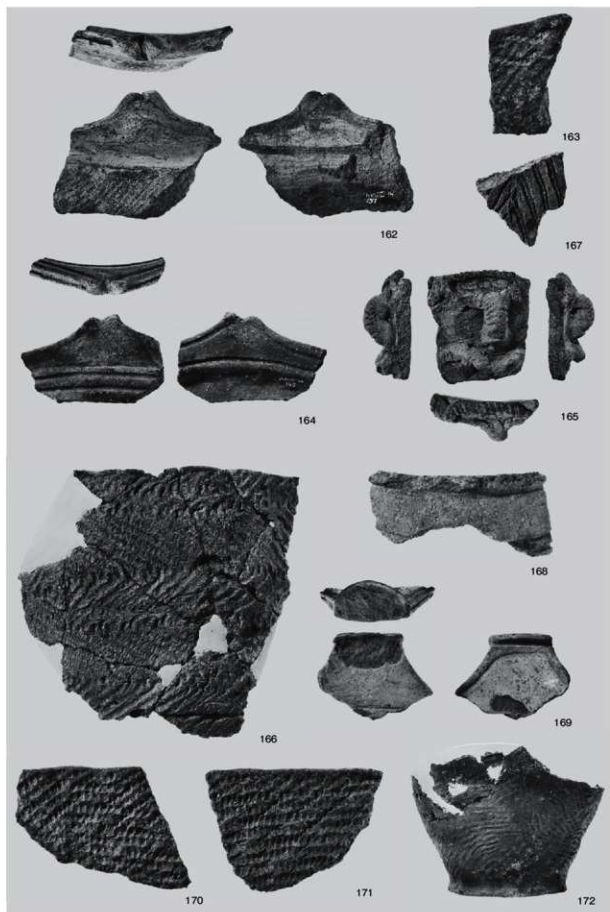


写真図版35 遺構内出土土器 (13)

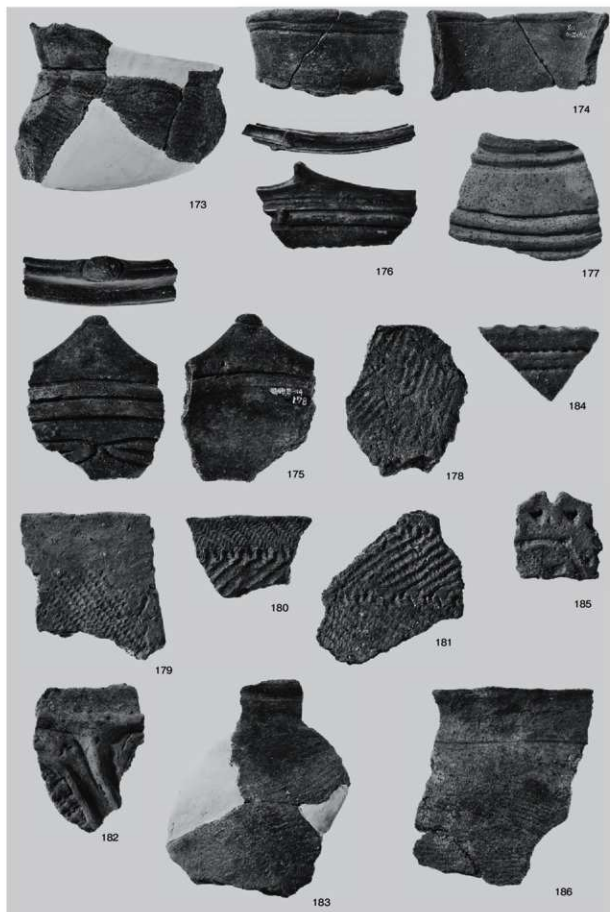


写真図版36 遺構内出土土器 (14)

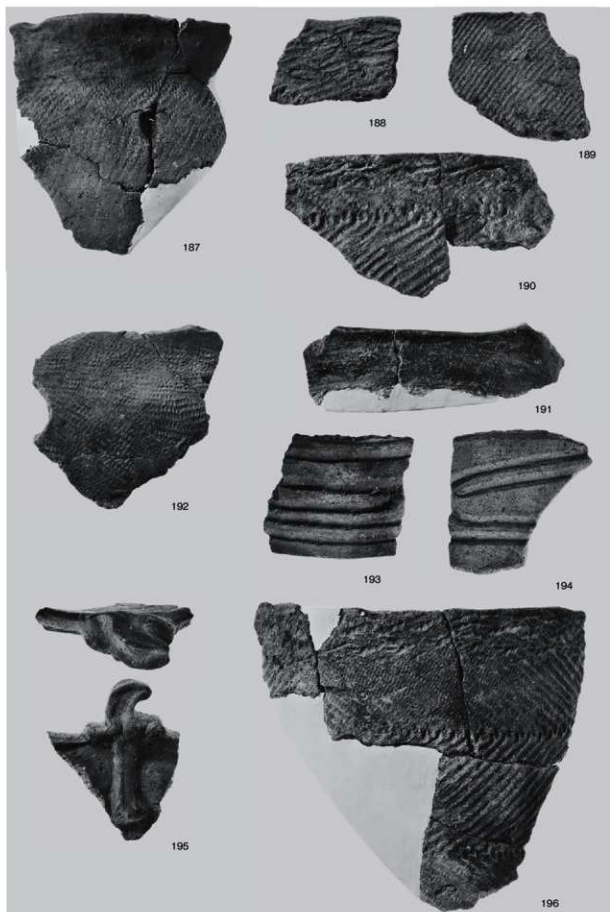




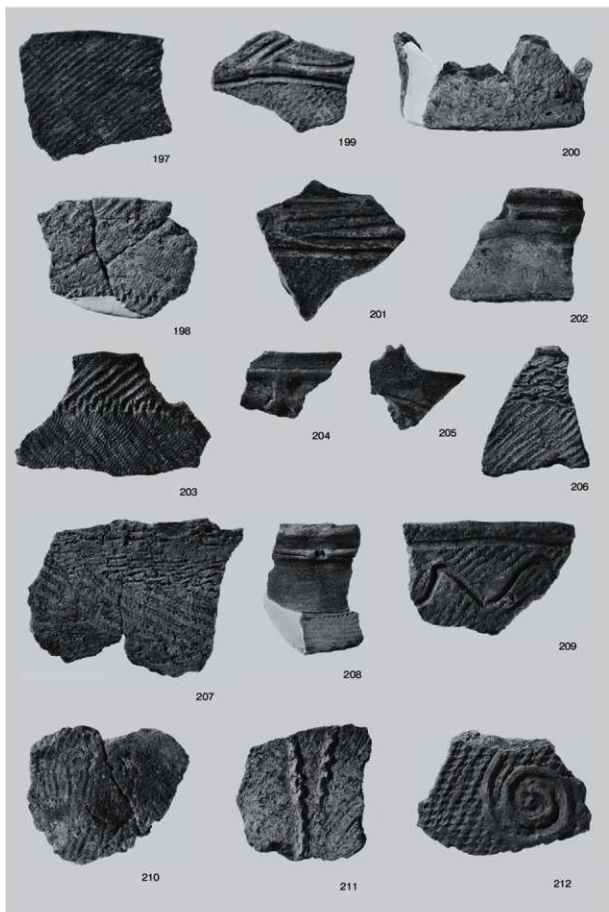
写真図版37 遺構内出土土器 (15)・遺構外出土土器 (1)



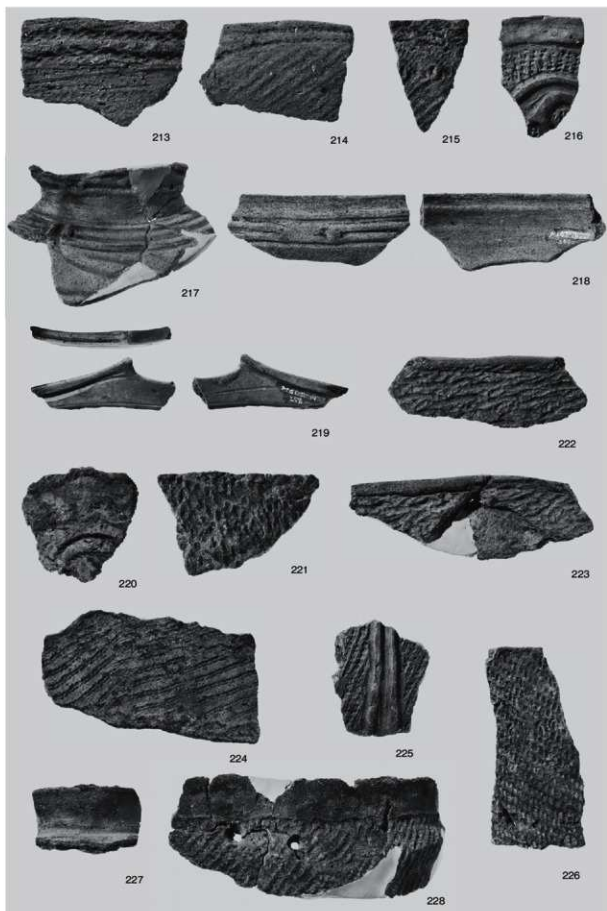
写真図版38 遺構外出土土器(2)



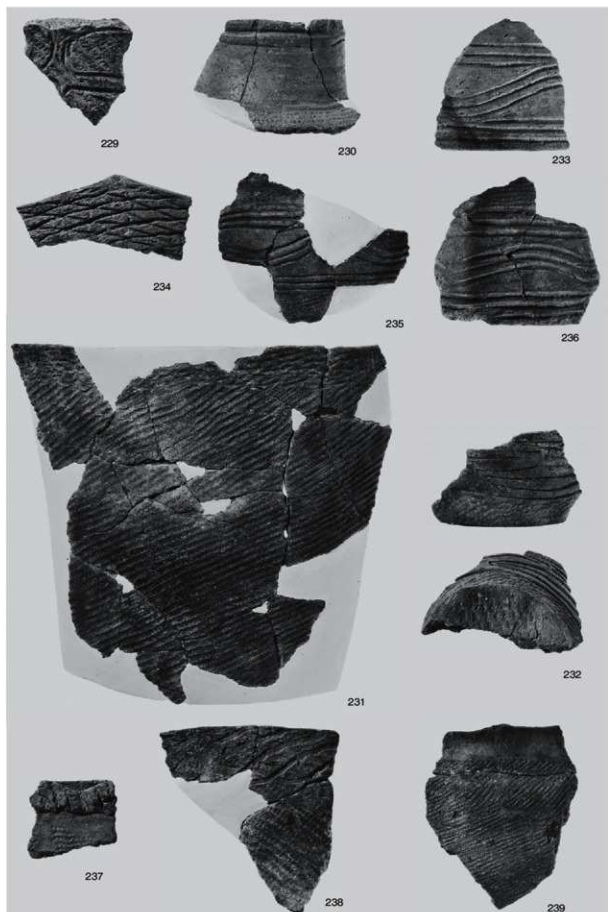
写真図版39 遺構外出土土器 (3)



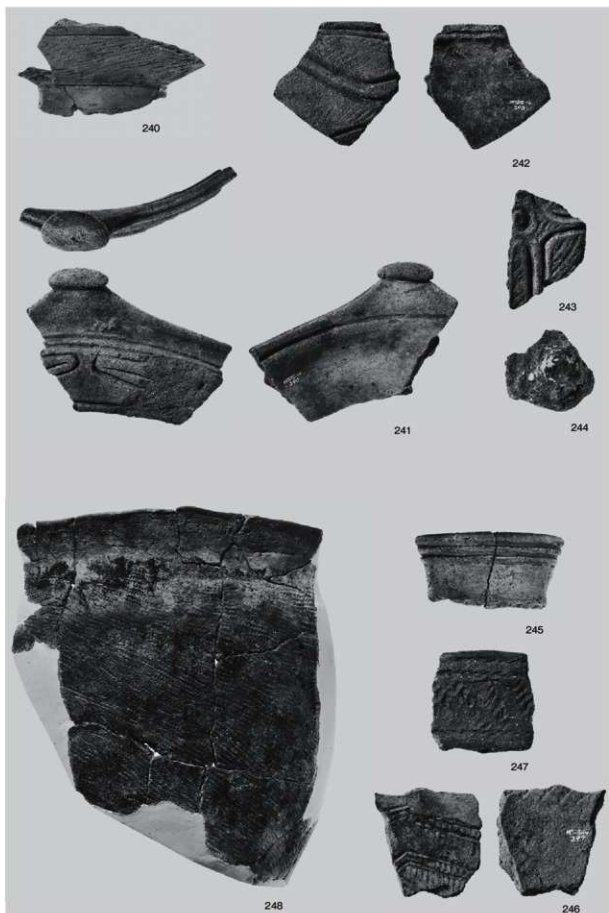
写真図版40 遺構外出土土器(4)



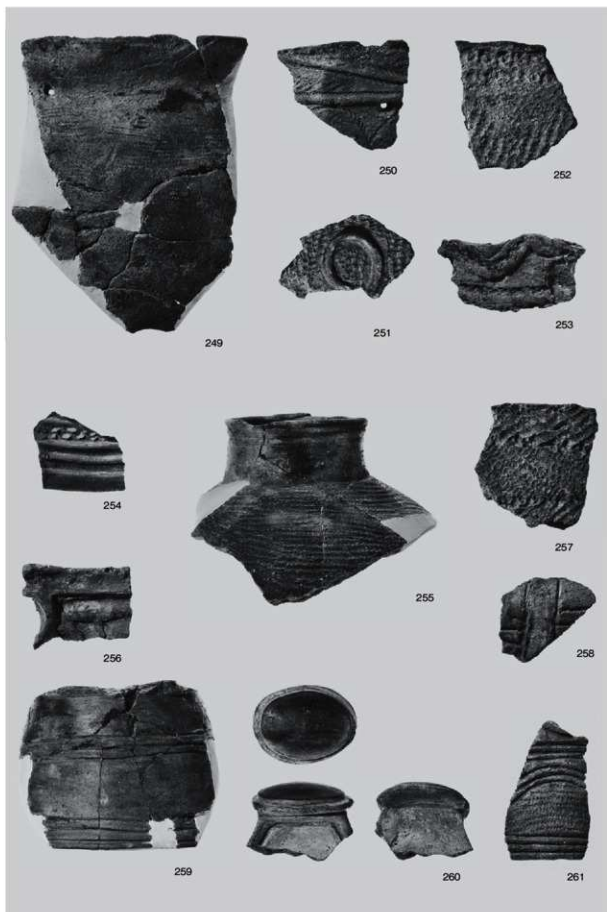
写真図版41 遺構外出土土器 (5)



写真図版42 遺構外出土土器(6)

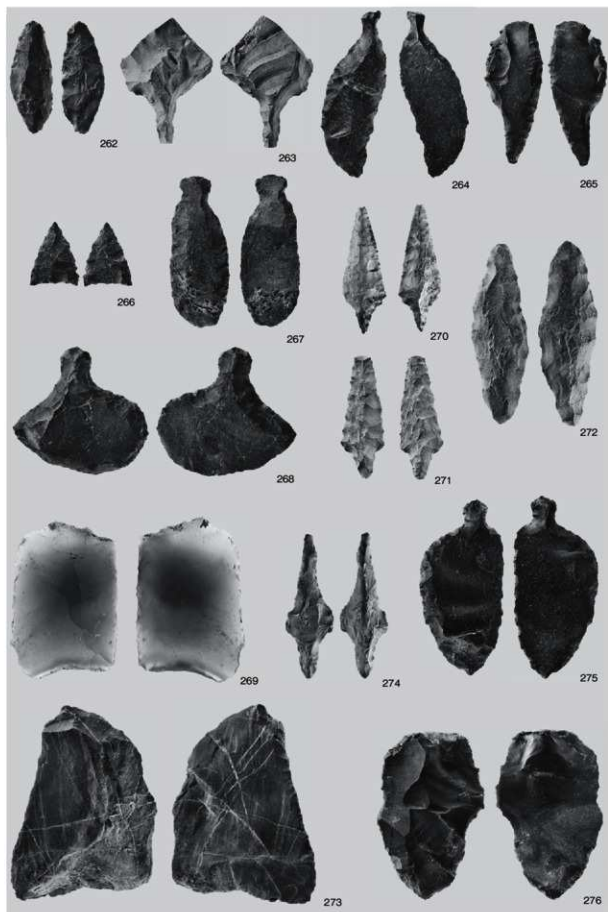


写真図版43 遺構外出土器 (7)

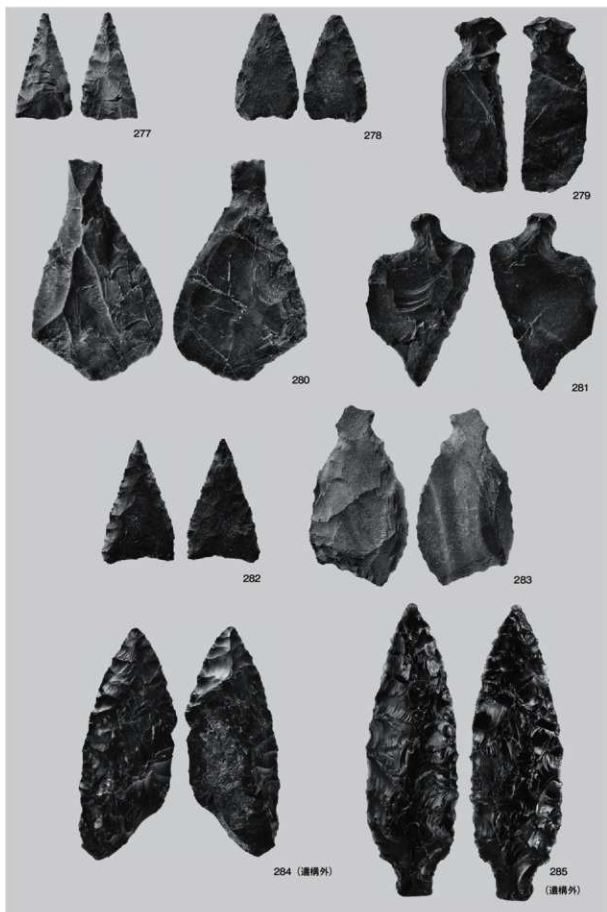


写真図版44 遺構外出土土器(8)

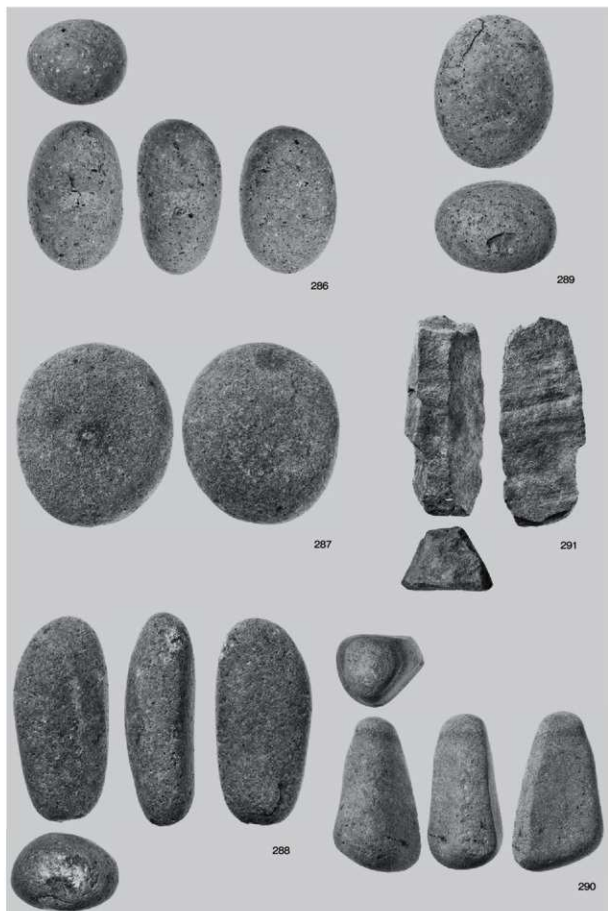




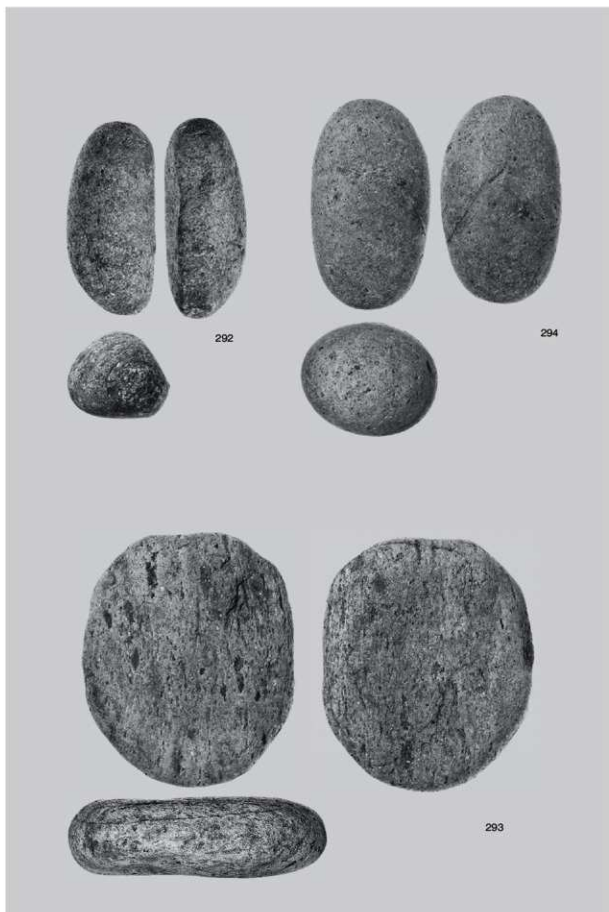
写真図版45 遺構内出土石器 (1)



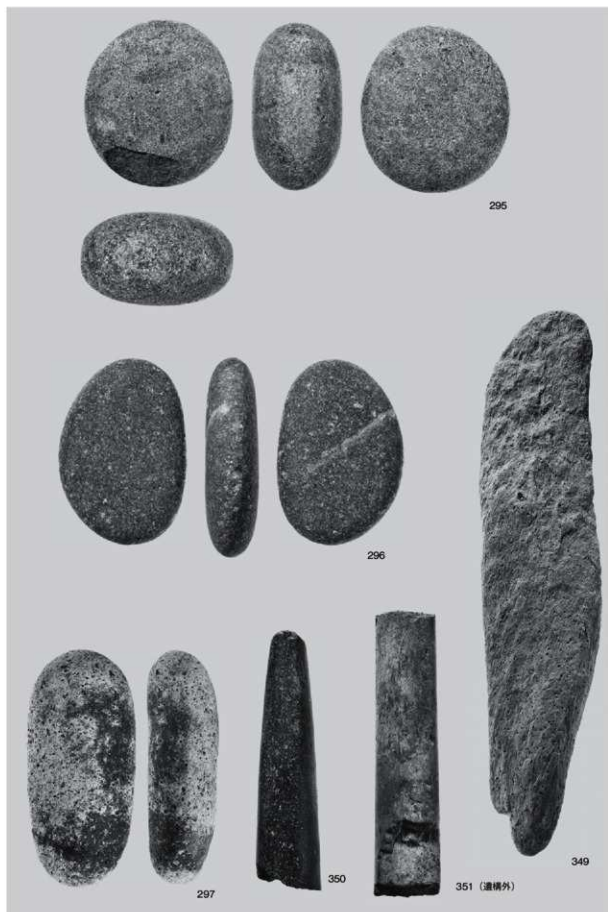
写真図版46 遺構内出土石器 (2)



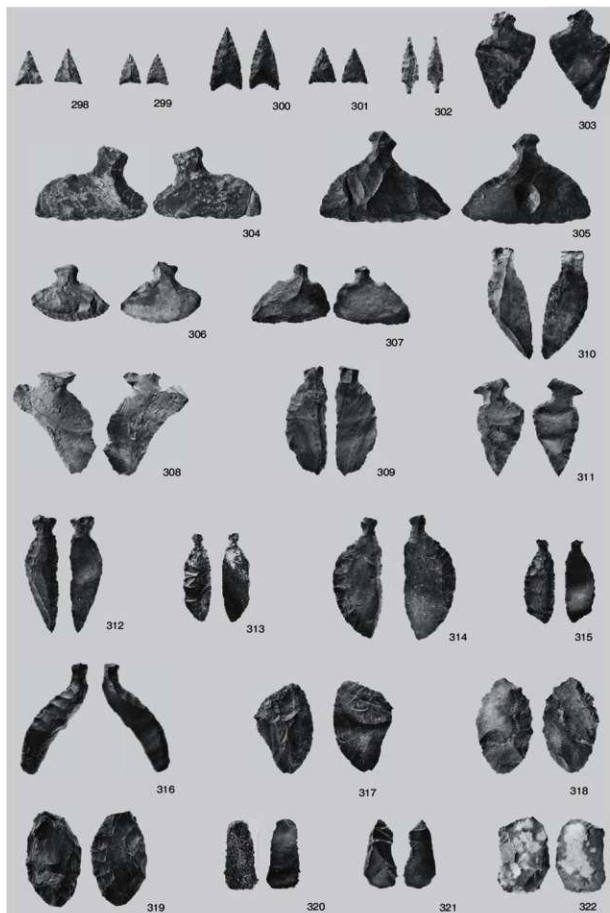
写真図版47 遺構内出土石器(3)



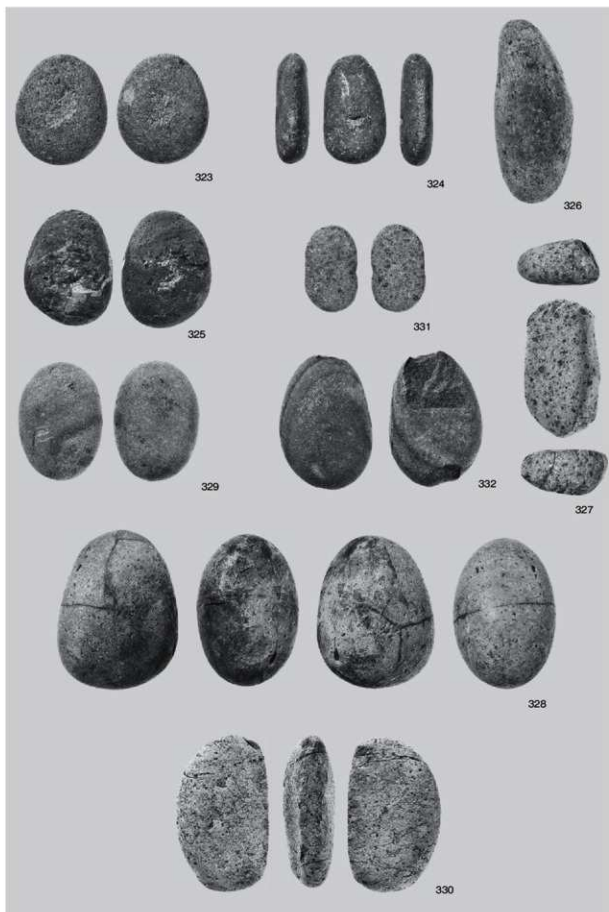
写真図版48 遺構内出土石器(4)



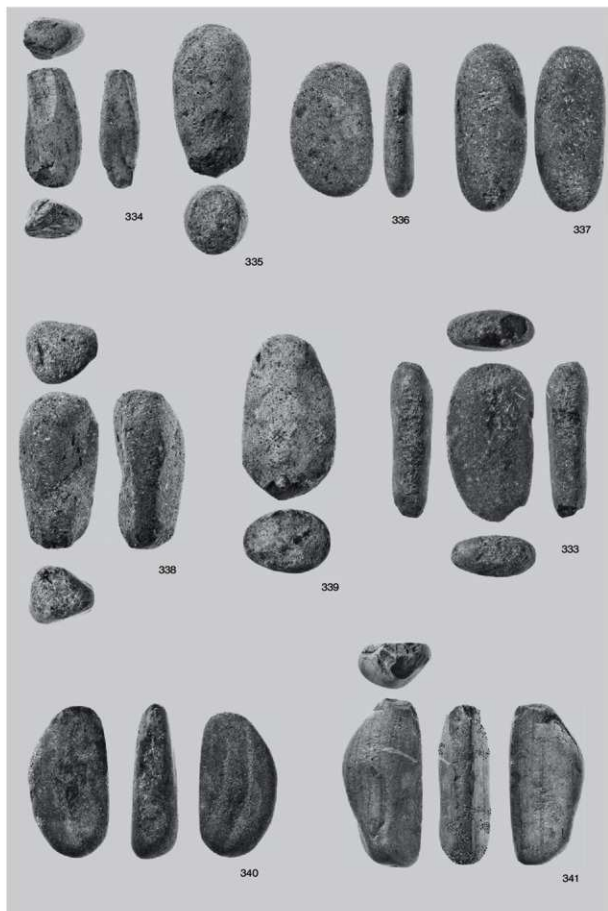
写真図版49 遺構内出土石器・石製品 (5)



写真図版50 遺構外出土石器(1)

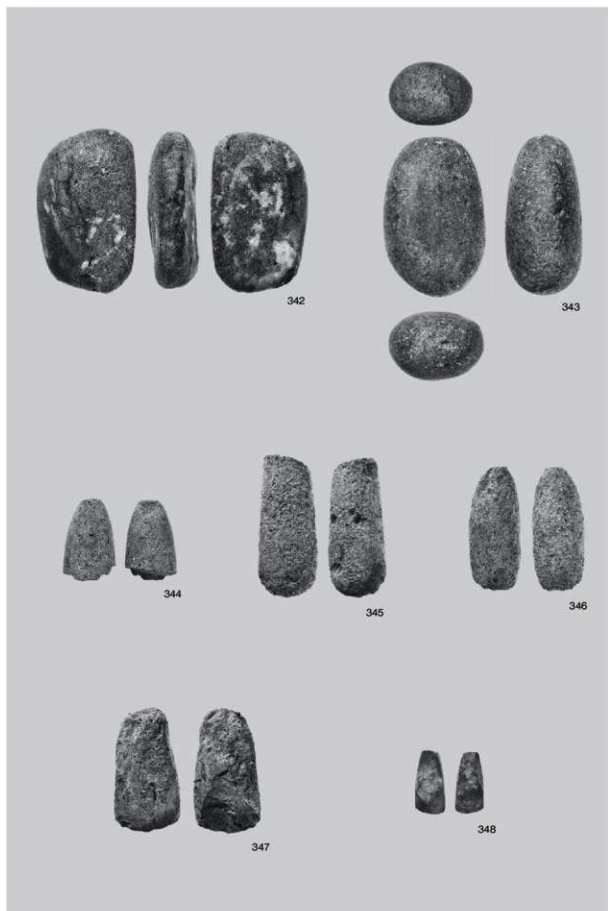


写真図版51 遺構外出土石器(2)



写真図版52 遺構外出土石器(3)





写真図版53 遺構外出土石器 (4)

## 報告書抄録

ふりがな	むかいしんでん3いせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書						
副書名	三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査						
巻次							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第657集						
編著者名	鈴木 博之 古館 貞身						
調査機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL. (019) 638-9001						
発行年月日	2016年2月29日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ° °	° ° °			
向新田Ⅲ遺跡	岩手県宮古市 田老字向新田 164-22ほか	03202 KG74-2133	39度 47分 13秒	141度 57分 54秒	2014.09.16 ～ 2014.12.05	2,005㎡	三陸沿岸 道路建設 事業関連 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
向新田Ⅲ遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 弥生時代	竪穴住居跡(前期) 4棟 竪穴住居跡(縄文時代晩期末 葉～弥生時代前・中期) 11棟 竪穴住居跡(時期不明) 2棟 不明遺構 1基 土坑 17基 焼土遺構・炉跡 8基		縄文土器 弥生土器 石器 石製品	土器に比して石器 の出土の割合が多 い。 石匙が多く出土し ている。	
要約	田老地区での本格的な調査事例は少なく、よって周辺状況が未知のまま調査に入 った。近隣の青野滝北Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の調査範囲では、縄文時代早期の土器の出土と、 複式炉に代表される同中期後葉の集落跡であることが平成26年度調査でわかった。 本遺跡はそれらと共通する点はなく、縄文時代前期の土器を伴出する竪穴住居跡と 同晩期末葉～弥生時代前期にかけての住居跡及びそれに伴う土器が出土している。 また青野滝北Ⅰ遺跡と対比すると、土器の出土量と石器の出土点数を比較した場合、 かなりの率で本遺跡の石器出土量が多い。特に石匙の出土が多い。また唯一の黒曜 石製の石槍が1点だけ出土しており、黒曜石製の剥片及び石器は皆無なため、製品 として持ち込まれたものと思われる。 出土遺物は土器が大コンテナ10箱、石器が大コンテナ5箱である。石製品は3点 である。						

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第657集

## 向新田Ⅲ遺跡発掘調査報告書

三陸沿岸道路建設事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成28年2月22日

発行 平成28年2月29日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地  
電話 (019) 638-9001

発行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所  
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号  
電話 (0193) 71-1716

(公財)岩手県文化振興事業団  
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号  
電話 (019) 654-2235

印刷 (株)杜陵印刷  
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ二丁目22番地50号  
電話 (019) 641-8000